增補改正

俳諧歳時記栞草

二

へ 5
678
2

明治三十六年十一月五日
坪井為蔵氏寄贈
利門 678 巻 2

増補俳諧歳時記草

江戸 曲亭主人纂輔
藍亭青藍増補

夏

漢書律暦志 太陽者南方、南任也、陽任養物、於時為夏、夏假也、物假大乃宜、平。

炎帝 帝 淮南子 南方火也、其帝炎帝、其佐朱明、執衡而治夏。

祝融 神 禮月令 夏月其帝炎帝、其神祝融、祝融顓頊氏之子、曰黎、為火官、正者。

昊天 纂要 天曰昊、天言氣浩汗。

朱明 爾雅 夏為朱明、一曰長嬴、註氣赤而光明、故曰朱明。

蒸炒 韓文 自従五月困暑湿、如坐蒸甑、豊燕炒、説苑 湯之時大旱七年、雒拆川竭、煎沙爛石。

四月

仲呂 律月令 律、仲呂、高誘註曰、陽散在外、陰実在中、所謂蛟陽成功。

立夏 孝経緯 穀雨後十五日斗指巽為立夏。

蹂踵 通俗志作蹂蹟 廣義

蹂躪四月名也、**小満** 月令廣義 立夏後十五日斗指巳為小満、四月中、小満者物長于此少得盈満也、

余月 爾雅疏釈 四月為余、

乾月 月令廣義 四月卦乾、五陽決退一陰陰復而為純陽乾天也、

正陽月 西京雑記 陽德用事抑氣皆陽為正月、

己月 晉書樂志 夏正建寅陽月、為平月、故四月為巳、

首夏、初夏、孟夏 元帝纂要 卯花月 卯月釈名 波流花 故こうのさつき月と臣又、あのこうづき花のこう月 暑して、卯月ともいふ、

花残月 蔵王 ときさし春のあこう 中山ふゝ志げしがはと乃

得鳥羽月 蔵王 ふぢの花夏ふかくなるれく山の 後鳥羽院 下ちやまさんえとうたの月 有家

五月

蕤賓 律 律暦志 蕤繼也、賓導也、言陽始導陰氣使繼養物也、位于午在五月、

芒種 節 月令廣義 孝經緯云、小満後十五日、斗指酉為芒種、五月節、言有芒之穀可播種也、

夏至 中 同上 芒種後十五日、斗指午為夏至、言万物于此假大而極至也、

仲夏 仲、同中、五月夏中也、

茂林、蔚林 纂要 木曰蔚林 周礼注 茂林也、

皐月 爾雅疏釈 五月為皐月、五月得戌曰厲皐、

鶉月 蕤賓午之氣也、五月建焉而辰有鶉首、五鶉首者星名、鶉首月之暑乎、

橘月 蔵王 たが代 ふるさとの月こゝろぶかくうつりかはるこの月の名とゝなる

月こえぬ月 蔵王 晴るゝみえぬ 空ようや月ぞ月とさあへ

早苗月 五月八農人方苗と捕む故ゝ 顕昭 早苗月と云今暑しこ早月と云

六月

林鍾 律 律暦志 林君也、言陰氣受任助蕤賓君主種物使長揪盛也、位於未在六月、 月令六月、律中林鍾、生林衆鐘聚也、白虎通言、万物成熟種類多也、

小暑 節 月令廣義 孝經緯云、夏至後十五日、斗指丁為小暑六月節、

暑 中 同上 小暑後十五日、斗指未為大暑、六月中、日在柳、字彙九、

季夏 礼記 季夏之月、

左傳 齊侯使連諸管至末月、曰季月、

瓜期 父戍葵丘、瓜時而往、及代、

且月 尓雅 六月為且、疏云、六月得己則曰、則且、且于余切、

遯月 易義 遯退避也、為卦二陰浸長陽當退避、故為遯、六月之卦也、

朔月 年浪草 云、季吟、

増山井 六月の異名とす、礼記曰、朔月少牢五俎四簋、云、此月朔の義、未詳其義、仍てこれを闕く、

陽 年浪草 云、増山井 云、疑らくは誤り、按、陽、賜の作べし、

氷 月令廣義 賜氷、石季童于氷臺、戚氷三伏之日、以賜大臣、又林滋賜氷の賦あり、

風待月 蔵玉 松ゆけば床居とりてくるはやし風待月の夜の

鳴神月 同上 夕立は雷の鳴やらぐ

うとさよ 顕昭

ある神の月ぞとありや夏や

くらん 定家

常夏月 同上 ちりはてぬ妹ゆくさもとなる花のさかりと 後鳥羽院

こも月 奥儀抄 農事ともこもりたくはみをしづきとも云、〇一説に、此月暑熱烈しく、水泉滴尽くるが如し、水無月と云、ごとくの説あれども、なほ信じがたし、又荷田東麿、呂は、鳴る月の上下を略して、こもり月と云ふ、此説も姑くしばらく存ず、

四月

虎杖競 朔日 養蠶論 貴布禰の御神事、此日加茂の氏人、騎馬にて詣づ、帰る時、市原野の連理の芝にて虎杖と争ひ、其大小多少を論ず、例のごとみて甚奥、

稲荷祭 中卯日〇山城国紀伊郡、紀事 四月卯日二つあり、初の卯日を用ふ、新御供、社家松本氏調進、神輿五基供ぶ、己の刻ばかりに、神輿五基御旅所の西に出で、東寺の南門の内に入る、此所に於て床とりて、五社の神輿もの〳〵南に向ひて、其上に安置す、寺僧切の〳〵御供所に侍すれども、於て東寺の役人甲冑を着し、左手に長刀を横ふ、右手に御供餅をささげ、東寺地人の妻四人寺中頭屋院より雑品供物を唐櫃に盛り、頭上にかつぎ来る、神輿毎に供ずる、寺僧一人壇上に進出で、奉幣を又護方を修す、一座終りて後、社家氏子供

奉し、北の方大宮通りと経く、五条松原より、五条の橋と過ぎ大和大路を本山に入る○

龍頭 太記云羽倉家

譜 垣武天皇御宇の人荷田氏の祖く山城国稲荷祭の時神輿のさきへかくる面と龍頭太とあり、その外の祭の假面、王の鼻と称す、龍頭太ハ田中の社の神職、この面則ち龍頭太が作なりと云へり、もと名づけ云ふ

伊勢神衣祭 俳諧歳時記云羽倉家

十四日 **公事根源** 神衣祭ハ神祇令おのせさう、神服部潔齋して、三河の赤引の神調の糸と以て神衣ともる、又麻績連と云氏人、麻とうみて和妙荒妙と織て、神明か部、神祭の条に奉るとて、神衣の祭とて、延喜式に

忌さす

岩梨 和漢三才画会 江州三井寺の山中に生、苗の高サ二三寸、葉の大サ瓢樹の葉の如し、尖らず、地に揺て生ず、二月小白花を開く、虎耳草花に似て、三月実と結ぶ、青大豆の如し、中に数顆攢り生ず、揚梅の様にして、葉の交いに裏る、外色青く内紫黒色、小児皮を剥て食ふ、味微酸く甘、

覆盆子 本草 蔓に鉤刺あり、一枝五葉、葉小にして面皆皆青く光沢、薄くもつて毛あり、白花を開く、四五月実のる子と成て蓬蘂よりも小くして稀疎に生ちて、きハ黄に、熟すれバ烏赤に、本草附注 子覆盆の形に似て、故に名之○蓬蘂、覆盆子、薦、樹苺、蛇苺

石藤 和漢三才図会 莞花、俗云以波下知、花葉並に藤に似て小し、三月花を開く、紫色、或ハ白花、云、又草藤、上の説のごとし、紫花白花の二種あり、三月に至て花を開く、又一種夏藤あり、黄白色、蔓葉花ともに紫藤に似て小し、

馬蓼 大和本草 山州山科の近辺に往て有、四月花を開く、本草凡物の大なるを馬と以て名づく、日本にハ相似て異なることのみ、犬蓼、犬山椒、犬黄楊、犬どうふいぬ蓼ハ葉に黒点あり、

芋植る 芋の法、秋部

紫羅傘 本草 蒙経 紫羅傘、鳥尾と名づく、葉射干に似て、花の色紫碧、抽でず、其根を鳥頭と云、茎二入る○鳥尾ハ燕子花の類なり、花早く開く、

石蘚花 或ハ石蘚に作る、本草 石上に白花もあり、繁し、莖葉生じて皆青色、乾くとき黄色、紅花を開く、節の上に自ら根鬚を生し、亦折下して、砂石と以て栽之、或ハ物と

以て盛り屋下に掛頻りに澆ぐ水と以て寿と徑く死に俗に称して

蘭花 本草 虎鬚草、一名燈心草、千年潤石蔚とす 即竜の鬚のごとし、但し竜の鬚は堅小にして瓤実す、此草は稍粗にして瓤虚き白し、呉人栽之時、瓤を取て燈炷とす、艸と以て席及び蓑と織る、和名抄 蘭、和名為、年色立成云、路鳥尻刺、

五月

卯地打 世諺問答 今日、童の小弓と持て、いんちの馬場に、馬に騎て弓射ること、何の故ぞや、答ひし左右もやもや是ぞ始とへ〳〵ひ、紀事 児童柳の木と以て、大小の刀と作て、きを菖蒲刀と云、男児これと腰に横ち、頭中と着て、山伏の体にして、晩に及て、鴨河の辺に出て、左右に列て、礫を擲て相戦ふ是を卯地打と云、

守宮を搗 武帝記 端午の日、守宮を取て飼ひ丹砂を以て体を赤く画き、次の歳此日搗之人の臂に塗る、犯すこと有ればバ消ぬ、故に守宮と云

生玉の流鏑馬 五日 神社啓蒙 生玉神社は、摂津国東生郡、天王寺の辺にして祭る処の神一座、天生玉神なり、社家註進 明徳年中、本願寺の僧、その所に来りて寺院とす、神地を掠めて境内に接して、神その不潔を悪み、かの僧と罰て僧を追て、神殿造替の宿禱といざき、神主藤原吉勝に、願辞を告て、数日の間、僧の病愈ぬ、遂に神殿を今の旅店の廻りに迁し奉る、其後信長の兵火に焼て、こと〳〵く灰燼となる、後に神座を別所に迁す、慶長年中、秀吉、城郭を築くの刻、今の地に迁す、紀事追加 今日午の刻、流鏑馬、門外より鳥居の方へ馳す、其装束腹帯陣羽織と着て、只一さんにて止む、

今宮祭 九日 今○山城国愛宕郡紫野に、十五日用 祭る所牛頭天皇 諸神記 正暦五年六月廿七日、疫神を舩岡山に安置せ〳〵、長保三年五月九日、疫神を紫野に迁座せ〳〵、霊夢の告ありて、京師の衆庶、御霊会を行ふ 紀事 午時神輿二基、相殿の宮各旅所に出て相殿の宮は、一説愛宕の宮、古愛宕権現鳥峯に移す、一条院御宇勧請、愛宕平社地主神、故に杉社と寸、神幸の日、鉾十二本あり、凡

鉾を出すの町可ふを、別當供奉し、氏子相従ふ神幸小川通りとて、元誓願寺大宮通りと過、船罡山の北の麓と過て本山へ入る、

六月

忌火御飯

江次第 忌火御飯 六月十二月 一日早旦供之 以御薹盤一脚供之 次供御飯

御菜四種和布御汁一坏下畧 公事根源 内膳司より奉まる と、大床子の御座ゆゝく供ずゝく景行天皇の御時よりつゝまる、忌火とは火と忌むゝ、神事ゆゝの時へ不浄の火とうちかふるゝゝゝゝゝゝゝゝ、八月次神今食の御神事と今日より始めらゝ

嚴島祭

十五日 藝州佐伯郡官島まゐ、祭る所の神三座、市杵島姫神、田心姫神、湍織津姫神、○或書云、推古天皇の御宇、播磨国の住人内舎人佐伯の鞍職、當国に左遷ス、恩賀の島ゆあ、時ゆ紅帆の船来る、船の中ゆ瓶あゝ、瓶の中ゆ鉾と立赤幣と着、ゝに三女あゝ、容粧端正告て曰、我皇祖守護の為来現もゝ、ゝく宝殿と恩賀の島ゆ造ゝ、ゝ時ゆ推古天皇三十二年十月、奏聞ゆ達し、社と管ゝ嚴島大明神と号ス、始の名ハ恩賀の島後ゆ市杵島の神号と用ゝ、ゝと呼、或ハ地景の美と以ゝ称ス、當社、後ハ深山前ハ蒼海、左ハ原野、右ハ松原、その野ゆ水あゝ、御洗井と名ゝ、蓋し當社ハ山上ゆあゝ、廻廊ハ平地ゆみて、海潮ゝゝゝゝゝゝゝゝ

みなく神の御雑物と陳列し訖て、亥時夕膳を供ず、丑時朝膳を供ず、祝宜内人ホ、歌舞を奏す、十七日太神宮ホ参る其儀一度会ホ同し、○外宮十六日内宮十七日ニ参を行ふ、京師より御奉納の神宝と神主神殿、捧ること、官殿の御戸を開く、是と拜もんとて、諸人群参すること、十人の祝宜其外、廣前にて松明ともして、祝詞を捧く、今日出家円頂の者を許さず、参詣おさ

泉

尔雅 水の本を源とし、源と泉とを釈名 泉 ハいづる水ニ、いづるのるとこづのつと略せるなり

泉殿

瀧殿、○泉水の辺、滝の辺ホ造る殿舎とも、嵯峨の大覚寺栖霞寺ホ、滝殿ホ、神泉苑ホ、滝殿ホ、源氏松風巻

井戸 井

漢音 さゐ 礼伐 井

志 夏至井と浚へ水と改め冬至ホ鑽て火と改む、瘟疫を去べし、○さゐし井ハ六月井と浚ふと云、夫木 松ノ根ホ、さゐし井とよふけくもも

もの外の秋としるべし 定家

蘭苅

此草、備後国ホ多し、刈て席とす、蘭花の条ニ云べし、

白麻苅

和漢三才図会 商麻 日向薩摩ホ多し、

九州の土の産、其葉微し胡麻葉ホ似て、大く鋸歯ある、ホ本草綱目ホ、桐葉ホ似て、ハ、ハ、ハ

仁十三年六月四日寂す、年五十六、貞観八年八月、勅して傳教大師と謚す、此会八、叡山の谷々に論義を会場一院で年番ちう、十月天台会も同事い

は

四月

鼻高祭 八日 大和名所記 毎年四月八日、南都興福寺中門内に仏生会とぢうす、伶人舞楽あり、其舞の中、陵王の舞と奏するに、其面の鼻高きをもて、俗に此法会を呼く、鼻高祭と云ふ、

花御堂 会の条に注す、

花供 高野の花供一部を見へ、

梅天 杜甫詩 南京西浦道、四月熟黄梅、湛々長江去、冥々細雨来、 嚴維詩 梅天一雨清、潛確類書 唐人成都と以て南京とす、則蜀中に梅雨乃ち四月に在り、是四月の梅雨と云、又熟梅天黄梅天等ともいふ、

葉抑 本草 春初発黄花と生ず、即ち黄蕊花と開く、春晩に至て一泓みな葉櫻と春く、葉長成す、

葉櫻 戈亢呂 蒸門諸流云、四月とせて首夏の新緑を賞する物、

まち見草 卯花の異名、 歳玉 つつみぐさ、時鳥

左田の山の里に鳴けり、

花柚 大和本草 一種花柚とて、其実小にして多くこれを酒に入べし、美味加ふ、故に各々、味大柚に比べれども又賞すべし、

白丁花 和漢三才図会 花白く微に丁香の氣あり、故に俗に名づ、小樹、高さ二三尺、枝茎勁く、葉は狗黄楊に似て、四月小白花を開く、大サ三分、一種千葉のもの、枝茎を折すれば、挿之れば活して叢生す、墻籬際限の為に人家擔滴の下に植ゑ、

花王 牡丹と云、 白氏文集 牡丹芳花開花落二十日、一城之人皆如狂 詞花集 咲しより故さいとみて花のうへに花王と忠通公○ 欧陽脩花録 名 錢魯公嘗て貝人牡丹と謂て花王とす、今姚黄は真に其王なり、魏紫は乃其后也、

花宰相 本草 群花品中、芍薬と云、牡丹と次て第一に芍薬紫は乃其后也、

蓮の蕊 同上 蕊、藕芽泥、と為て花王とす、故に牡丹と謂て花王とし、芍薬と花相とす、

穿て白鵝と成る、即ち蕊に嫩弱に竹の行鞭の如く長、その丈余に至る、五六月嫩を時、水に没して取之蔬と為て

茹ゐづ〜俗に藕絲菜と呼ぶ

和名抄 蓮 荷葉清明の後初て水に貼す、是と浮葉なり、

蟻

和漢三才図会 蟻は羽ある蟻と人家の古き松の柱の間に蟻生ず其蛭細小白く罌粟子の如し、黒点ある処頭と尋て黄赤小蔓と生ず再び黒く蔓して群飛す、奈何ともすること能はず相傳ふ兄いの哥と書て其柱に粘ときは蟻ことごく除去る也、試み験ス其哥誰人の詠ありと八山本住ごさとのあるゝ里へ出ることなのあやまり、

初松魚

東医宝鑑 松魚性平にして味甘く毒なし、肉肥色赤くして鮮明なること、松の節のごとし、故に松魚と名ず、東北江海の中に生ず、

大和本草 相州鎌倉或は小田原の辺にもとれり鈎て江府に送るこの早く生るものを初鰹と称し賞味す、○烏帽子魚、鰹と云、又部に載せたり、

兼三夏物

麨

和漢三才図会 麥を炒磨て細末にし飛羅て冷水に浸して喫る、砂糖を和して愈美し、○

早鮎

是又一夜鮎と云ちろ〜は此製俗に麥こがし〜と云、奥貝の数種を細く截て醞醸す、故に柿鮓とも云其熟することもやゝ、依て早鮓一夜鮓と云ふ

ちろ〜鮎

毛吹草 相州秋田のちろ〜鮎是

蠅

本草 夏出て冬蟄す、暖を喜び寒を悪む、其蛆と胎て蛆と生ず、灰中に入て蛹化して蠅となる、蚤蝨の蛾に化す如し、水に溺て死し、灰を得て活く、

蠅虎

同上 蠅を捕て食之、是を蠅虎と云、

方目鳥

和漢三才図会 鵲、正字未詳、按大さ鳩の如し、黒色短き尾、尖まる喙本紅に末黄、脚長くして正青し、常に田沢に鳴、夏月鵲と以て上饌とす、味美し、又大鵲は形ち鵲に似て大し、形色少し異し、尓雅集註 鳩は即ち護田鳥なり、人と共に時に鳴て主の官と守る似ることあり、故に名之、

苕草

蘓頌曰、根叢生と作す、窠毎に三十莖を出す、赤き色黄なるを、七月黄花を結ぶ、陶弘景曰、莖苗を取て掃帚とす、

水馬

けい部競渡の条に注す、

梅雨

さ部五月雨の条に注す、

半夏生

本草 半夏、一名守田、礼月令曰、五月半夏生、蓋当夏之半故名守田、月令廣

義半夏ハ藥草ニ、夏の半ニ居て生ず、○五月中ごろ十一日ヒ半夏生とゝ、

反舌無声 月令

礼記疏ニ反舌ヒ蝦蟇とゝ、

博多百合

和漢三才畫会 花黄白色ニて、背ニ赤き斑の文理あり、ゑゝ

花菖蒲

白菖の屬ニ、其葉水菖蒲ニ似く、色淡青、水陸ニ宜し、共ニ叢生す、五月一莖と抽でゝ端ニ花を生す、形状燕子花の如し、紫淡紅白ホの数色ニ最も愛観すべし、水菖蒲ニ似く花とむらく故ニ花菖蒲とゝ

紫羅襴花

本草 白菖二種ニ一種ハ池沢ニ生し、根大ニ〻く肥白く、節球ハあるとゝ、白菖とゝ俗ニ是を泥菖蒲とゝ、一種ハ溪間ニ生ズ、根瘦赤節稍密なるものハ溪孫とゝ、俗是を水菖蒲とゝ、和漢三才畫会 白菖ハ葉花皆燕子花ニ似く、瘦小く、其花紫色、又白花あるあり、淡紅あるあり、

花かつみ

此とのこと古来浅論多し、但し八雲御抄 童蒙抄其外 頭注家説ホの諸説ニ、荻の葉ニ似るヲ姑しばらく又田字草のことゝ説も、物の後様ニ四出の花とゝ、ゆゑとゝ、ゆゑとゝ、是ハ田字草のことゝ、

初蟬

七部蟬の条中ニて可見

羽抜鳥、羽抜鴨

凡諸鳥、五月羽毛脱落あるを禿頭のごとしとゝ、羽抜鳥とゝ、

新六 夏草の野沢ごとの羽ぬけ鳥 為家卿

六月博多祭

十五日

○博田撕田の神社ハ筑前国那珂郡ニあり、祭る所の神、中殿撕猶田姫命、或説ニ大若子命、勧請ハ天平宝字元年、右殿ハ祇園牛頭天皇、勧請ハ天慶五年、左殿ハ天照皇太神宮、勧請年月詳ならず、件の三神相殿ニ正月八日正大報若を修す、六月十五日祇園会、十二月二十日新嘗会、今六月十五日祭礼と行ふ、古ハ十六日十七日、永享四年六月十五日始て祭之作山六基、大サ京師祇園会の山ニ四倍とゝ、右山次第ニ上張りホ組上ケて、階上九百人と居らしむべし、一基と引ものの九千人ニ〻木偶人ホ鎧と着せて、階上ニ立て、其甲冑ニ皆姓名と書あらハすが故ニ領主の家臣我も〻〻と美と尽して着用の鎧と出すこと、此祭礼の為ニ〻〻とす、

橋立祭

神輿三基、供奉の行装又厳重なり、

九五日 風土記 丹後国与佐郡艮の方ニ速石里あり、里中ニ長き大崎あり、長サ二十二百二十九丈、廣サ九丈二尺、是と天

橋立し名づく、又八久志濱、又八久志之渡と名づく、拾芥抄 智恩寺八是切戸文殊安置の道場なり、天竜六斎灯明と供ス、紀事追加六月廿五日丹後切戸の文殊会、同橋立祭礼、文殊会、橋立祭同事、○天橋山智恩寺八延喜四年甲子勅願ニ山号寺号とりハ荘田と賜ふ、ここの四百余年と、嘉暦年中、嵩山禅師住持ス、是禅刹の始ス、夫ヨリ三百余年、住侶詳ならず、寛永年中、国主京極高廣別源禅師を請ジ住持ス、是より洛の妙心寺ニ属ス、寺領五十石余、文殊堂八巽向ニ明暦年中改造、堂内ニ延喜の勅額あり、○橋立明神八本社豊受太神と祭る、左八大河大明神、右八大竜王と祭 ○伊祢浦 名所ニ伊祢八悠名ニ、九日出より亀島まで八江の裏向ニ、丹後鄙ニ八此所ニ、橋立八与佐の海中ニある長洲ニ、長サ三十六町、土人浮島ニ八誤ル、松樹亜木のごとく連なり、碧海中央六里松と作リ、詩人六里松と称ス、社の近処樹の茂りたる所と濃松ならい、ちろ〻ある所と淡松と称ス、俗ニ三保八捐ル〻〻く橋立八一枝そうふとのごとくなること也

あるごとく、二町ばかりの舟渡あり、是と九世渡ニ、世ニ切渡の文珠とも是ニ、ニ〻内外濱、子日の嶋、萬代の濱あり、此橋立の別名なり、○竜灯松八洞ノ磯の辺あり、松掛蓋のごとく、

半夏草

蘿頌曰紅半夏、二月苗と生ず、一莖、くきの端ニ三ツ葉を、淡緑色、頗る付の葉ニ似ル、○此ものの和産と相同じ、花八夏のまゝ秋ニ及ぶ、実ハ茹ル

蓮花

余雅 荷八芙蕖ニ、芙蓉八茹、其葉八荷、その花八菡萏、其実八蓮、其根八藕、其中八薏ニ、注ニ曰芙渠八總名ニ、別名芙蓉、蓋、茄八蓮花ニ、○愛蓮説 蓮、花、之君子者也、○池見艸、露堪草、水堪草、

蓮実

貞徳曰、蓮八花ニ実と具ニてある故ニ、蓮の実も夏ニ、蓮の実飛て秋ニなる、蓮の異名也、

草

あ部、麻の葉の条ニ、

四月 日光祭 十七日

○十六日例幣使野州ニ山ニ赤向ニ、拝礼の儀あり、申の刻神輿三基、御宮ニ止リ、奉ル、勅言の拝殿ニ辺幸ニ、宵宮ニ、三仏堂の前ニ於て、例年の舞と奏ス、翌十七日巳刻ニ神と御旅所ニ渡ル、奉ル、次ニ御祭礼供奉の行装あり、新

宮より御旅所へ至る間、凡十五町ばかり、兵士鳥銃剣を持、職士赤面の大鉾八、猿田彦命と表す、獅子頭、田楽法師、神示男女、工鋼馬上素襖裳袴、社家馬上束帯、御神馬、御弓、御鉄炮甲冑童子、御幣大鼓、鉦、鼓、猿公、宮仕、神人、伶人、奏樂ホ有之、雅楽匠、御祭礼奉行諸武家、駕輿丁素襖、御本社神輿、白張百人、素襖、六人、山王（一説日光権現）の神輿、白張百人、社祢宜人、麻多羅神神輿、白張百人、社祢宜人、行者山伏、群行ス、御旅所ニ於テ献供の間、東遊奏ホ有之、終ニ神輿還幸、御本社ニ奉ル、日光三社と八、新宮大己貴尊、滝尾田心姫命、本宮味耜高彦根命、外ニ家光権現、こゝ下照姫命ハ三社の

祭礼八月三日あり、煮酒

東医宝鑑 煮酒八、味ハ殊ニ佳ク、夏月のむホ豆ハ、是ホ邦の煮酒ホ似タル名目と称ル、ホ邦ホハ、夏日酒の氣味と失ル為ホ、煮酒の法と用ホ、京師ホハ、是と酒煮と称シ、此日酒肆、親ヲ躍きとゝぶす、價とゝべ、恐ホ酒とのまむ、是と酒煮の祝とホ、

兼三夏物 煮冷 煮取

の部、冷汁の条ニ注ス

和漢三才画会 鯉節を造る時、其液の滞るものと取て、こゝと収む、黒紫色、味甘美、○煮取ハ、是でもお酒愚ク 嵐雪

五月

入梅

さ部五月雨の条ニ注ス

恐冬花

金銀花○弘景曰、此草藤生ス、冬ニ凌ク、凋ム、故ニ恐冬ト名ク、○時珍曰、木ホ附ク蔓延ス、甚ハ微ク紫色ニ、節ホ對テ葉と生ス、葉藤葛ホ似タル、青ク、濃毛ヲ、三四月花と発ス、長サ寸ヲ、一蔕ホ両花、二瓣、一ハ大、一ハ小、半辺の状の如ク、長蕊、花初テ白ク、その蕊瓣ともホ白色、二三日ヲ経レバ色黄ホ変ジ、新旧相ヒ、映ス、故ホ金銀花と呼ぶ気甚ダ芬芳ナリ

和名抄 恐冬 和名濱吐呂豆恵

鳩の浮巣

大和本草 鵓、字書ニ、好、入水食、似鳧、小、鴨鶏ホ

和名抄 祐盛法師曰、鳩の浮巣と、海の潮ハ、ホ、ちもとの、ゆ、ゆ、ゆ

の蔭さしのもとにくるを貞享式鴨とものへ鷺とのつかへとをうつ
水鳥の用ゐるは巣とむすびてハ夏と決すべし鳴の浮巣
いつぞ古式に雑とあせることなれて水中の芦を巣と搦ゆ水の増
減に浮こと沈こと四季ともに其ことに捨おく故に道理とつけ
く雑とハあるとも鳥の古巣ハもとづくさるものゆゑ其巣
とかくも時ハ夏ゆゑに浮巣ハ決して夏とこそ定めがたし
巣を用ゐるをハ
勾作みるべし

六月

蒜根

本草 蒜蒜、夏月根と食
ハ火に風瘴両加ることおそれ○和俗土用
入る日蒜及小豆と食すハ瘟疫と辟んが為

四月

佛の座湯

ふ部仏生会の条

厚朴の花

本草 厚朴、其木質朴ゆゑ皮厚
し故に名づく 和漢三才図会 按ずるに厚朴、葉大きくして八尺に近
く擂の葉に似て刻歯あり色淡緑冬凋て春嫩葉を
生ず花葉を出ずして形牡丹花のごとく色淡紫大さ一尺に
うつ隨て実と結ぶ冬青子に代りて熟するとき殼自ら
裂て裏赤く中の子黒し老木
の皮ゆゑ鱗の皺を剥て薬用ゐ

牡丹

事物紀原 隋煬帝の世始て
牡丹と傳ふ唐人も亦未芍薬と開元の時宮中及び民間
競て尚之今品極て多し貞享式牡丹杜若この二名
ハ和漢の遠ひをもて詩ハ牡丹を春とし野ハ杜若と春
とす中古ハ俳諧の加減より二名とも夏ハ用ゐるべし初夏ハ
ハ花の出る故なり○木芍薬花の王ふくと草花日草
富貴艸ともいふ夜白艸名取草以上牡丹の異名
おのゝ頭字の部ハ花せるとをくべし○年浪草ハ
雲御抄と引く山橘と牡丹の異名とせるハ雲の誤と傳へ
ともいふ万葉ハ山橘ハ数枝子のゆゑ又光代旧事
紀と引く豊橘と牡丹のことなるもこれ此先代旧事紀偽
書なれハ専ら取用ひがたし

蜀鐸花

本草 鬼臼の一種
二の名牡丹ハ用ゐるべし
ゆゑ葉数層を
ゆゑ蔓麻のごとく面青く背紫なり細毛ありて葉下一茎こと
付く一花とかくべし状鈴鐸のごとく倒垂ふるへ青白色ふ
て黄蕊中空し黄なる実と結ぶ風吹けば動ぐ所あれ
ば自ら揺くゆゑ和産のこの形状相似て異なるつくばねこのこの
草園史艸史ハ載ず俗に狐の挑灯ともいふもの是なるべし
さ一尺ばかり葉ハ野車ハ似て細く白花ハ内に青さ

紫竪ゐ三條バうゐ花無咲こゝもとの宝鑵ゐ似こう江東原野ゐ多〳〵

杜鵑 和漢三才 啼会 杜

鵑の形へ雀鷂ゐるゐて色灰黒腹白〳〵鷹の尾ゐう翅も羽に白き球ゐ合中赤く頭ゐ小冠毛ゐ鷹掌褐色其前の指二ツ連膜ゐ後の趾二ツ諸鳥ゐ異こ李春鳴ゐほそんかけこゑとこゑゞとし夏ゐ至こ最多〳〵初秋ゐ至こ去ゐむ冬月ハ深山ゐ蟄こゑ○杜鵑の名和漢ともゐさゞく多〳〵杜宇子規鳴鶯郭公霍公鳥時鳥蜀魂不如帰冥途鳥四手の田長沓手鳥俱伎羅謝豹樝鳥時の鳥憲〳〵鳥三月過鳥烟鳥童子鳥賤鳥勸農鳥以上各頭字の部ゐ入て注ハ○杜鵑ハ鶯の巣の中ゐく生育ゐ古へ云ふ

方言 鶯之生卵乃中尓霍公鳥独所生而已父尓似而者不鳴母尓似而者不鳴ゐ暑又續世継物語ゐ

このこゝ〳〵ゐ其時頼政哥ゐ

きゝもとゞきの音こゝもとゝ

ゐ〳〵鶯の巣こゝ生〳〵ゐ

見ゐるゐゐ〳〵ゐ

兼三夏物 子子 和漢

三才畜会 俗云棒ゐ

を生ず長さ二三分灰黒色微〳〵科斗の形ゐ似く常ゐ一曲一直〳〵棒と振る状のごとし

蛍 月令廣義 化為蛍 和漢三才畜会

蛍大抵大サ三四分黒色ゐ〳〵両額ニ赤点ゐ臭気ゐ其尻銀色の如夜光ゐ出ス紙ゐ裹ゐ赤光り外ゐ徹る麥稍と用く探研ハ銀砂のごとし○惑の蛍 蒙求 晉の車胤家貧〳〵て常ニ油を得ず夏月ゐハ練の嚢ゐ数十の蛍火ゐ盛ゐ書ゐ照ら〳〵夜ゐ以て日ゐ継ぐ 志の蛍ハ云ゐ ○近世哲学家の説ニ俗ゐ

蛍火 漢字ゐ蛍火と書ゐ

本邦古へ

蛍火

俗言ゐ〳〵但〳〵和泉式部家集ゐ

思こゝ

蛍火

ゐ〳〵ゐ実ゐ後世の

こゝ

蛍火

ゐ〳〵ゐ

五月

蒲人 金門記 午日菖蒲を刻〳〵人或ハ葫蘆諸物をつくり竿ゐ戴く邪を辟〳〵

火串 和漢三才畜会 折風 枚部 駆狩 の条ゐ注ス

六月

乾瓜 和漢三才畜会 切瓜 と用ハ紙ゐハ切瓜

麩と去り、塩を摻ー、暑熱の石上に晒乾し、六七日ありて能く乾きたるを、磁器に収め用ふ。鹹汁を洗ひ去り、切丁し、酒に浸し食ふ。

乾飯 引飯 同上 精は乾飯を糯米用ひ飯に煮て晒乾し、粗く磨り、頭巾を去り、中巻のごとく取る。夏月冷水に浸し、饌とす。

奥州仙臺道明寺に作る処最も佳し。○常に道明寺と云

兼

三夏物

蛇 蛇の種類最多し、委くは本草に多識

蓋 金蛇 古加祢、倍美 銀蛇 志ろ加祢、倍美 水蛇 美豆、倍美 蝮蛇 久知、波美 ○此外書つらねがたし、

五月

蛇衣脱 本草 蛇皮、蛇殼、竜子衣、などの名あり 別録五月十五日とあり取てよし、

蕉頌畜経 南中木石の上、及び人家墻屋ふ多くこれあり、蛇蛻時あり、但し不浄と着れば即ち蛻く、或は大飽ー

紅藍花 未摘花 同上 紅藍、其花紅色、てと亦脱く、

烈藍花 葉は藍に似たり故に藍の名あり、家の場圃に種る処、冬月、熟地に子を布く、春に至て苗を生ず、夏花あり、花の下に球果をなして刺多し、花球上に出で圃人これを采る、采りてむしまべ復出づ尽る迄て止む、核中に実を結ぶ、白顆小豆の大さの如し、その花を曝し乾して、真紅を染、又胭脂を作る、和訓義解 此花初の未だ開く時、摘るを故に未摘花と云、

六月

糸瓜の花 秋部 ○注、

四月

土塔會 十五日○摂州東生郡四天王寺南大門の下土塔塚の前、土塔の宮を祭る神牛頭天王と古八月毎年四月十五日大祭礼と行ふ、今他領と雖ども、大祭礼絶ざれ共今に於て、天王寺の僧堂司示人催示出仕神事を行ふ、次ぎ四月法用、仁王絶、法則舞示あり是を土塔会と云、

常磐木の落葉 四時凋ざる諸木の新葉生じて後古葉の落るを云、年浪草、多くは松のごとき常磐木を用ひ、松の落葉は秋とす、夏は松の外の冬木ことごとくこれを泥めり、まして松は其外四時不凋の木なれば、○

常夏 部撫子の条に注す、

時の清滝や波おとなり迄青松葉 芭蕉

鳥

杜鵑と云、時鳥と云、字のごとく訓るべし、 紅房郷 果寺合 名は時の鳥とやいひと知月なるとと訪音鳴らん 俊成

兼三夏物

通鴨 大和本草 日光山中禅寺の湖に真鴨あり、甚小し、黒色に種を洛黒と常に居て北へ帰らず、○凡水鳥、秋冬に渡るものは春月なるべし、古巣に帰るその中に稲に池中に常居するものあり、芦葦の間に巣を営て雛を生あり

こまとと通し鴨と云、

五月

桃印符 【続漢書】桃印ハ木漢の制、端午ハ桃僧篆符と以て悪氣を正む、今の世以て相問遺ふこと以て屏帳の間に置く、【本草】風俗通云、東陽度朔山ハ大桃あり、千里ハ蟠屈、其北ニ鬼門あり、二神是と守り、常に凶鬼を禦ぐ、

蟐蜘生 【月令】小暑至螳蜋生

虎ノ雨 【紀事】毎年五月廿八日多く雨ふる、俗ハ以大磯の虎娘子、曾我祐成ハ相別る涙変じて雨と為る、故ハ今の雨ハ虎御前の涙と云、○虎ハ祐成討死の後尼となり、所の翁と案内すゝ、井手の屋形の辺り、祐成の哀後の跡とて、いと〻歎おしづ〻て、「露のゝ清き跡と来てみきぐ尾花がすゑに秋ぞ吹く、此哥曽我物語ふるゝ中、

照射 【月令】中央土共日、戊己、注十八四の条ハ出ス、

土用 時ハ寄旺すること、各十八日、共ニ七十二日、此を除き、ハ木火金水もすべて各七十二日、土四時ハ多くてあらざること、故ニ定る位ハ、専気なり、辰戌丑未の末ハ寄旺ス、未の月火金の間にあり、又一歳の中ハ居故中央土一今と此ハ掲

く、五行の序とす、

土用干 【大和本草】むし部、虫干の条ハ出ス、

虎尾草 虎尾艸ハ葉の如くして長く尖り又絲長卿似て茎の長さ二尺余、夏秋白花をむすぶ、穂と為す、形ち獸の尾の如し、花紅白の二種あり、此もの中華ハ所説なし、

時計草 かつらハ似て細き蔓出、竹木ハ巻つきてのぼる、巣切ありて、葉のごと、花形ちとせん風車ハ似たり、朝四ツ過ぎハ花開き暮六時萎む、その次の蒼又明日ひらく、花ハ日々相続て盛久し、花ひらくときの様子偶偶と操るが如く回る、ハの射矢葉ハ上下へ向る、葉ハ時計の機の如、○享保年長崎より初来る、

東陵瓜 【続蒙求】邵平ハ故秦の東陵侯、秦亡びて布衣となり、家貧くして瓜を長安城の東ハ種、瓜五色あり甚美、世ハ是を東陵瓜と云、○又支那の瓜ハ東門青門等の名あり、邵平が故事ハ、

蘇突 【和漢三才会】蘇朦ハ鳥と蘇所以のものあり、其樹数種あり、深山ハ多く、無大ハ子を結ぶ、その蘇と云て少あり、其色もとゝ、木葉文貝ハ似て薄く光沢あり、四時凋す、

とらへても、尺二三分落葉す、四五月細き白花とひらき、子を結ぶ正円うるゝ熟すれバ紅色攢り生る、其八木の皮と剥て水に浸し爛らゝく是と流水に濾く皮渣と去きバ麥筋の如くしゝ、甚稠粘る人用ゆる鳥雀と粘す是と鞠ゝ、

心太

和名抄 大凝菜、和名古留毛波、俗ニ用心太ニ字ヲ誤ル 古呂布止○本艸 稲枝 本朝式 凝海藻 閩書 石花菜ハ海石上に生ず、性寒、夏月ニ多く煮て凍とす、

四月 地主祭

九日 庚富記 文安四年四月九日庚午、清水地主権現祭ゝ、神輿午刻還向き、其後獅子舞すゝ、田楽ホの舞ゝ、○雍州府志 地主、古八旅所白山通五条の北にあり、今石地蔵の存る所ゝ、祭日暫ゝ神輿と経書堂の前に居、是旅所の義を表すゝ、清水縁起 祭る神田村将軍の足ゝ、

苔

弘仁三年四月延鎮奏ゝて、清水寺の鎮守とす、

菫

田圃家園に多く栽、三四月菫を起ゝ、菫肥中空く脆ゝ、ゝ折ゝバ白汁あゝ、葉毎に莖と抱ゝ相重りて又と少つゝ四五月黄花とひらく、初て徒ぶる野菊のごとゝ、一花子とむすぶゝ鶯蜀の子のごゝ、

茶挽草

和漢三才図会 雀麥 茶挽草 田野に多くの生ず、穗粒と爪の上に載ゝバ旋回すゝ、苗葉小麥に似ず弱小ゝ、穗細ゝ小児茶磨を挽ゝ、依く名ゝす、

五月 重五

月令廣義 五月五日故、重五と、

粽

茅粽、角黍、雄粽、菱粽、枰鎚粽、九子粽、芦粽、笹粽、鉛粽、飾粽、字彙 粽、糉同、一名角黍、風土記 端午に重五と、かさねて粽、鶩と烹、筒糉を進る、一名角黍、菰の葉と裹ゝ灰と以ゝ煮ゝ熟せ、蓋ゝ粘米栗東と裹ゝ灰と以ゝ煮ゝ熟せ、蓋ゝ陰陽包裹ゝ、ゝ、ゝ散ぜざるの象ゝ、月令廣義 九子粽ハ角黍ゝ、唐の時、歳節端午ゝ粽の名甚多ゝ、形制も一ゝ、角粽、鍋粽、菱粽、筒粽、枰鎚粽、或ハ枰鎚粽、或ハ百索粽、九子粽あり、続斉諧記 屈原五月五日汨羅に投ず、楚人ゝと哀ゝ此日に至るごとに竹の筒と以ゝ米と貯へ、水に投ゝて祭之、漢の建武中、長沙の歐回白昼に一人とゝ、自ら三閭大夫と称ゝ、回に謂ゝ曰、祭ゝ、ゝ、ゝ、ゝ甚ゝ、但ゝ蛟竜に竊ゝ、ゝ、ゝ、ゝ苦ゝ、今ゝ、ゝ惠ゝ、ゝ、ゝ、

竜の畏るゝ所と、今の人粽とつくり、絲糸及び棟の葉と帶ぶ蓋しこの遺風ゝ、本草古人菰芦の葉を以て、黍米をつゝみ尖角ゝ如き、捻梱の葉の心の形の如し、故に菰の角黍ゝ云、迫世多く糯米を用ふ、今俗五月五日節物とし相ひ贈る、或云、屈原を祭る為ニ黍を作りて、江に投ずゝ

本朝食鑑 飴粽ハ、糯米を用ひ、蒸熟し、搗て餅とし、稲艸を以て薄て、甑の中に蒸熟し、とり出し、稲艸を剥さるゝ、故に名づく、味美し、微し香あり、もてて粽の類、市人道喜と云者、巧に造る、故に道喜粽と云、今京師の市上、專ら此粽を以て、贈送の物とす、○飾粽、かざり粽ハ、天福本伊勢物語ニかざり粽、こは、五月五日、粽をいろ〳〵の糸にて結ひ、こゝと云、拾遺集十八の詞書ニ、くさぐさちゝさいとゝくさう、今も大内にハ五色の糸にて飾り粽とす、〇今按ニ、伊勢物語、かざりちまきとあるハ、今くかうの粽の写誤とつたへ、此段ハ大和物語ニも出て、かざり粽とあり、又伊勢物語大ことの本ニかざり粽とあるハ、此さゝゐり粽と名目ハ削り去べし、

盛衰秋 粽の形ハ蛇に似たる巻く、是と服して毒虫と殺すことを表す、

長命縷

續命縷、辟兵繒、五絲、絲、朱索

條達 風俗通 五月五日絲を以て臂に繫ぐハ、鬼及び兵を辟け、人をして瘟と病ざらしむ、一名長命縷、一名辟兵繒、一名五色縷、一名朱索、初学記 北人端午に雜絲と以て、合歓索と結び、手の臂に纏ふ、一名條達、又條脫と云、雜物と織組て相贈遺る、及び日月星辰鳥獸の形、文繡金縷帖画を、死尊に献ず、○是本邦の素玉ニ同じく部茅玉の条通りて、

竹醉日

六月

竹生島祭

十五日 神社 啟蒙 竹

竹を部、竹植る日の条に出す、

生島の神社八、宇賀御魂神、聖武天皇天平三年、辛未、竹生島の神現形ス、神社考 竹生島八、江州の湖中にあり、其叢石水精珠多し、本朝五奇異の美一、傳ふ、孝霊天皇四年、江州の地潮て湖水始て湛ふ、駿州富士山忽ニ出、景行天皇十年、湖中に竹生島初て涌出ス、昔行基菩薩、此島に来りて、神女現形ス、行基ことゝて寺を建て、辯才天の像を置、紀事 例祭六月十四日十五日、是と法華会とを、湖上ニ舟を浮べ音楽を奏ス、神輿の船湖上に浮ぶ、毎年正月十日、社僧の中に頭人を撰む、

○社僧說曰、此祭ハ、江州淺井郡の中ゆく、豪富の人を撰て、頭人を定む、旧記に、神亀三丙寅年、天照皇太神宮祭主廣見ゆ神勅うしく、岩倉山太神宮寺と云額と送りゆ、札所観音と宝厳寺と云、同年六月十五日、聖武天皇、攝諸兄、房前大臣、両勅使と以て、蓮花会と修せしめ給ふ、今ゆ至て祭祠絶ず、毎歳頭人両人と定り、神事を司らむ、淺井郡捻式神ゆる故、四民共ゆ差定ス、往古ハ、近江国中へ差定セしむ、按るに、この島、敵山ゆ属ス、山門由緒ゆる、是ハ、頭人の家ゆ神幸へ奉る、天女の新像是と、假屋に安置し、十四日迄と近江一国ゆ預ることし疑へ、此祭ハ、先ず六月朝日に尊天と、頭人の家ゆ神幸へ奉る、天女の新像是と、假屋に安置し、十四日迄と御旅と称ス、此日島ゆ於て舞乐あり、児四人舞之、十五日新造の天女の尊像と、神輿に近へ、還幸と催し、頭人供奉ス、神輿と、早崎の一の華表へ立、供物と恭詣の人ゆ施し、与ふ夫より島へ渡御、神輿船と、島船と云、金翅鳥と粧ふ故ゆ名へ、笛太鼓ふく囃し、大船二艘と舫ひく、大竹ゆ五色の幣と云、幕と張、神輿船と飾り、頭人夫婦供奉ス、管絃船、警固船ホ、大船十艘潜列、神へ島渡り、是と法華会と云、神事の法会、多へ蓮花と用ゆ故に名づ云、又三月三日、心經会と修ス、俗是と島繫云、別に記ス、

竹生島妙覚院登詣記

牛頭天王と号ス、又武登天神と云、或時、南海の女子と通じ日の暮ゆ会ぬ、宿と路の傍ゆ借る、二人あり、兄と蘇民将来と云ひ、弟を巨旦将来と云、兄ハ貧へ、弟ハ富り、神宿と巨旦ゆ乞ふ、聽ず、宿を蘇民ゆ借る、蘇民ゆ許す、粟箕を坐として、粟飯と献ず、其後八年ゆ、神其八子と将て、蘇民が家ゆ来りその徳と報ぜんと欲へ、蘇民ゆ教へ、茅の輪を作らむ、其夜天下疫病大ゆ行り、人民死ることの其数を知ず、唯蘇民が家のみ免る、浮へり、是ゆ於て、武登天神告て曰、我ハ是速須佐雄能神へ、今より已後、疫を起らば、必蘇民将来が子孫ゆ、ちの輪と作へ、茅の輪と作へ、其災と脱るべし、

御湯殿記

晦日、夜このへ〳〵輪ゆのこと、ちがやゆて調る、輪ハ、やゝのこと麻の葉と長サ一尺斗ゆ二三本紙ゆて、持へ、左の足ゆ入、右の足へ出る、以上三度へ、此時の哥、和泉式部

神へて麻の葉ときりゆて、へるゆ、輪のこへ、きり、輪一つとなげへ、二つへ、今ハ中と切へ、上と杉原ゆて包、とゝきゆくるゝ七月朝日の朝、荒神河原

茅輪、菅貫 神社考 素盞烏尊、児童と時、

挂川へまゐる、蔵入所小舎人山科家紀氏調進○菅貫と茅輪も同物と加茂神事次第あり、次入菅貫之論云、菅茅おとゝ以て製〳〵するもの、竹夫人 竹奴 青奴 和漢 抱篭 三才図会

○名越後の条に云、夏月の夜こゝを抱く涼を取 劉熙釋名 抱篭、俗に竹几と云、夏月の夜こゝを抱く涼を取 劉熙釋名 竹几又竹夫人と云、山谷詩 趙子昂示竹夫人詩、蓋涼寢竹器、慧聲休膝、以非夫人之職、予為曰、青奴 雜談抄 和名竹を以て篭を作る、二間ゆ、長十五六尺、短こゝこの三四尺、圍も又小きものを、昼夜卧寢の時、身に抱て涼をとる、名づけて抱篭と称す、

月 龍頭太 い部、稲荷祭の条に出

龍華会 ふ部、仏生會の条に出

五月 り 四

月 両社祭 廿三日○江州下坂本に社あり、下坂本より唐崎に至るの路傍に両社あり、南は若宮権現、北は酒井大明神、例祭五月廿三日、神輿二基遊行す、土人産土神と云、山門慌蔵坊、代〳〵両社の事を預る、両社修造のこゝは因縁あると以て、

六月 林檎 和漢三才器会 其実空洼溝を、藝州の国主な嘗まゝぞ、

縄の痕の如し、徐く熟〳〵半青半紅、味ひ淡く甘し微酸く脆く美あり、こゝを俗みな、頻婆果あり、

海

兼三夏物 蓴 ぬなは 去部、蒓菜の条に出す、

五月 鴟鴞の言を去 雫凌記 鴟鴞は人多く養之、五月五日其舌の尖りを去れば、語とゝまず、○時珍曰、其舌、人の舌の如し、剪刷すれば人言を作す、

る を 四月 大

神祭 上卯 神社啟蒙 大神社、大和国城上郡に在、祭る所一座、大巳貴命 公事根源 先丑日に使を立て、大原野の如し、此祭は冬は寅日使を立て其故は夏は卯日の暁冬は夕なる故に、大神とは大三輪の神に大物主神の御事に、三輪本縁は天の大物主神、活玉依姫と云女のもとへ夜のみかよひせしに、ある人こゝろ安からぬ事思ひ、その女懐妊して及びて、父母に問ふに、こゝの二人こゝろ安からぬ事思ひ、女に問ふに、神人の来りて夜のみ来る時、糸の端に針を付て、衣の裾に差けしむ、その糸くりて尋ねゆけば、三輪山にとゞまる、

大津祭 上巳○四宮神社は江州大津の四の宮にあり、

神社啟蒙 小日枝大日枝、氣比小禅師、右四座同社なるべし、故に四宮と云、○社説云、祭る所五座、中は彦火々出見尊小禅師、左は地主神、大国主神大日枝、右は塩土老翁日吉神国常立尊小日枝気比神仲哀とを五社の中、彦火々出見尊を以て本社とす、故に四の宮と云、○此祭も日吉祭と、日吉祭の神代とあり、三月中に近江一国の中より、何方にも切出す、其神と、飯室道の廣芝と云所の、相生の松に立掛く置き、四月朔日の頃、日吉大宮の拝殿に移す、同三日大津四宮より濱成磯成とこの、是は大宮鎮座の時、粟津に居る人に大宮の神を宿りの所にて、今の山王の社地穐殿のことを告奉し人と粟津の神と崇む故に今二其名を仮に称す、神迎の魁首なる大宮へ粟の飯と供ぜしを人々舟に乗て唐崎迄大宮の供奉す、今日も衣冠あり、笠鉾とさも、日吉の大宮へ来り、拝殿の神と取て帰る、其体石の鳥居までは缶言あり、ちのびやうなる体し、鳥居を越ぎ取導る形勢あり、大鼓を打、雛子とあり、八柳に至る、俗二七本柳と呼所此所より舟にて大津へ着岸し、四宮の拝殿に移す、此日坂本山王祭まで、此処の神事と申、日山王祭其次第山王祭の条に記す坂本へ神を帰し渡す、

紙 夏秋のままで老ぬる鳴く

十論為辨抄 支考著 ある

老鶯 抄草

とき、故翁のものぐるふ此ぞ白氏文集とうて、老鶯とらひ病蚕とらて、此詞のおもしろさは、鶯や竹の子藪に老たる、さくられや蚕ごとに桑の畑かく哭こと代りが鶯そ筍藪とらひく老若の余情もいとゞくてけしん

貞享式 老鶯その食全く新撰とあれども、老鶯とは漢家の詩に出く、或は狂鶯とも乱鶯とも、をぐく暮春の物なれども、例に今式の加減とす、殘鶯は勿論なく、老鶯も夏の名にあるべ鶯に老の感情あるべく、風雅は例のさびみとうとん、此名は義議あるべ

大矢数 和漢三才図会高条に出ぬ、や部、矢数のとうぐさ

躍草 天竺人、埜微赤色、柔小葵に似て、両々對生す、三四月葉のとうに小花とひらく、白色に微赤きと帯、人の笠と着て躍るに似たり、故に俗人躍花とす、又續断を以て踊草とす、

五月大原志 神社啟蒙 大原神社丹後国桑田郡に在、祭る神一座、伊弉冉尊 **社家記** 春秋両度の祭奠は遠近の国郡群を為す、其祭儀饗を事とせず、禮姿糧と以て礼とす、謙道と天下に示すものの、**紀事追加** 世俗、桑詣の地向に山とい

とうとくサスとは却もせり、是は丹後国大原の社へ詣ずと、黄もびらをとは、蚕飼と守護とする、蚕飼とするとの別て

崇敬すと云、三月廿二日八春さ〻とて奉詣し、此時、社内の小石と申請く持帰る、餉屋の棚みおくるとき八鼠の害あ〻とて、この石と猫と称す、九月廿三日八秋さ〻といひく、奉詣の時、右の石をとり〻〻納むとく○此祭八醴と釀〻く神〻と供し、客乃饗ふと、又宿家の商物〻と

鬼百合 時珍曰、卷丹、その苗葉山丹に似て稍長大〻、紅花黄と帯る、六瓣ロに垂上に黒斑の点あり、その子先結く、枝葉の間にあ〻とのみ是卷丹〻 多識篇 卷丹、今按に於東由里

する故、世俗甘酒祭と云〻、

六月大祓

公事根源 大祓〻〻〻〻八百官こ〻〻く朱雀門にあつまりて、祓と〻仕ふ〻、六月十二月二〻〻び〻、天武天皇の御時かもとめる、解除八解穢ものの時もこ〻、神事にし行ふ〻き八臨時にと常〻もあれども、この大祓八百官一同にあつまりて、祓と〻ふ〻、家〻に輪と〻ゆ〻ことおり、○是六月晦日、朱雀門の前耳敏川にあ〻こと〻、こ〻に八百官の祓〻、節折荒和の祓八天子御身の御祓〻、

大山祭 六月廿八日 か江戸及近国の僧俗相州大山石尊大権現へ奉詣ス〻きを初山と云、又七月盆中に登山す〻く盆山〻云、志願あ〻ものハ大小の木太刀

と携行て、こ〻と納む、その木太刀に必大願成就の四字と書て、きと納太刀と云、

温風 月令 季夏之月、温風始至 文選 朱夏振炎氣、淳暑扇温風、○朱氏曰、温風八湿厚の極り、涼風八厳凝の始也、○小暑 温風至、六月節也、

鷺鴨涼 水鳥の類ども〻〻冬多し、故に和哥に、涼一 及び連俳〻く冬季とす、〻〻鷺鳥の類、涼一と云、〻き八夏季〻す、

慈姑 和漢三才齋会 その苗と俗こもだ〻き、其根と白く〻ると、名づく、単葉の小白花を付く、○時珍曰、慈姑、一名燕尾草と云、葉燕の尾の如く、前尖りて、後に岐あり、

沖膾 セゴ〻膾 貞享式 此名八俗習に、或八海辺の別荘〻或八船遊の時に、魚のあ〻とし〻こと称す、是八決して極暑の名目にて、こ〻らと例の賞玩と云べき、○青藍曰、沖〻く漁りする魚ご直に醋に和し〻、食ふと、沖膾と云、○セゴ〻とハ、鰺にの大きあ〻ものを骨のまゝにて切〻ると、南海にく、せゴ〻なりとい〻ふ是なり、

綿抜 更衣に布子の綿と抜去て、四月 の綿と抜去て、

和哥祭 十七日○紀伊和哥山にあ〻、東照宮の御祭に、一名雑賀祭と云、拾ふとり〻、

元和七年紀伊頼宣卿の勸請ゝ奉る所ゝ山鉾其外相撲流鏑馬おあり又城下の士人太刀と佩さらと摺て躍踊ごかす、こきと雅賀踊ゝ、今日神事必用の食ゝ蒟蒻を刺刀の如く切高ゝ、一方ハ常の如く味噌と用ひ、一方ハ大豆の粉を付くゝ、家ゝ〕

和清天

白氏文集 四月天氣和旦清緑 拠陰合沙堤平又同詩ニ、孟夏清和月、東都同散官、○和清清和ゝ

若葉の花

貞享式 古式ゆ木の若葉ハ夏

ゝ〕、草の若葉ハ春ゝ、青葉ハ大ゝく雑ゝ〕ゆせゝ。たゝ、もゝと或拔ゆハ花と若葉の二所ゆ、若葉ゆ花を結ひてハ春ゝ〕いハ夏ゝ〕いつゝ、何故ゆ決せぬゝ、今按ずるゆ、月花ハ風雅ニ一卷の飾ゆ、ゆ〕ゝ〕ものハ加減ゝ〕ゝ、四季を自由ゆ配うべ〕ゆ〕ハ若葉ゆ花と結てハ決して夏と定むべ〕、

若葉

新樹 和哥題林抄 新樹ハ四方の梢

青ゝ〕ゝて、木ゝの色もゝ〕薄ゝ〕ゝゆみゝ、ちゝ〕ゝ山本も いゝ〕ゝゝ〕ゝゝ〕ゝ、月も漏ゝず、村雨も音ゞ〕して、露も落ゝ〕ゝ〕ゝ、

若葉の楓

徒然草 卯月ばかりのころ、

和名抄 雞冠木 加倍天乃木

雞頭木、加比留提乃木 今案二木の名ゝ、和訓義解 其葉岐ありて蝦の手ゆ似ゝる故かゝてと略まるゝ、

ゝ〕葉

病葉と云、夏山、紅葉の如く赤ゝ〕ゝ又ハ黄白色ゝ〕ゝゆ朽ゝ〕ゝ〕ゝ〕ゝ〕ゝ〕ゝ、

綿蒔

和漢三才圖会 相傳ふ往昔蚕綿の外ハ穀木と以て衣服とす、是ゝ木綿と云、中古ニ草綿始ちて、本朝桓武の朝ゝ、即ち類聚国史ニゝ〕ゝ〕ゝ、中華ハ宋の才、中華ゆ先ぶること、九二百年ゝ〕ゝ、此ゝの種と下すこと、早晩ゆ、早ゝ〕ゝ〕ゝの、八十八夜以後、冬苗の際ゝ〕ゝ〕ゝ〕ゝと撒ゝ、晩ゝ〕ゝの、四月麥と苅ゝ〕ゝ株の傍と撹ゝ〕ゝ〕ゝ〕ゝ〕ゝ、大底、枝葉花、黄蜀葵ゆ似ゝ〕ゝ、花ハ六月の部

五月

早瓜供

延喜内膳式 五月五日、山科の園、早瓜一棒と進る、若実のゝ〕ゝを、花根ゝ献ゝ、

若苗

左部、田植の条ゝ〕ゝ〕ゝ、

若竹

壹岐ゝ〕ゝ〕ゝ部ニて、今年竹ゝ〕ゝ〕ゝ部ニて、みゝ〕ゝ〕ゝ、

和布苅

和漢三才圖会 石専海藻、和名迩木米、俗ニ和布の字と用、今云和加米、麁布ゆ對ゝ〕ゝ〕ゝ〕ゝ弱布と云、

本草 南海ゆ生ず、石ゆ附ゝ〕ゝ、紫苔ゆ似ゝ〕ゝ、色青ゝ〕、按ゝ〕ゝ今云和布ゝ〕ゝ、○海人鎌ゝ汲

六月

綿花

[和漢三才画会] 四月種と下す、草弱く蔓の如く、高さ三尺の四五尺葉三尖あり、楓の葉の如く、秋に入りて花を開く、蕣の花の如くして小く、紅紫のものあり、実を結ぶ、○此たの種を下すに早晩あり、花も又同じ、夏の末に花開くこの名大底黄葵に似たり、浅黄色にして、四月綿を蒔くの条見へたり、

月堅田祭

上巳日○或説に祭の日上の巳祭る神詳あらず、陵海志に、堅田ひとり柳田の庄[illegible]云、又聞く演[illegible]云、北と今堅田と云、出来島、この地伊豆の三島の風景に似たる故、伊豆権現と勧請[illegible]もれば伊豆権現の祭あるべし、今土人もまたこれを[illegible]の[illegible]、今也人本居神[illegible]、天文六酉年九月九五日、江州観音山の城[illegible]、衣川に勧請せし天神の社是、四月子の日祭あり、今上巳日に祭る所も、神田明神に、堅田の城主一代江戸にて誕生、故に神田明神を此所に勧請[illegible]、

戒壇堂開帳

花摘○江州比叡山にあり、八日 [帝王編年記] 弘仁十三年六月、参議左大弁藤家業、戒壇堂と建[illegible]の宣旨と蒙り登山す、傳教喜悦[illegible]、閏六月十一日始[illegible]勅詔を下して創て戒壇と築、十四年四月十四日、修禅和尚義真、始て受戒と行ふ、[紀事] 四月八日諸人参詣、女人も常に叡山に登ることを禁ず、今日許して東坂本の花摘の社に詣ずる、[illegible]と花摘、花堂と作りて、叡山の銅像と安置す、○此社、傳教大師の御母堂、妙徳婦人を祭るとなり、婦人存生の時、大師御對面の為此処まで登山し給ふ、今日女人の参詣とゆるす、此遺意なり、

賀茂祭

葵祭、御形日、[公事根源] 未日、先上卿陣に着く、六府とり〳〵警固のことを仰す、当日使は近衛の中少将つとむ、昔要の[illegible]より、人々葵桂の鬘を[illegible]、賀茂松尾の社司、前の日ちるべき所[illegible]てもうつる、欽明天皇の御宇より、此祭はじまる、下鴨の御祖、上賀茂の別雷二の神祭、この御祖とは玉依姫とす、賀茂の建角身命の女、ある時、せゝらの小川のほとりにあそぶ、川上より丹塗の矢一流れ下る、玉依姫この矢をとりて、我家の屋根にさし置て、程なくして懐妊して、男子を産む、もし父なきものなれば、もしこれを[illegible]、或ときに酒をすゝめて、今の児に盃をとらせ、汝が父なきものなれば、児その盃

どバ虚空よりかけくゝ家の屋根とふゝゝゝて、我ハ天神の御子
あるゝゝ、天上とゝゝゝゝそのゝゝゝゝ則別雷の命是こいまの
丹塗の矢ハ松尾明神と、後みあゝゝゝゝ、[祀事]上賀茂
中酉日、葵祭、貴船もゝゝ修さゝ、酉の前午日、西賀茂、黄衣のゝの
榊と伐り、松ふ並ゝ、御生所の假宮、系齋宮の幄の屋、及び大宮
假宮と搆ふ、黄衣五十人ゝゝゝゝ結番とあゝ、未日假宮迁
宮、申日古ハ関白詣あゝ、當日音楽み、翌日社司葵鬘等
桂枝と、禁裡仙洞、及び高貴の家ふ献ゝ則御簾ふ懸ゝ
賀茂地人巷ゝ門戸ふ掛ゝ、去ゝゝゝゝハ夏天霹靂の災(ゝ)、
祭の日、官家の人もの〳〵葵桂と衣領ふおゝゝゝ賀茂の地
ゝ、冬ゝゝゝと頭髪ふ挿む、今日葵鬘桂枝、ゝゝゝと諸鬘と
称ス、葵ハ静原より取来り、桂ハ松尾ゝゝ伐来ゝ、凡葵、當
社の神艸ゝゝゝ、桂ハ日吉神木ゝゝ[御生]ハ王依姫の別雷
命と産ふ日とゝ伐ゝ、実ハ申ノ日生まるゝハ、酉ノ日ハ、神の生まる
ゝゝと祝奉る伐とゝ云、御形祭御影祭と、同祭とゝ人あゝ、
別の祭ゝ御影祭ハ、三日以前、午ノ日ゝゝ、御影社ハ、洛北高
野川の東、御蔭山ニ社あゝ、即ち下鴨の末社ゝ、[康富記]嘉吉
二年四月廿一日丙午、鴨御蔭山祭ゝゝゝゝ酉ノ日ゝゝゝ、

午の日ゝ、別祭とゝゝゝ、[河海抄]賀茂祭の前日、飯前の石上ニ於ゝ
神事を御形と号ゝ、今本宮の北一町ゝゝゝゝ御旅所ゝ、道の
西ニ岡あゝ是ゝ御形の幄とゝ、[忌さ]榊取、
祭の日仮殿ゝの所ゝ建ゝ、

神祭

榊さす

是ハ賀茂祭とゝゝ、○或説ニ云ハ四月ニ中ノ酉ノ日ニ祭ゝゝ、故ニ祭ニ加茂、連奇ふ付ゝと嫌
加茂ゝゝゝゝ名の祭と夏ふ、
ゝゝ[貞享式]四季ふゝゝゝゝとの八祭と鶯の類ふ同じ、
つゝゝゝ其季の名目とゝゝ、四季の異別と多ゝゝゝゝ、
祭の一字ゝも御祭ゝゝゝ秋ゝゝゝ、御祭ゝゝゝゝ、
ゝ諸社の臨時の如ゝ名目ゝゝゝゝ

月ゆうなれバ神山のあしの葉ぐさ　和漢三才画会　鳥葉の一名ニ
とよつきもちゐ、神山ハ賀茂の神山

貞好草

花の容姿約ゑる故ニ和俗、貞好草と名づく、

垣見草

卯花の異名、蔵玉時鳥とゝぎすかゝる山里の宿、

要の花

和漢三才画会　扇骨木、高サ二三丈、葉ハ海石榴の葉に似て狹く小〻、細き鋸歯あり、面滑らかなり、四月小白花を開く、細子と結び簇る、十八九月赤く熟す、其木最も堅く扇骨よりなほ堅し、故ニ名づく、　猿蓑集　注、秋の加部　洗濯や衣かけ迄材の花　蕉之

柳の花

和漢三才画会　燕子花、其葉白菖に似て

杜若

和名抄　大こ、色深く、其花実ともに白菖に似て肥大なり、紫色を正とす、近ごろ浅紅色なるもの白色なるものを出す、変種ニ、五月ニ盛とす、又四時に花を開く、参加ハ橋の産名と得たり、○貞ごろ花　蔵玉　多つくるの多き中にも花わ油さしたる紫ゆゑ、○貞花　仙覚万葉抄　かゝる花ハ杜若ニ、貞鳥の啼くを咲バかゝる花と云、万葉ニ貞花とゝめるハかゝらざるを定めがたし、姑く仙覚の説に載る○かきつばたの説ニかくの如く仙覚の説に載る○かきつばたの

杜若の字を用ゆるハ実ハ誤ニ、杜若ハヤブミヤウガ、燕子花と書くべきなり、又和名抄ハ劇草とゝきつくと訓ず、

風車の花

花彙　縵枝牡丹、蔓艸葉整鉄線の類ニ花ハ新りく草葉菁碧色、其形風車に似たり、又白色あるも、三四月

かんて鳥

和漢三才画会　加豆古字鳥、正字未詳、疑らくハ是郭公ならん、状ハ杜鵑及び虫食鳥に似て、微赤色と帯び、腹白くして黒斑あるもの、脚の指も亦ニツ前ニツ後、偽て杜鵑と為く、貴之、仲夏の後声あり、秋後色とゝぶ、其色大円亮、加豆古字と云ふこと、毎ニ山林にまぎれて人家に近づく、○真渕翁ハ俗ニ云ふ鳥、寅子鳥の字音に唱へ誤まるなり、

天蟲

月令　孟夏

月令畢事、官記状、和漢三才画会　蘭と作らんと十ゝを、蔑ニ、体く掬ゝ、こまに放つ、素と食ずして、身白色、透明なるを擇取て、櫃の中に投ず、光ゾ稍あるハ、杜蒼蒼と用ゆ、縱ゝ多ハ内ゝ蚕の寓居ゝ、数千の蚕ものゝ〻ものと作て蠶ゝ、○原蚕　周礼註ニ、原ハ再也、○一名晩蚕、二番蚕ゝ、春部あるべゝ、

○蚕簿、え、蟹子 [益頌毒注] 蟹の類、今人以て食品とす、佳味なり、[和漢三才毒金] 蟹ハ江海に生ず、大なるもの味美く塩水と以て煮熟する時ハ純赤色に変ず、甲と脚とハ白肉と取り食ふ其黄なるもの最甘美なり、山谷間溪澗に有之、十月丑日毎に必群出て上人其日と候ひ多く捕ふ、亦一異なり、[大和本草] 蝦蛄 [山領表録] 前両脚大きく人の指の如し、長尺余、上に芒刺あり、鉈くてもと砍觸すべし、[和名抄] 擁劍 和名加數

米 [多識篇] 蝌蚪、加佐美

兼三夏物

翡翠 時珍曰、大さ燕の如く、啄尖りて長し、足紅なり、尾短し、背の色翠色、碧と帯ぶ、翅色黒色、青と揚り、女人の首飾とす、[和漢三才毒金] 鳩、俗云山世比川世 形小く、池川に在り、奥と捕ふ、翡翠、俗云山世比川世 形大く山溪に在り、魚と捕、世比と、此微の假名相通ずるなり、其穴に窠つくる、横に入ること一尺ばかり、其中に雛す、[庖厨本草] 鳩、和名曽比、○世鳥、魚と害する故に、鳩天狗、水狗、魚虎、魚師、[多識篇] 蝌鮒、加仁比志古 の名あり、

蟹鰒 [多識篇] 蝌ハ塩蔵のもの、[三代実録] 元慶三年正月三日癸酉、摂津国蟹背、陸奥国鹿腊以て贄とす、御膳に奉ずと、[後集] 春ハ蟹と蚋とハ雙ハ蟹と蚊と云、或云、蚊ハ文也、人の肌膚に文まるの義なり、○時珍曰、木の葉及び爛灰の中に生じ、子と水中に産む、子子虫と云、仍て変じて蚊となる、[五元集] 蚊柱に蟲の浮橋かくるかと 其角

蚊火 蚊火と云、[月令廣義] 蚊 鼈の骨を煙に焼けば蚊去る、諸魚の骨を煙に焼けば蚊と去る、同く焼く、○拙と追はらふと遣ると、鬼やらいも同じ、やらひやらふ、[多識篇] 蚊遣火、けば蚊をふせぐ、死す、次に鰻鱔の骨、次に水中に浮萍、蒲活し、

蝸牛 [紀事] 此月より五月に至て霖雨詞しきりに蚊やらふ、[夫木] 牛の子ふふるるあるとき、蝸牛多く出て、或ハ床に登り、又壁に黏て高く登る、其延蹟て盡るハ隨て落て、其貝のみ有て、人と見ること、蝸縮て、児童聚て出出虫、出出虫と云、出ざるときハ釜と打破らんと、此虫の見て、俗に釜と称ス、[五元集] 丈ふ形ちの蝸牛角あるべきと身と肌なのごとく 寂蓮、七ふふまるの庭のとつり 其角、○丈七ハ髻結師なり、

蝙蝠 時珍曰、蝙蝠、齊人呼て仙鼠と云、形鼠に似て、灰黑色、薄き肉翅あり、四足及び尾に連合して一のごとし、夏生じ冬蟄す、日に伏し夜に飛く、蚊蚋を食ふ、自生育す、○又紙扇とかはぶりとも云、

蚊帳 蚊帳ハ単帳也 荊楚歳時記 蚊帳春葱 春葱ハ初生の葱を食ふ、針の如し、俗に蚊帳と云 説文 久葱春葱の二種あり、本朝食鑑

醋味噌 和名抄 醋味噌ハ和名抄に見へたり、

五月

揃 朔日 紀事 五月朔日旧例に依て、京兆尹、馬一疋を出す、其外武家、願ひあるに依て、仮借くるものとなむ、其騎者上賀茂の氏人出さるとの、壮年の人と撰ばれて、各禄を給ふ、端午の騎ともなるものの、壮年の人と、各禄を給ふ、凡馬負北疋、騎者ハ烏帽子浄衣を着す、社司各塀の外に坐す、先一人毎に馬に乗り、馳駈して、その遅速と考へ、執筆をして是を記す、後馬の遅速同じくば、則二人をして乗らしむる故に、さ記、後馬の遅速同じくば、則二人をして乗らしむる故に、足揃えて、荒手結と、馬場に来樹あり、この内に於て勝負を決せしむ、検見のこの鐘を撃て、執筆これを記す、この揃と勝負の木とは、馬場の木、勝負の木の南に攫ふ、是と出馬の木とは、又其次に一株あり、是を三鞭木と称す、騎人これを於て互に声を揚げ鞭を挙ぐ、見物の良賤群集して、塀の外に並居る、

艾虎、艾人 蒲人 荊楚歳時記 艾虎、天師を畫、艾を以て虎の形をなす、或ハ絲を剪て小虎を作て、以て艾の葉に帖て、内人爭て是を相戴く、○円上 五月五日人家百草を竭て艾を採り、人を作て、戸上に懸て以て毒気を攘ふ、○蒲人 金門記 午日菖蒲と刻て人或ハ葫蘆諸物をつくり、幷に戴く、以て邪を辟く、○画天師 歳時雑記 端午に都人、天師を画て以て賣る、又泥塑天師を作て、艾を以て鬢に置て邪を辟く、

蒜 蒜 和漢三才画会 五月五日、家毎に蒜及び甲冑の兵器を立、俗呼て曹人形と云、其刀菖蒲を以て是を飾る、仍て菖蒲刀と号く、荊楚歳時記に、昔人、門上にかけて毒気を攘ふと、是曹人形と趣相似たり、相傳に、光仁天皇天應元年、蒙古の賊来る、早良親王と、親王と討ひむ、親王、藤社の社に祷て出陣しむ、時に五月五日、忽ち神風吹く、敵船を覆して立どころに皆敗走、戦ふ事なくして勝ちぬ、此因縁を以て今に至る

五月五日の祭ニハ兵器を用ふ民家も又ちまき、藤森社八、州
伊郡に舎人親王の祠あり、弓矢政所と称ス是く蓋其ならん
古の襲来ることを、国史にもみえたり、

擬餅

歳事拾遺 五月五日米の粉をこね
○藤森社祭の条見合すべし、
後に記すべし、中に餡と入く、合すること編笠の形の如く、擬の
葉を以くつゝ、蒸ることを擬餅と云、畿内にこれを用ひ
ぬるのもあり、

賀茂競馬 五日

討林采栗 或記云、祭初の日に
馬を乗る、志賀島の官、欽明
天皇の御宇、天下世挙て風吹雨零時に卜部伊吉若日
子命に勅して卜ハしむ、乃チ卜ハして奏すく、賀茂の神の
祟と、仍て四月吉日を撰び、馬に鈴をつけ、人猪影と蒙
りて駈馳て以て祭祀をなす、能禱祀せば、因之五穀成
就天下豊年と、乗馬ること始まる、

注進略記 五月五日の競
馬八七十二代堀川院、寛治七年、五穀成就天下泰平のため、
えらばれて十番北廷の馬料と寄らる、例年是と行ふ絶、

紀事 この日、音楽あり、午の時競馬あり、近衛院康治年中
始て行ふ、ちなみに其始ハ臨時の執行、後世五月五日式日と
なしぬ、古へ諸社毎に多く競馬あり、今漸く絶て存する

夏 か

処のその帷に当社競馬の料ある故に、今に至て断絶せず、
今日乗る処の舎人北人各冠の纓と巻き、纓と付け、左の方へ
赤袍を着、右の方ハ黒袍を着、各南の一の鳥居の外に
於て馬に乗り、馬場の上より馬場本に至て、先ず一番
とをとゞひ、左右一疋毎に馳す、是を空走と云、その後各お
らべ馳ス、遅速を争ひ勝負を決ス、古へ、ゆゝしく真手結
なり、

文昌雅録 軍中端午を以て
馬を走ること、

踏抑

和漢三才図会 通俗夏月必
用の衣、九帷子と名づく、端午ハ五月を着る、浅黄色、用ふ、
七夕ハ朔ニハ白帷子を用ふ、近代ハ庶人の通例なり、按、和名抄、帷
和名加多比良、

鹿子百合

花律 白花紫点あり、其花横に向て開く、
紫点ある由なり、鹿子百合と名ぶ、

河原撫子、唐撫子

大和本草 撫子の条に注す、

萍蓬

葉ハ芋に似て厚く光あり、茎つゝ水上にうちのびて、葉も花も
水面に浮ぶ、根大にして夏月黄花を開く、秋の末迄あり、一茎一花
と云へり、賞

酢漿草花

蘇頌本草 酸醬草、嫩の時小
児喜て食ふ、○時珍曰、名

酸毋此三葉酸し其味ひ醋のごとし苗高さ一二寸叢生して地ふ布く極く繁衍す一枝三葉兩尼晩ふ至て自ら合帖整こと〳〵一の如し四月小黄花を開き小角を結ぶ長一二分内に細子あり

蚊幬釣草

和漢三才圖会 葉穂とも ふ續根草ふ異冬も亦凋まず

ありとよ多し但し根細き髭のごとく子あり引ふ拔や す〳〵其莖二稜を小児中間と裂て引擴げ以て かの蚊帳を釣ふ比し〳〵戯まず蓋し是香附子艸の雄く

輕息子、鴨の子

本朝食鑑 車鴨、輕鴨、芦鴨、この三ハ四五月ふ至りてあり冬も亦凋まず

もあり或ハ夏秋さ子すあり〳〵歲ごとふもあり野水田溝ふ栖て或ハ孕ミ或ハ孕ざるもの〇凡鴨の子、初生其毛黄白色卵を出さ〳〵水上ふ浮ぶ

藻塩草 かりの子ハ鴨のかひこ、

御仝 古哥ふかりのこともよるハ雁ニハ

あ〳〵ず、鴨の子のこと多し

鹿の子

紀事 毎年五月の時節、南都春日山ニ麋鹿の子漸く成長す、

ちゝ〳〵ども力ゆゑ足らず、康子市ふあるを若狂犬ある時ハ、噛て殺ことあり、ハ死ふ至る、この故ふこの節、興福寺の下僧又町奉行の小吏相隨ひ、市中と徑廻り若頑犬あるべきを

ゆゑとゝ〳〵その脚の筋を斷く其犬をして、横行せしむ、

六月

掛鯛おろす

朝日〇春部の掛鯛の条注ス

嘉定喰、

嘉定錢、かつゝ、

世諺問答 六月十六日嘉祥ハ、仁

〇十七日 明天皇二年六月十六日、豊後国

白亀を献ず以て吉兆とす〳〵祝之是ゆゑ嘉祥の儀

改元のこと更ふ本説あり、只彼錢の銘ふ嘉加定通宝とこれ

ハ勝ゝ名詮を賞詠すべし〇

長明四季物語 仁明帝

兼和のこゝろ御代の栄ゆゑ、賀茂の上の社ふ奉

て、御祓とゝ〳〵ゆゑ六月十日ゆゑ六日あん吉日ゆゑ

御占の人ゝ考申上ゆゑ其日行ゝ年号と嘉祥と

改元あるゝと社司の日記ニ云ふ〇一説ニ嘉定喰とゝ

室町殿の大樹のとき六月納涼の遊びふ揚弓と射る ふ賭と

して、まゝたくさんの嘉定通宝の錢十六銅を出して、何ふ

も飲物を買ふ、ちゝ〳〵のとゝ〳〵ゆゑ故ニ嘉定食

と号せ〳〵此錢ハ宋の寧〳〵年号ニて、十七年ふ其年

毎ニ鑄ゝ錢元年より十六年迄の印あると擬て、其

日のまとに於て其の代を定めらるゝ、御湯殿記に女房詞にて
かつうとの丁〻ゝゝゝゝゝ、かつうゝゝゝゝゝ八嘉定通宝と申略して
のゝゝゝゝ、

紀事 今日公家武家同じく嘉定の祝儀を所謂
嘉定通宝十六枚を以て食物をうひこまを服まれば其家の
福おう、故今に至て其例ふあらふ、又嘉通と、勝のお語相近
し、故に武家吉兆銭とす、此日五色の饅頭、其二諸品と土器
二枚に盛て、各白紙を以て畏て水引を以て結ぶ、群臣に
左右ふの儀を、是十六銭と以て求得の遺意、諸家に又
此儀を、或八孔方兄十六枚、或八米一升六合、家臣おあつふ
を以て雑品諸物をとの〻こまを献ず、又土器に杉の葉を
を、其上に大饅頭三を盛り、杉原紙を以て是を包み、凡物
毎に十六の数を用ふ、今夜諸家の中、十六歳の人、振袖を切
て詰袖にし、是を月見にし、その殺ハ土器をとる、処の大饅
頭の真中、穴をとゝぐ、其穴をとゝし月光をとる、是今宵神
をとゝぐ、

上難波御神祭

の式、

紀事 此社ハ生玉の北にあり、祭
神比賣古曽の神、本名八下照姫命、大国主命女 天雅彦命妻 始て天の磐
船にのりて地に降る、高津宮 其船祠と、磐船大明神と号す、
仁徳帝都をこゝに遷し、高津宮と号す、当社神傳紛
失、当社を仁徳天皇の宮とするハ非、社司木津川に出て
御祓を修す、

賀茂六月能

の神事、音楽あり、祓を修す、地に
各茅の輪を脱出、又枯麻の條を以て、木偶人を作り是を
川水に撒、今日六月の能、丹波矢田太夫、とつむてしを
御手代会と云、社司真素氏十ケ酒鍋一双、楽座におくを
とゝ、始る是旧例、この能一座役者七人、ゝゝゝ、其藝
つゝもし故、世七人猿楽、

神事次第 六月廿九日小月廿日、
御手代会、兼日仮幄を儲、夜遊神前おいて乱舞、中古
猿楽女田楽の風流、○今宵名越の神事をとゝ、
社司神人切の〻てをを祓除し、菅貫の輪を入る、
とゝ

唐崎参

晦日

海志 唐崎大明神八、女別当山王大宮初
鎮の地、

紀事 相傳ふ此神日吉の末社、
社家樹下生源寺の祖神、一説に是佳吉明神、
皇の御宇六月祓を修す、処、今日参詣、平日の千度に
る、故に千日参と称す、神頼ある人八、形代撫物
木を以て小鳥居を作り、社に供ず、

[釈日本紀] 人形ハ所謂素盞烏尊の鹽鰭手足の爪と抜其罪を贖ふ身の代の幣、[神祇式] 大祓御贖物鐵人形二枚、○形代、人形ニ撫物ヲ以ハ人形と撫ヽ吾身みそくゝ[illegible]の災殃を移ーく流もとのゝ贖物ハ罪と贖ふものゝ[illegible]則人形 川社 [式部、夏神楽の条ニ出] 雷鳴陣 [西宮抄] 六月雷鳴陣、大声三度以上、大将以下帯弓箭、候御前、孫庇額間、左右兵衛立南庭、敷雷鳴御座、鳴盛時分陣遣、后殿、外衛督佐、候殿上者、[illegible]帯弓箭、薫中候解陣、

微涼 [呂氏春秋] 東南之風曰薰風、 風薰 [唐太宗詩] 薰風自南来、殿閣生涼、

容臭ハ香物也、形容の飾と助為ス故、容臭と云、櫻と以ーこゝまと佩ぶ、後世の香嚢即ち其遺制ヽ [源氏梅枝] くのゝ[illegible]のハうすぶそくハ、[illegible]百歩の方ハ香気の遠く聞ゆるもの、百歩と云ハ[illegible]

○薫衣香、一名黒方、ゝと薫衣香もたきものゝ方より出ふ[illegible]ゝ、俗、白い袋と云其方数種あり、[紀事] 五月禁裏より

掛香 薫衣香 [礼記内則] 衿帷皆佩容臭、註

白袋と諸家ハ[illegible]是夏日汗穢の臭気を除んが為ゝ [雍州府志] 懸香ハ香剤各兼珠りく調合ゝ各軽重多少の謂也、

ゝと滚合ーて肩代に盛り、帷の両角に緒と着て衣の領ふ繫、 川狩 [紀事] 此月賀茂川、高野川ハ瀬川、嵯峨大井川、梅津、桂川、吉祥院村、鳥羽、淀川、宇治川、所ゝ[illegible]ゝ良戦川狩ゝ、捭網、或ハ扇網と以く抛之、或ハ簗と設ゝ夜入ゝ炬と燃ー、魚と驚ーて抛之是と夜振ゝ、或ハ鵜と放ゝ抛之是と鵜川ゝ[illegible]川狩ゝ[illegible]

射干 時珍曰、射干、其葉最生ー、横ニ鋪くゝ一面、鳥の翅及び扇の形の如ー、鳥扇、鳥翼ホの名ゝ [介雅翼] 射干春生び苗の高さ二三尺、葉蛮姜ホ似く狭く長ー横ホ張ゝ翅羽の形のごゝ、葉中茎ゝ抽くく、萱艸ホ似く強く硬ー、六月花ゝ[illegible]く、黄紅色、瓣上ホ細文あり、秋実ゝ結び房ゝ[illegible]ゝ、中子黒色ゝ根髭多ー、 干瓢剥

新干瓢 [和漢三才図会] 乾瓢、土用の中ゝ[illegible]ゝ、皮おゝび瓢を去り、白肉と用く薄く剥連ゝ[illegible]ゝ一二丈、紙紐のごゝ、架ホ[illegible]く晒乾す、横ホ切ゝ両ゝ連ふゝ[illegible]ゝ色と変ゝて佳ゝ[illegible]ゝ、 眼皮

同上 眼皮と剪羅と一類異種、春苗と生び、柔うして青緑の葉、剪羅より厚くして、円く尖末尖る、六七月花を開く、剪羅花に似て、刻歯浅く、其色肉赤色、俗説云達磨大師九年面壁の時、眠らざらんことを欲し、自ら上下の眶を剪りて棄し地より此草と生ず、其花肉赤色、以為らく眶に似たりと、因て眼皮と名く、

楮花 紙漉草

時珍曰、楮、とし、柠に作る、其皮績ぎて紵とすべきの故なり、按に許慎説文曰、楮穀、乃ち一種にして雌雄と異なるのみ、雄は皮斑うして葉に揉あり、三月花を開く、柳花のごとし、実と結ばず、雌は皮白くして葉揉なし、碎花を開く、実と結ぶ、揚梅のごとし、南人皮を剥ぎ搗き煮て紙を作る、又縅練して布とす、堅くして朽ちず、

和漢三才画会 楮皮今多く紙に造る、布と織る、木綿と称するこれなり、○楮は時珍が説の如く、三月花あり、六月の説は誤り、故に雑誌抄に花と云へるは楮とバくと李とすべし、李は常に濃く李と同じく、殊に夏濃は紙臭気ありて下品、楮も種類あり、大和本艸に、山楮、一名ガンヒ、又山カゴと云、其木も皮も櫻に似て、葉は桑に似て小し、四月に葉と生じ、枝長く高数尺に過ぎず、深山に

花は桑の花に似て黄し、夏の末に咲く、その皮を剥て楮の如く煮て紙を漉くこと、以之夏とす、

蒲の穂

和漢三才画会 香蒲の花の状、頗る鉾に似たり、故に蒲鉾と云、又蝋燭に似たり、

芋

和名抄 芋、和名加良毎之、是香蒲の穂なり、○お部麻の条に委し、

韓瓜

甜瓜に似て大きく、皮こまかく、味劣る、通俗志に熟瓜と訓ず、

四月

浴佛

お部仏生会の条に出づ、

吉田祭

中子 延元年十一月廿五日中の申、今年始て祭礼誓願をなして公家の御沈汰と云る、江次第 四月中の子、十月中の申、裏書に吉田祭 永延元年始之、山槐中納言、一家ごとに祭るべきこと、○吉田乃春日、中納言山蔭卿の建立、祭日、幣帛使、内侍の使に立の倭舞を奏す、江次第に委し、

餘花

題林抄 余花、春過ぎて遅く咲くことをいふ、山深き時に、夏の来るを知らざるに、青葉の中に咲るをいふ、

よろひ草 牡丹の一名、名義未詳、

夜白

夜白艸の異言なり、

草 [開元遺事] 明皇沈香亭の前の牡丹一技二次朝ハ深碧暮ハ深黄夜ハ彩白あり香艶各異帝曰こは花木の妖なり揚国忠あり百宝と況く樣々ナリ○天津人今やぐらうて詠むんよろろいろる花さくさくろ、南院花大日

芦原雀、葭剖 [部] の条あてこるべし

五月 蓬菖

[歳時記] 端午ハ菖艾を刻み小人子或ハ葫蘆のくくりとつくりそこまと帯ヨリハ邪を辟く [荆楚歳時記] 五月五日雞つまこ鳴さる時、艾の人の形ハ似くるものを采り揽てこれと取収く、病ヲ灸す甚験あり○是らの説より屋檐ゑもの菖あるこ

六月 吉野の蛙飛 九日 當山の蓮花会

吉野郡の内、蓮池ヒ云処より毎年蓮花を蔵王権現へ奉るこの花を管二植く輳とケ、九日の早旦ハ神輿を舁ぎ山中を持ちあるく、つぎて在家のこの子供ハ母衣と負こる物を渡す、夜ハ入ると、當山の僧徒、蔵王堂の前ハ行法あり、其刻下ごくのとのハ蛙の形を作らせ、堂の後ハ入おくこの形典ニ蝦蟇のごくく行法をとりてかの僧四人松扇ハく

先の蛙とハ弦ケバ、堂後より飛出ル四人の僧の膝ヒとを めぐり飛ぶ是と強く初ヲ責ル次第ハ世あるまて、堂内と 近まりくと終ハ初ヲ殺す其後ハ板ハのせて 堂外へ舁出し湯水とかくるとて蘇生スとそ、

節折

晦日 [公事根源] ト部竹の節を庭中席の上ハおく節折の余婦竹とをて参ラセ、御ケようこあて、夾この寸法をとり、果ルく官主ごくりあてごくせて御移とつをむるあ、ケ、 ごくくとて二度あて、二度ケく禄をすくこ主ハ主上の御くケの寸法をとりく其程をりあてくだよをりこと 節折の節ハ竹のよ、和名抄両節間俗ニ云世○是即ち荒和抜 の御贖物あて、

七月

多賀祭 二ノ午 [社説] 江州犬上郡、多賀の大社ハ伊弉諾尊、本地ハ毎量寿仏、鎮座年歴詳ならず、例祭四月二ノ午日、祭祀當日、神輿本宮より艮の方一里ばかり栗栖村の大宮所へ渡御、供奉行装鉾士二本、神馬三疋、弥宜四人、神子二人、随身六人、神主三人、馬上其外氏子村ごとの種々の造花と生す、凡六十本ばかり、遂物ハ年々思ふ所ありて定ふ神輿三基渡御、坤の方、賓堂の社まで、大社の御使ら

て殿一人健児一人叉向行列先途拂十二人ひつぎ六人黄の直垂三十人調度懸六人神事の盛固八彦根の城主ゝ八物頭二人ゝと生さる、雜談抄此ごとの頭人と定ゝ八正月三日ゝ、氏子の中豪富のものゝ撰ゝ夜ゝ入ゝ神慮どうゞひて之ひ其頃おゝる家ゝ神官榊を立る、其頭人神供来幾許ゝと捧ゞ、祭の日四位ゝ準ゞ、衣冠と着ゝ社久へ叅詣一族一門風流と尽ゝてゝきゝふちぶゝ、

當麻祭

上・申○大和国葛下郡當麻

都比古社二座、曆子王子命、比賣命、

公事根源大和国ゝ侍る社ゝ午日使ゝ、龍田祭ひ部廣瀬

祭の祭ゝ

鷹鳥の塒入

和漢三才圖会四月羽毛と易んと

ゝゝゝゝに幸繻を解去ゝ、鳥屋の内ゝ放つ餌食意ゝ任す日と逐ゝ脱落ゝゝ新毛と生ゝ七月中旬舊のごゝ、○庁鳥屋初年両庁鵜歳

鷹鳥百首抄四月八日鷹と鳥屋へ入ゝ毛と脱て、此時羽虫の茅と飼ゝゝ又餌をと飼ゝ是とゝゝ孔飼ゝゝ或八鳥屋蹲鳥屋ごゝう、鳥屋鷹毛とつる鷹、ゝゝゝゝ夏ゝ又ひむろ山どう板あゞ皆此時のうゝゝ、

夏ゝゝ同三百首抄鳥屋へ入ゝて、動気の茅と羽虫の茅ゝ飼ゝ此茅八榎木の朕ゝなる水と、どうけの茅ゝ用ゝ其水取ゝ置ゝゝゝゝゝ、紙ゝ敷ゝて置ゝ後ゝ用の時、ゝゝゝゝゝゝ竹のとぐゝゝゝ涌ち水も同じゝゝゝと小壺の水とゝ、○ひむろ山と八、同抄ゝゝ鳥屋ゝて、出て塗ゝゝゝゝと、氷室山とゝ、其中ゝ桶とゝゝゝ、水と入ゝを下行水とゝ、○どう板同抄ゝ鳥屋の内ゝ水と流ゝゝゝ、古き飼を洗ひゝゝゝんためゝゝ、

盧橘

日本紀垂仁帝九十年の春田道間守ゝ命じて常世の国へつゝゝ、非時の香果と求しむ、今橘ゝ是ゝ同九十九年春非時の香果八竿八縵と得て還来る、本草樹の高ゝ丈余、其葉四頭ゝ尖り、緑色光面、四月小花ゝゝゝ、色白甚香ゝ、古今五月ゝつもゝゝちむかのゝどかぞへむ、の人の袖の香ぞする、○古ゝ賞ゝゝゝゝの橘、其種詳ゝゝむ、源氏物語、枕草子ゝゝゝ、花も実もむつゝ具ゝゝゝゝゝゝ、去年の実の今年花さく迫落ずゝて、黄熟

て殿一人健児一人叅向行列先途拂十二人ゆつるく六人黄
の直垂三十人調度懸六人神事の盛固八彦根の城主ゆゑ、
物頭二人ゑまと出さる、雜談抄此ことの頭人と定こハ正月三日
ようゑ氏子の中豪富のものと撰ゆく夜こゆく神慮どうぐ
ひて之むし其頃におゆる家み神官榊を立る、其頭人神供来
幾許ごまと捧ぐ、祭の日四位ゆ準ずゆ、衣冠と着し社久
へ叅詣一族一門風流と尽してこまゆもぐゆ、

當麻祭

上申○大和国葛下郡當麻

都比古社二座、曽子王子命、比賣命、

龍田祭

ひ部廣瀬

公事根源文和国に侍る社く午日使いり、

鷹鳥の塒入

和漢三才畫会四月羽もと易んと
祭の祭ゆ
すももこ幸緋を解去ゆく、鳥屋
の内ゆ放つ、餌食意ゆ任す日と逐ゆ脱落ゆ新毛と
生ずゆ七月中旬舊のごゆ○片鳥屋初年両片鵜
鷹百首抄四月八日鷹と鳥屋へ入ゆ毛と抜ゆ、
此時羽虫の茅と飼ゆ又餌をも飼と是とゆ孔飼
ゆゑ或ハ鳥屋蹲鳥屋ごとう、鳥屋鷹毛とゆる鷹、
ゆごゆゆ夏へ又むむろ山どうゆ板ゆど皆此時のうゆゆ、

夏ゆゆ同三百首抄鳥屋へ入て、動気の茅と羽虫の
茅に飼ゆ此茅ハ槇木の朕になる水とどうけの茅ゆ用ゆ
其水取ゆ置ごゆゆうゆゆ紙ゆ敷て置ゆ後ゆ用の
時、ゆごゆて竹のとぐゆゆ溜る水も同じゆごと
小壺の水とゆ○ひむろ山とハ同抄云むし鳥屋とて出て
塗ゆゆると氷室山とゆ、其中へ桶とゆけゆ水と入ゆを
下行水とゆ○どう板同抄云鳥屋の内ゆ水と

盧橘

流しゆく古き飼を洗ひゆごゆさんためゆり、
日本紀垂仁帝九十年の春田道間守ゆ命じて常世の国へ
つゆり、非時の香果と求しむ、今橘ゆ是へ同九十九年春、
非時の香果八竿八縵と得て還来る、本草樹の高ゆ丈
余、其葉内頭に尖り色緑色光面四月小花と出て色白ゆ
甚香ゆ、古今五月きつもゆ花ちゆ出のごとゆ
人の袖の香ぞむかる○古へ賞もてゆ橘、其種詳ゆ
む、源氏物語、枕草子ゆ花も実もゆつゆ具ゆ
ゆゆゆ去年の実の今年花さく迄落ずして黄熟
ゆゆゆ漢土ゆ橘の種柴ゆつきて八説ゆ
ゆゆゆ○もゆゆゆ孔ゆ只橘とのゆ

いひくも、匂のえもいはぬ夏もの、猶春のた部、橘の条侘セ、

王巻葛 興 俄

抽 王巻葛ハ葛の手と巻くを、玉巻葛の略ニ巻きもたれば也、

王巻芭蕉 時珍曰、蕉葉と落さず、一葉舒るときハ

荻枝折 葛の手と巻くを、玉巻葛と云、

一葉抽る故ニ蕉と云、○初夏中心ニ新葉と生ずるを、冠と巻葉と云、王巻芭蕉と称するゆへ是なり、

筍 時珍曰、筍、俗ニ笋ニ作るハ非、竹筍と笋と同性滑利、多食ハ人を泻セ也、凡竹筍ハ淡竹と上と、苦竹次と、紀事

凡笋ハ康猪甚好ミ食ふ故ニ夜ゝ人とり追ハ也、和名抄 笋 和名太加波奈 源氏機篠 たけのこ

橘鳥 杜鵑と云、万葉、橘の林をとゝもむるさつきの常ふ冬まで

すゝ咲ときゝがふ、古今 やどり せ花ちるもなほかゝ

あどけなきこゑ

蕪三夏物 和漢三才画会 蕪 大紅 青蓼 二三月ハ

蓼 蕪と生ず、四五月繁茂す、秋ハ至て穂とをす、

蓼喰虫 孔叢 有蓼虫賦言、是虫幼長斯蓼不以為辛○

播磨津国毎ニ穂蓼と出ス年中穂ニ成ル一異ニ

世俗ニ蓼食虫も好くとも是ハ生る諺なり、

五月端午 五月五日端午の節、端ハ初ニ、午ハ古ヘ五字と通用す、もゝ〻ゝを八五月初の五日の謂ニ、珊瑚鈎詩話 端五の号、重九ハ同しく、後世五、

字と以て午とす、ハ誤なり、風土記 仲夏の五日を端午と云、

竹植日 竹醉日 晉書 五月十三日を竹醉日とす、亦竹迷日と云、是日竹を栽ゝ必活、竹譜

竹を種るハ雌雄ハ根を、雌ハ子を、笈日記 降子を竹植る日ハ簑と笠 和 五元集

五月十三日 雨雲や竹も醉日の人おぼめ 其角

田植、田植歌 早少女 早苗取

若苗、紀事 九五月の尾ゝ六月の首ニ至て、苗種生長すると

王苗、民間ハ苗代と云、苗を植んとして先苗を抜を

早苗取と云、農民男女混雑して再び苗を挿む是を田

植と云、女子苗を種るをのゝさゝとめと云、各音を揚ふ、

是を田奇と云、或ハ児童太鼓をうちくゝまと勧む、苗を

種るを半夏生の前ニ至、○若苗ハ早ク長セざるを上、○

玉苗八、王八称美詞、小山田ハ今ハ玉苗植てなるゝとゝめぐとすそゆまて出るの仕業

秧百合 和漢三才

畫会 花正白、葩厚く大きく上向ハ或ハ横ハ垂る、最愛すべし、

深山溪谷の間に出て、其根を得ざるゝ、繩ハ縋り下りてゝづ

ゝ一株秧ハ入くゝ縋て上る故

六月 鷹鳥習と

ハ秧百合と名づゝ、こゝと珍重す、

学ハ 月令 季夏鷹乃学習、注学習ハ雛のもゝ〳〵飛ぶことを習ふなり、

滝殿 部 泉殿

の条

竹皮脱 本艸集解 時珍曰、土中苞筍各時を以て出、旬日籜を落〳〵竹となる、和名抄

籜、和名筍乃宇波加波、

田草取 本朝食鑑 種て後二十日前後田の雜草を除くとき、再び除く

箋、和名竹乃加波、去以て其根を固くす、蚤〳〵田草を除くとき、再び除く

の勞あり、○夏の秋ハ至迫、三度田間の莠を取、是を一番艸、

二番艸、三番艸とゝ云ふ、

簟 説文 簟ハ竹席、以竹を以て席とす、

和漢三才畫会 簟ハ竹筵、暑に用ゝ

鋪

抱篭 ち部、竹夫人の条出、

紈の納涼 み部、御手洗の条ハ出、

四月 鷹鳥爪 和漢三才畫会 列塠の樹高さ丈〳〵ゝ梢

小細氣條と出、緑色畧黒炎の三ハ

似て、其葉細く小、四月黄花を開く、緑豆の花ハ

似く繁く莢と結ぶ、是ハ鷹爪と云、一種木の屬、是と鷹爪と云、一種草の屬と云ふ、

閏月 花浅黄色、赤鋭かく鷹の爪ハ似たり、

五月 蠶豆 時珍曰、豆莢の狀老蚕の如

謂ふ、其蚕時始く熟す故ハ名づく、八月種と下す、苗葉と生ず

食べ、方ある豆中空すく、葉の狀匙の頭の如く、二月花

と咲く、蛾の形のごとく、紫白色、角と結ぶ、連綴す、大豆の

如く、頗る蚕の形ハ似たり、和漢三才畫会 其莢ハ向ハ故空

豆と云、嫩き莢豆と取て食ふ、五月熟す、○俗ハ此の類熟

くことを取

扱ふと引と云、

六月 相国寺懺法 十七日 紀事六月十七

日、洛の相国寺閣とゝ云ふ、懺法と修す、世間ハ懺法

所と云、松風の鈸、小狐の鐃、當寺の珍宝、是古く佐々木氏

寄附する所と、○寺中に定家卿の墓あり、但禅宗也、

つ

四月

筑摩祭

近江国坂田郡、筑摩の庄筑摩社、祭祀八四月朔日、或ハ初午日ニ、[神社啓蒙]祭所御食津神、文徳実録曰、仁寿二年三月甲戌、近江国筑摩神、従五位下ニ授ク、按ニ、筑摩の庄ハ大膳職の御厨の地ニ、故ニ當職祭所の神ニ坐ス、此地、恐ラクハ盍この神ハ稲食ニ掌ル、依ク、里女婚ニ会スルトキハ、祭礼ニ必釜鍋を戴ク、神ニ奉ず、不幸ナレバ、少壮の間、嬬ニ会ヒ、ハやむことを得ず、改て嫁ス、再び嫁する者ハ、二枚ニ用ひ、三ビ嫁スルトキハ三枚ニ用ひ、神幸の後ニ候ハ、中世、業平の花訓ニ、里婦笑儺を齎きて数枚ニ重ね艶態の故の為ニ、固ニ芦胡ニ、[雑和集]俊頼曰、近江国てまの明神ニ神ニ奉ず、其神の御誓ニ、女の男ニ、女の男ニ数ニ、鍋ニ、つくりてこの祭の日奉る、男ニ、男ニ、女ニ、ぐ、がりて、ニ奉ル、どちらもハ、地のあるこそやとおもひて、れむ、数のそくしていまだ、わかるる、、

委クハ春部、燕の条ニ、

王孫花

[各医別録]王孫ハ、海西、川谷及び汝南の城廓の垣下生

○毎膽曰、王孫、和名ニ、ハ、維、昔、本朝ニ、明ラケ、今識ル、ものの、惜哉、特ニ、毒ニ、療病の功最大ク、○今本邦の里俗、王孫花と称スルものハ、誤ニ、[和漢三才図会]鯽の小ニ、ものの、五六寸のものと津波須と名づく、西国ニ、ハ、和加奈と号、九月尺許ニ、ものと、眼白と名ク、十月二尺ニ、近キものと、鮒と名ク、江東ニ、伊奈太と称ス、仲冬長三四尺ニ、ニ、ルトキハ、鯽と名ク、

鈎瓶鮨

[毛吹艸]和名吉野のつゝ鮨ハ、曲物ニ、入レ、蓋ニ、手を付る、其形鈎瓶の如し、故ニ呼ん、一説、此鮨ハ、魴と取ク、鮨ニ、、、この曲ものニ、入ク、吉野川の水中ニ、沈め置ク、熟スル、期ニ、ク、出スゆゑニ、、、、、、、、、

月夜

[雍州府志]飯ずしの一名と、月夜と、六条家ニ、製之、異名と、月夜と、ハ、其飯の精白とを、、、

五月

黴雨、墜栗花穴

さ、部、五月、雨の条、注、

辻

良徳曰、つゝ、花と、、、、、赤き、惟子の、、、ハ、、、

花

犬追物秘傳抄後土御門院寛正六年八月、将軍慈照

院殿犬追物見物、射手、皆衣東日記、紅へざる
辻ゞ花の白帷子、もろはバ紅帯、拘〳〵ざら、

六月

月次祭 十一日 公事根源 こゝハ六月十二月年二度諸社へ御幣を奉らせ給ふこと、弘仁年中始る、

津島祭 十四日十五日 ○牛頭天王の祭礼、尾張国海部郡、門間の庄、藤波の里みなと、 社家傳習 記 欽明天皇元年、こゝと崇め祭る、天王始め西海の對馬降る後ハ尾張の海部ハ移る、仍て其旧地の名と表して津島と号す、嵯峨天皇の御宇、其祠と立つ、始の祠ハ柏森ハ移る後居森の地ハ移し、更ハ祠と今の地ハ移す、 神祭記 当社夏祭ハこの神島、鎮座の後、神民の夏日ハ堪ざると暗に、おぼしめし、避暑の為として、宵祭より前一三箇日、ちゝくの間、船の上の楽ハ殊に重楽一成の舞曲、妙音の笛声、別調と神製、しらべ、この楽の成と事楽舞、津島笛と、唤初めて、世に車楽の説、堂屋、大隅とゝ言ものと、十一黨の武士、計策と以て討取ゝ、ゝ起る、いまだ、社説、こゝと否〳〵、前説と用ふ、六月二日試手あり、八日に町毎の車屋ハ、調手し、十三日江口ハ

出て、暗の試楽、十四日の宵祭、十五日の朝祭、こゝと里俗打舞、こゝ、車楽、船上の挑灯、おびゝく三百六十箇八一歳の日数ハ象り、点、柱の挑灯十二箇八月の数、高擡四方の灯篭三十箇八月の数、宵祭を花寺観と、又翌日昧爽の祭もあり、この時市腋車と先と、津島の車楽山車、その前後、搏倫、〳〵、五村前後と論ず、五村ハ米屋、塘下、筏場、今市場、下搏是、社地前に大河あり、岐阻川の末ゝ、其中数町ハ及ぶ、大河ハ大船とうかべ、数千の挑灯と釣る、其影水ハ映し、恰も星の如し、○芦の神輿、 社家注進記 毎年御葦の神事、こゝと、国中の疫疫変異ハ、ト、こゝ、津島社記、神祭式ハ芦の御輿のこゝ、ハ、社説に御芦の神事あり、毎年六月十五日の夜、神主、こゝと行ハ極て深秘、こゝ、こゝ、その為る処、こゝ、六月拔の余風、こゝ、牛頭天王の修法、こゝ、こゝ物こゝ、旧記に、神翁一人、葦の葉に乗て浮来、その名、こゝ、後に馬津の居森の窟と栖、こゝ、こゝの神縁、こゝ、芦の神輿と称、こゝ、

夏 つ

露涼 露ハ秋花多し故ハ連俳通じ

秋ふすまぐれど夏も又ありぬ故、後漢書に夏季に、

釣鐘草 〔こくもと〕 花紫色、

下ゆくさて鐘と釣るさて鐘草、又白花

淫業のことのあるこ、葉も牡丹のごとし、

四月

練供養 〔紀事〕十三日〜十四日に至りて、大和国當麻寺にて、法会と修ふ十四日練供養を、僕射拱佩の女、中将姫の忌日に、中将姫、尼となりて、善心尼法如と云、〔練供養縁起〕この来迎引摂の法事は、恵心僧都なりとかゝこの僧都、和州の人、福寿村の人、雍染の後永觀中、叡山にこの法会をとゝめ、其後當寺護念院、本は紫雲菴とて、法如尼草庵の旧跡に、寛弘元年の比、僧都并に寛印とゝもに、此処に来り、本尊と廿五菩薩の假面とを彫て、同二年四月十四日、法如の往生の日と以て、迎接会と修し、是則横川の花堂院なりつも処に、〔一説に四月十四日八恵心僧都なりしめて法会〕と修しなり、日あるに、

兼三夏物 〔和漢三才〕

根芋 〔図会〕載、和名伊毛加良、云伊乍之、俗云須伊木、俗に根芋と称する八ずいきに、

五月 **合歓**

花 〔神農経〕合歓、鬱忿草、忘憂、蔵器曰、其葉暮に至て即ち合ふ故に合昏と云、〔和漢三才図会〕五月花ひらく、其花上半は白、下半は肉紅、散垂して、糸の如し、〔和名抄〕祢布里乃木、〔万葉〕あがきを神おもふ、又〔新六帖〕めるか

鹿狩 〔照射、火串、〕〔こくもと〕〔ろくしゃく〕〔獣狩〕

の花ともみるべし、獣狩おくに、夏季に、どこにハ鹿を射るに、間あるに夜、山の木げみ苫を焼、或ハ小炬を串につけて、是を火串と云ふ、其に寄る鹿、火影にきて寄り来る、牝牡日ごとに合、火をそこなはずして、鹿の目のそこなはずして、射取るに、哥に、

きもをの待と人ぞ

ともに法師なるに、云

六月

練雲雀 〔雲雀鷹〕

○九六月毛とかへて旧とあるに、俗呼て練雲雀と称し、毛とかへるとき、其飛こと速なるゆえ故に鷹と故なり、是と捕ふ事と雲雀鷹と云、○定家の鷹三百首の内、河内女が手引の糸の絡う雲雀一とう鷹とあるをて、○或説に練雲雀とは、音入雲雀の略語なり、

四月

夏羽織

草、あるひハ羅おゝ、近来の俗服し、

中山祭

中酉日 神社啟蒙 京三条猪熊の辺ゆ、祭る神、豊石曹、奇石曹命、明徳記 今六角堂の南、猪熊の東ゆ遷座あり、石上寺と云、兼邦百首抄 二条大宮岩神、付て云、中山大明神とハ、是三井寺北の院ゆ、新羅明神、素盞嗚尊 公事根源 永暦五年六月十六日、神社と建立し、同六年十月八日、従三位の神位を授奉る、後冷泉院天喜元年四月より八ゞ宮幣と五月五日新宮祭と修し、是四月の中の酉日ゆ、三井寺ゆ、是新羅明神の祭なり、

夏木立、夏草

元帝纂要 夏草、田茂草、木曰蔚林、茂林、○いづれも、新緑おゝいゞけるを、寄せ、

名取草

牡丹の一名し、藻塩抄 昔、ある女、この花を愛し、多くうゑおきて、食ハ終日あゞめ、夜ハよもすがら風ゆ撓ゞきことをあぞこるふりして、男、他の心あるとて、離別し、ゝ、どゞあきよう、仍て、元のごとく、すゝ、ゝ、ゝ、ゝ、名取草花、ゝ、ゝ、ゝ

郭璞書譜 夏山、蒼翠如滴

夏虫

身をこがす、即火蛾のこと、まさに蛍ともいふ、古哥に夏むし

夏野の鹿

宗祇抄 夏野の鹿は角生初め、短くして一束ばかりあるとのみ、

万葉 夏野去小牡鹿之角乃束間毛 妹之心乎忘而念哉 柿本人麿

五月

永根

和哥に、あるべき様とは、おもめのうし、根の永きものなり、永兼六年五月五日に、あやめの根合ありて、其式、弄合の儀のごとく、左の根、丈一尺、右の根、一丈二尺のよし、古今著聞集にあり、是は後冷泉院の御時、又都芳門院の根合なり、

苗

た、部、田植の条に出ず、

南天花

和漢三才図会 重譜に、南天時珍曰五月小白花を開く、竹に似て、子を生じ穂となす、紅なること丹砂の如し、久しく經ると雖ども脱ずと、庭中に植れば火災を避べし、甚験あり、近頃、白子の南天燭を出す、以て珍しとす、凡此樹、長ずること丈餘、山陽の地に大木あり、作品土品の山に、長さ二丈余、周り一尺二三寸あるもの、挽て作る、俗に耶鄲の枕と云、

瞿麥

常 漢

本草 徑目 南燭、丈燭と名ばく、

和名抄 瞿麥 和名奈天之古、一名止古奈豆

草花譜 瞿麥、草午あるものと石竹と名づく、千竹あるものを洛陽花と名づく、

蘇頌 苗高サ一尺ハうるし、葉尖り少く青く、根ハ紫黒色、形ち細蔓菁の如し、花紅紫赤色、五月に至て開き、七月に実を結ぶ、○大和撫子、唐撫子、川原撫子、鷺撫子、藤撫子、おの種なり、

栄雅抄 花の姿ちひさやかうるはしく、色々咲けばとさかき名子あるべく、撫子ともいふ、又盛冬一月ニハ常夏とよぶ、唐撫子ハ色この品あり、大和撫子ハ紅梅色なり、路鳥撫子ハ花の形あらくして名々、藤撫子ハ色ゆうその名あるべし、○石竹

和漢三才品会 瞿麥 即ち石竹なり、今以て二種とす、共に範の周囲に刺蓋あり、切叉あり、節紅紗に似たるものと瞿麥なり、如冬もさかるハと石竹なり、○かうるおうあり、なるべとハ、ゆうそうすあるものおうるおうる

夏菊

本草 菊、長菊、秋菊、冬菊の分ちあり、

蜀譜 引花史曰、四月に咲くものあり、張孝祥嘗て詩あり、五月に咲くものあり、陳子高嘗て詩あり、六月に咲く者、符離王常詞あり、秋冬に

冠くことのと必ず貴くとすべし、生月胡桃 博物志 張騫西域の使

夏ゆくことのを次とす、

かつるふ胡桃の種を得たり、本草 此果外青皮肉あり、こまと包む、其形ち桃の如し、胡桃八月おのゝ其枝に樹の高サ丈許、春初て葉を生ず、長四五寸両相對す、三月花を発く、栗の花の如し、実を結ぶ、釈氏切韻

茄子 一名紫瓜子、杜宝拾遺録 隋煬帝、茄を改て崑崙紫瓜、玄、多識篇 水茄 今按奈加比 ○谷茄、黄山谷曰、茄の老さるもの子堅し、谷の如し、穀子茄と名く、谷穀 晉通

六月撫物 神祇令 名越祓 名越祓とハ、名ハ、夏の部形代の条に出す、

名越祓 畧語 名越祓、夏越の祓と言こゝろハ不祥を解除、夏と越し、十秋ふ至らんとするの意あり、八雲御抄 名越とハ、おくゆる邪神と名づる故に、此説ふもっぱらなり、神と和す祓とも云こゝ、○荒和祓 荒和 同節 こゝ、公事根源 節折式 晦日の夜御贖物おくる、おくるよ 和歌 ふるゝの御装束、云こ、此次第 江次第 ふおくる、上部、節折の条、見合こゝ、○夏祓、名越祓、荒和の祓とハ惣名こゝ、

節折ハ天子の御祓おこゝ、大祓ハ百官の祓こゝ、部大祓の条おいるゝおとこゝ、○御祓、大祓、形代、小蠅声神茅の輪 麻草 流祓草おこゝ、頭字の部ふ分ち入こゝ、

吉今六帖 こゝ月のゝ人八千と毋の今のつと

りふ、

夏祓 夕祓 夏祓夕祓とハ、其時節時刻 夏祓 夕祓 夏の夕方

ものゝ、夏祓とこて季と定め、夕祓も、夏の夕方涼風と得て修する体、和奇こゝと読こゝ、

夏神 川社 奥儀抄 川社のこゝ、是ハ夏神ふのこゝ、神ふハ冬こゝ、

樂 おのづから俄ゝ夏こゝ、夏こゝ、する時ハ、こゝ川のゝ、みてこゝ、河の瀬ふ榊一本と立こゝ、挂おこゝ篠竹と柵おこゝ、神供と備ふ足と川社とふ、○俊頼朝臣曰、河社のこゝ、知人ゝ、ゝ、ゝ、

夏ごもり、行水の上おいそぐ川やうちかけまくあそぶあり
ゐ、初の哥、新古今集神祇の部に、延喜の御時屏風に夏ごもり
こころとなしに侍りけるとして、今まで時代はおぼえずとかしに屏風の
詞書にて、夏神事といふは、ぶ祭とまりて、はらへ、はらへ、の絵神あり
絵の中に川社とかきたるは、三月六月祓の時のこと、又右二首ともに
六帖冬の部、神事の部に載る、四季の部月の部、どれも冬の哥とせるは
さう如く、類とて、神事に入れも冬の哥とせるは、忠見集に、御屏風に六月
六帖にあるは、河社夏祓、神事に、神事に入れ、
河辺に神事する処をよめる　みそぎ
あごーの神事ちもーろこもあごーのえくどやて夏神事と
よめるは、河社とは延喜式六月大祓祝詞に天神地祇とある
ミそぎとうけたひ、河の瀬にます　瀬織津媛といふ神おはしもの
と、大海原にもち出く　放ちやるつーあくこの故に河原にて祓と
すれは、河とやどて河社とまうしやむーは川中にうそめに社の
うとと引結ひ、神供をと備へく祝詞をして、後別に神事とも
ちくうやうに　匡房卿六月冬の哥に　川やーみ秋とあすとと
ちくんだ千波のしめゆ風の涼しさ　藤中将資成朝臣の家の
哥合、後成卿の哥、五月雨の雲ゐもまとと川社ゆく衣とも

のに、風雅集兵乱成実川やーらもの波こす五月雨
に衣ゆすすーみひやもーくーんこ世ちらとちふふぐうあふ
こ事とそ、晦日に八月ゐ私の家　夏瘦　[万葉]石ー吾物尓
おくに、便りある日にするあるべーし　吾物尓
申す夏瘦尓吉跡云物曽武奈伎取食　夏ー弓
[徒猿装]夏やせと弓ひのあちのむとつ如真
の糸　[枝折萩]夏引の糸とは麻、むつそ弓前、　神馬藻
夏引の白糸は、夏蚕の糸なり、云く
[下学集]神功皇后異国と攻とき、船中馬秣ー海中の
藻と取て馬と飼、故に神馬草と名く、神馬藻とおのうそ
とは、神馬に八のうとーあるまこの義、[こくせも]濱藻、是ぶ名
ラあり、名乗菜とと、ときは夏ぶ、ダハラとと、ときは正月の飾物
おく、春勿論、○今按濱藻とおのうそとと、ここのとと、
日本紀允恭天皇の紀、[童子集]ちはやぶるーの
宮の神のこよゆめおのりそよおりの　[和漢三才図会]菜瓜
もぞもる是莫鳴菜とよめるし　本草に菜瓜
といふものは越瓜、菜瓜、越瓜に似く小く、背に微毛あり、
六七月瓜と結ぶ、胡瓜に似て皮厚く、深青色、縦に白文あ、

肉ハ越瓜ヲ煮て、煮食ふ。糟及び糠ふ蔵む、硬く脆く美し、上品ヲ、一種、菜瓜ヲ似て小く、鶯の卵の如きことのあり、小瓜と名づく、糟ヲつけて食ふ。

奈良漬製す

同上 糟漬の法六月上用の中ヲ越瓜の香ヲ物と採て、ことを破り、蛤貝と以て瓢子と刮去り、舟艦の形ヲし、灰と盛ることを一時バかりヲく、水湿と去り、灰と拭ひ去り、塩と盛り、凡十二斤酒糟三十斤と用て、瓜と色ヲ蔵む、各招碑にめず、固く封ず、大低七十五日ヲく成ル。

納豆造る

同上 納豆数種あり、大低鹹豉の法より生ズ、以て酒肴ヲ、僧家ことを重んず、

夏切茶

犯事 六月の始宇治の茶人新茶と新壺ヲ盛く常ニ茶と賣ところの良賤の家ヲ贈ル、是と夏切壺と云、凡壺の蓋紙糊ヲ堅くて、壺の内ヘ入しめず、茶用ることあるとき、小刀と以て、壺の蓋合縫の糊紙と截し、茶と生ずることを壺の口と切と云、冬ロと冠くの壺、盛夏の間處ヲの山林清涼の地ヲおく故ニ、夏中用る所の茶、先て是と贈る故ニ、是

と夏切

夏ぶし

千枚ぶくせと誤ル、鯉の生節ヲ、雑餐と云、

詩抄ニ髮沸瘡ヲ、暑中、茨ヲ小児の頭瘡ヲ、江戸の俗訛て夏ぶしと云

夏深し、夏の別、夏の後

夏の限、夏過て、夏と追、夏の果、

義ヲ、

ら 五月

蘭湯ヲ浴す 大戴礼 五月蓄蘭為沐浴

詞 浴蘭湯分沐芳草 本草 蘭ハ乃沢蘭の香草ヲ今の勾蘭花ヲ、

む 四月

向日明神祭

神社啓蒙 向日の神社ハ山城国乙訓郡、西ノ辺ニ在、名勝志 当社の額、正伝向日大明神ヲ竪ニ二行ヲ書ス、道風の筆ヲ、西四の民家の側ニ祠表あり、羅州府志 説曰ヲ向ふとの八月ヲ、ちなことハ月読命ヲ祭ることの、或ハ日向大明神ヲ、本朝人皇の祖神、神武天皇ヲ、ひなの日孫ヲ、とも云ず、○当社祭礼の以前、社人先ヲ岩倉山三重院ヘ行て垢離ヲ、又祭日必神馬と此滝ヲ引く、是出現の地ヲ、ことハ西岩倉金剛寺縁起ヲ、

結葉 金葉集 応徳元年四月、三条内裏おく、庭樹結葉と
いふことをよませ給ふ、院御製、切ゐつゝ
ゐる者葉ゝ多くゆまに八松のみとりもとゝ
○諸木の葉と葉と相交り結ぶ事をいふ、

麥秋

礼月令 孟夏月麥秋至、註、秋八百穀成熟の期、此時
於て八夏と雖ども、麥ゆゑに八秋と、故に麥秋と云、 蔡邕月令章
句 穀、其初生を以て春とし、熟すを麥の秋風 夫木 御園
秋とす、故に孟夏を以て麥秋とす、
生ゆる麥の秋風そよめくなり、 後拾
山時鳥去のびやくく、

麥苅 和漢三才画会 大小麥ともに、九十月種と
下し、皆四月黄熟す、其刈ること、春分百二十日に至ると旬とす、
故に諺に云、麥八百日の中に蒔べし、三日の中に苅べしと、但し小麥
八苅取るとき、大麥より遲くすること十日むかう、麥八五穀の貴と
す、○二年草、年越草、とも云、麥の異名、麥八年と隔て種る
故に名づくるか、

麥藁笛 同上 小麥稍厚く硬し、小児用て笛と作りて吹くこと麥藁笛と
云、 夫木 うゐあとがすがるびるゐ麥笛の
声ゆゑとゝく夏の日ぐらし、 西行

五月

六日菖蒲 京師屋檐に菖蒲と取て、六日に菖蒲湯と
なす、是五日の夜の露と受る物と用る、彼金門記に云る
神水の説 室明神祭 十三日○摂州室の津に大社あり祭る
神上賀茂に同じ、例祭九月
十三日、是か先咨の上賀茂の氏人両人播州に下向して神事を司
る、其次第、先辰刻装束束帯す、己の刻の鐘を撞て神主以
下出仕す、即拝殿の座につく、御鑰を祝部に授る、社家これを役す、
次神主祝の氏人賀茂御戸を開く、氏子素襖烏帽子にて唐戸
の裏、神前の左右につく、次に神饌神酒を供ず、此間事長神子神示
奏し、次に室津の巫女掉の哥を奏、次に神主祝祝詞を申す、是
より巫、貴船、太田、若宮、社の御饌を献拝す、神主祝内
陣に入て御饌を撤す、内陣の御幣榊を生ず、祝御を用ゐ、
神幸、先神船着岸の後、神主祝頓宮の拝殿の座につく、両社人
御幣榊を捧て、大床に俟ず、次に渡御、遊女十二人、三日潔斎
て、神事に出、内五人八男子の姿にして、髪を剃り、男髷にして金
襴の社禄を着、笛二人、鼓二人、大鼓一人、残り七人、髪残一人、天
冠を戴きて、萠黄の水干を着し、七人
とゝふ幣を採る、是掉哥の役なり、

六月

虫干、

蚤拂 土用干 此月土用中、諸神社諸仏寺、夏室の虫拂とす、和俗六月土用中、天日の晴るゝ候〻衣服・書画の類を曝すこと曝す、是と涼と取るなり、衣服の蚤虫を執棄つるなり、こゝ土用干と云ふ、こゝ書画衣服の蚤虫

う

四月

卯花衣

桃花御說 表白裡青、柳に同じ。

○四月こゝ卯と著す、こゝ

梅宮祭 上ノ申

神社啓蒙 梅の宮八山城国葛野郡、王城とこゝ二里ばかりあり、祭る神四座、相殿の神四座、酒解の神大若子の神、小若子の神、酒解子の神、○此祭今絶えたり、土人こゝ祭るのみ、祭の式江次第にあり、橘氏の祖廟なり、世俗妊娠の婦女、當社の砂を取りて、帶標に佩ると云、是檀林白玉、嘉智子の遺風なり、

和漢三才画会 按に楊櫨穀種あり、山空木

卯花

筥根卯木、唐空木、三葉卯木、こゝ小山中に多し、人籬根に植るこの八山空木、こゝ中空なる故に空虚木と名く、高サ丈ばかり、皮白く、肌澤青、空中にして其葉円く長く、四月小白花を開く、筷ごとなれども愛すべし、俗に卯花こなきと、○十姉妹、筥根空木と訓む、花葉に八十姉妹似て同じ、こゝ京畿に多し、是も卯花と云へり、○岩本空木、岩の傍に咲くとなり、千載集俳諧哥、この花よりでこゝにかけ島のあまもさそはれ岩とこゝろ、○異名、こゝ草、垣見草、雪見草、頭の假子の部に

卯花くたし

八雲御抄 この花、たゝ四五月の雨に

万葉三、春さりて卯花くたし、こゝ

茨花

和漢三才画会 金櫻子、山林の間に叢生、大小蕾蘂に数〻、刺あり、四月白花を開く、夏秋実を結ぶ、黄赤色、こゝ小きを拓猫

夏枯草

時珍曰、原野に多し、苗小似く長し、微方に葉節に對して生ず、細莖あり、背白く莖の端に穗と作す、長一二寸、穗の中に淡紫の小花を開く、二四月花を実と結ぶ、亦穗と作す、五月便ち枯、和漢三才画会 夏枯草、穗の形矢筒の數のごとし、故に俗宇豆保草と云、和名宇流木是なり、

鸚実

和名抄 鸚 和名阿宇之加比須乃実 倭名類聚抄、今案所出未詳

大和本草

吉利子樹 和名宇久比寸とも山野に山林に小木なり、葉は山躑躅に似る

西と相對ス臘月と諸木みな芽ぐみて生ず二月ハ小花さく四月ハ実熟す西く相對すきく葉の茎より内わき葉の茎の本より実の蕚生ず異物く鶯の始て鳴ときこふ此花さく故名もゝよやゝ京歳おく紅の木ふこの実の形紅のごとく上ハ窪こおろし百菓の先ばけく童子鳥秋ハ紅葉〳〵く落ツ立花の下草おもるく

灌頂口傳 この鳥冬ハ深山の木のうつろふ住かゝらの毛こふ落く小童の髪のごゝ〳〵

五雜組 大明以前摺扇ハ〳〵多く團扇と用ふ

和漢三才図会 方扇 俗云庫宇知波 翳ハ似く物と打〳〵故ハ宇知波と称

和漢文操 文孝著 團贊の序ハ〳〵と和訓ハ〳〵ハ故ハ〳〵〳〵〳〵ハ〳〵〳〵ハ俳諧の書ハ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〳〳

社八、山城国宇治郡宇治の里にあり、祭る所三座、宇治旧記演千

鳥 應神天皇、菟道稚郎子、仁徳天皇、當社八宇治の北にあり

て、関白頼通公、平等院建立の時、離宮と南に移し、平等院

に向ひしめ、此寺の鎮守とす、神社啓蒙 離宮八祭る所の神

一座、藤原忠文、按に忠文八宇治氏にて号す、母八息長氏の女

なり、天慶三年、秀郷貞盛に、将門誅伐の功を以、恩賞を賜八る

るの日、小野宮左府忠文を以て賞列に入ず、故に忠文ふかく小野宮左

府を恨み、遂に宇治川に没し、其霊志ゝ祟をなして、百姓と

驚く、是を以て祭て宇治の離宮と号す、○西説互に異なり、この神

事、そのもとめ頼通公に勅して、天下太平の御祈として、五月八日未の

刻か九日巳の刻に至りて、こゝを平等院にて修す、太平の御神

事にこゝを吉月梅、昔の両種を以て神饌に備ふ、雍州府志 祭の日、

金銀の幣を奉る、供奉の人、金銀の幣あるを誤りて、こゝにふ

こゝに誤ふべし、さらに年浪草にもこれを誤て春の部に載

せたれども、注八其所にあらず、

鶯の巣

先板の諸抄に夏季とす、

鶯音と入

月令 反舌毎声、藏器本艸拾遺 百舌、一名反舌、

今の鶯なり、○礼記疏 反舌と蝦蟇とハ、ホダ是非とし、

羅

細布にあらざるめの細きを布、越後縮のごとし、

○すべて薄織の絹布をふるんと得べし、

浮の巣

花 呉晋本草 水萍、一名廉、葉円く小くして、一豆一葉、根水

底に入て、五月白花あり、○九荇浮の類、其花水面に発、

或白或八黄、

瓜の花 花黄に胡瓜越瓜の類、すべて

五六月盛し、

梅

清る、梅干、梅剥 梅剥八皮肉ともに剥掛晒乾

し、梅酸とするなり、

浮巣 み部、水鳥の

巣の条に注ス、

蠸 余雅注 蠸、一名宇瓜、喜て

宇瓜宇利波用 ○和名抄 瓜の葉と喰ふとのべ、和名抄

蛍に似て、黄色ある虫なり、

うつ蟬 其形せ部、蟬の

条に出ス、

鶯の附子 貞享式 此式八例の當用に、今按ふに、鶯の子を

春巣立て、夏飼八、六月の間に毛に替て、冬至の

ころ、鳴習ふゆゑに、鶯の子に鳴の字と結びて、冬季とハ

あるべきもの也、夏八用習ふべし、或八引鳥の親に附、或八笛と

以て引音を教、稚音に、夏の用あるべ、附子八

夏とのひ笛と結びて、夏とのべ、

六月打水

ものゝ〜わび　其角

残花

貞享式　此詞ハ古今の論あり、忘れぬ残の字も其季とり此季にあらず、残ハ残るとつゞる道理あり、花ハ春の末〜に、残る夏と定むべしとも

兼三夏物

蚕

和漢三才図会　赤色肥さる紫小き

音、六足ありて能跳る、夏日人家の湿熱の気より生ず

むべ〜牝牡あり、○さゝ蛾の夢ものゝ蚕の痕　其角

五月

六月

凌霄花

時珍曰、紫葳一名凌霄、俗に赤艶ふ

の条に出ス

幟

部に部ふ

侯出す

四月

く

四月

久世祭

中巳俱し巳○山城国乙訓郡久世の神社、上久我の

ニツしハ初巳

花

の部ふ

係七出す

民屋二町ばかりあり、菱妻明神と号、三代実録　貞観八年八月十四日丙戌、山城国正六位上奥我万代継神授従五位下、

関白賀茂詣

中ノ申

公事根源　初度ニハ日次とえ〜ミく此事あり、円融院天禄二年九月廿六日、摂政右大臣謙徳公かも詣のことあり、是摂関の人の賀茂詣のもゝめあるべきふ、此事ハ必ず賀茂祭のまへの日なるべし、主人ハ乗車あり、地下殿上の前駈あり、白妙の御幣神室の唐櫃やうの物とりぐしてもてゝむ、琴持菅笠深沓とゝ

とのとめ〜ぐす、上達部軒とつゞぬ、社頭あり〜神拝あり、葵挂と称宜をもてまゐらしバ、冠あり、東遊、求子、駿河舞あり、○菅笠、擔、賀茂詣行列の中に、

國祭

山城国賀茂の祭え

大きある菅笠を擔ひく渡るとゝ、

公事根源　三十代欽明天皇の御宇、四月ハ吉日とえ〜びてはつらつ〜呼見あり、又和銅ハ詔あり、国司ことを換察ス、とゝえとりかゝの国祭ハ賀茂の本祭あるべきふや、酉の日の祭ハ公家より使を立らるゝ、走馬と献ぜらるゝ相撲あるべきふや、

八楚　賀茂太神ハ山城国の地主神ハくりゝゝ毛ハ中の申の日国々奉る祭ゝ中の酉の日内裡ふの祭ゝ昔物ぐるふ多く書

岷江

くるハ中の酉の日也、灌佛 ふ部仏生会の条に出ル

草茂る 元帝纂要夏草と茂草と云、

字彙 茂ハ艸の豊盛の貌、

草の王 大和本草 蓂ハ菊ふ似て大なり、一葉ごとふ五つふ分れ其分れる内に岐あり、四月花とひらく、俗に草の王と云、○花もなし

乳柑の花 和漢三才画会 蓂橙ふ似て長く、

橙ふ似て、 新撰万葉 郭公鳴立春之山辺庭沓直不輸人

哉住濫○うつてどりハ時鳥の異名、此鳥前生沓と作て賣ら百舌鳥ことと買て、價をむらハず、故に百舌鳥ハ此鳥の来るときハ木の下竹の中にかくれさて見えぬとも、是吉き諺あり、

勸農鳥 杜鵑の一名

あり、此鳥農業と催さんため、四五月に来り田とつくるぞと鳴と云、故ふ名

俱伎羅 契沖の説に云、○さくらの花ふ付てくる声なり、時珍曰、按に王安石字説に云、一面の倜と設け物觸る後鳴くを遍昭

蜘の子 時珍曰、蜘蛛とハ、壁錢蛛蟢蠨蛸絡新婦の數品ありて皆初夏ふ子を生ス恰も罌粟子の如し

藥塩草 蜘の子ハ生まれ出て風ふ乗てちらくふ

新撰六帖 おもひ世ふうまれこの八ちくも蜘の子のちらぬ、衣笠内大臣、

五月

藥王

五月の王、天曆御記

延喜十三年五月十日丙午糸所より藥王と供奉ることの如し、去年の九月の菜萸と撒して藥王と以て懸賞御

常の如し、去年の九月の菜萸と撒して藥王と以て懸賞御

柱の前ふ著る例あり、枕草紙 五月五日ハ、縫殿より御

藥王とて、いろくの糸と組さけてまわらもれば御几帳奉

るとき柱の左右ふ付くり云ふ、世諺問答 諸病ふ五月ふ

おこる故ふ、藥王と五色の糸とて調へ、ひとふ一日

ハ悪氣とらふ、中本文侍るあり、雲州消息 今朝或処

より藥王一流を給ふ、作ふ百草の花を以て、貫く小五

色の縷と以て、草虫の形と摸して其花房ふ洒む芳艶

の美興あり感あり、古人の云、續命縷と懸る持ハ命と益

云、ちの部長命縷の

藥草摘 藥狩 世諺問答

茶かよ、し見るぐ、

藥日 競馳 五月五日

と藥日といひて、おの日一切の藥草ととるあり、荆楚記に是日雜藥と競い採夏の小正に云、藥と萱て以て毒氣を正除ス、

宗祇抄 きそひぐりすると、くさ

萱草花

忘草 時珍曰、萱草護

四五月ふ藥狩ととる也

に作る、護ハ忘あり、詩ふ憂思不能自遣故欲樹此草玩味以忘憂也、呉人ことを療愁といふ其葉蒲蒜の輩の如ふ柔弱あり、新舊相代て四時青翠あり、五月莖を抽んて花をひらく六出四垂朝ふ開暮ふ萎む、秋深ふ至てすなはち盡く其花紅黄紫の三色あり、李九華が延壽書ニ云、嫩苗を蔬として食へバ風を動し人をして昏然と醉るがごとくあらしむ因て忘憂と名く、此も又一説あり、

清輔奥義抄 忘草 萱草といまあり、兼名苑ふハ忘憂艸とうけたり、

大和本草 諸説を引て本邦の萱草にあらず、然ともに五月莖を抽んで六出四垂とことるハ、花の形相似たるものあり、一種朝鮮萱草あり、葉冬も枯ず、其花紅黄色あり、時珍の説ふ似たり、

雲見草

梗の異名○吉野山遠き軒端ふうる雲見草、

雨しハしらくもそらぞらしらんある、

栗の花

獲須圖經 栗の木高さ二三

文、葉極めて樂ふ類ず、四月花を開く、青黄色條長ふして、胡桃の花ふ似たり、

山梔子の花

時珍曰、梔ハ酒器あり、巵子あるふ象る故ふ名く、俗ふ梔ふ作る、佛書に其花を稱して薝蔔といふ、葉ふの耳の如く厚くして深緑也、春栄秋萃ふ、

車

夏ふ入て花を開く、酒盃の如し、白き瓣黄の蕊、

百合

和漢三才圖會 葉畧濶く對生して車輪の如し、故ふ車百合といふ、其花瓣卷轉横ふ垂る、下野ず花山、和州大峯の

黒百合

同上 花ふ黒色のもの絶て少し、惟紺色愛すべし、本製州ず出産多、其色あり、

桑實

同上 桑ハ蠶と養いの地多くこれを栽植ふ、桑の実ハ初青く白く漸く赤色黒く熟し味ひ甜く、

水雞

同上 竜鳥和名久比奈、花るに大さ其木堅實ふして黄白の色、鳩の如くふして頭背翅皆蒼黒の斑あり、淡黄赤色と帶眼の上ふ白き條あり、觜蒼くして長く、頷頸の間白くして黒白の斑あり、尾短く脚長く淡黄あり、夜鳴て且ふ連声人の戸を敲くが如し、蓋水辺ニ在り晨と告ふ故ふ水雞と

名く、[本草]多く田沢の畔ふ居る黒鴨 仙覺万葉抄黒鴨 一名ゐるといふなり、夏毛の後ふ夜鳴て秋後即やむ

鴨のたぐひあり田舍のくハ黒鴨といふ [和漢三才図會]輕鴨全躰黑色頸の後ふ青色と帶光あり眼の上ふ淡白の條あり、背黑くして喙端淡赤く白色ゆゑて黑くゆへ白綬の紋一條あり、脚掌とゆふ赤し、

六月

六月廿日今日鞍馬竹切也夜ふ入て護法の儀あり人云ゝ今ふ至て今月今日ゝ也と修ふ [紀事]紀拳延鞍馬寺の主ゝ夏五月護ゝと修ふ日中大蛇北の拳ゝ来る拳延毘沙門の咒を誦ゝ蛇おのづゝ斬て殿ゝ上ふ落る此事の本願ゝ藤原の伊勢人禁闕ふ奏して役夫五十人を發しゝ蛇と鬚ふ山ふ棄俗其地と呼んで大虫の拳といふ今ふ至て毎年六月廿日村民薬師堂ふあつまり大竹と縛て立て又別ふ竹二本と堂の中間に縛て横ゝ法師廿人餘白き袴と着し山刀と佩て走上ふ出て一本の竹と近江と称し一本の竹と丹波と称し法師各十人左右ゆゝと同時ふ声と揚奔走して山刀と以てこゝ〻〻〻

火雲峯〜陶潛詩 夏雲多奇峯 夫木 六月ふるりめくこ
えて大そらふあやーーこ峯の雲のいろ〻 衣笠内大臣、

薰衣香 の余こるべし **葛水** 天和本草 葛の粉、夏月
冷水に入るこたてく飲む、

ゆ〻渴を解胃を
傷らず功尤多し、 **葛の花** 蘇頌曰葛ハ春苗を生し
藤を引蔓二三丈 和漢三才

圖會 花豆の花ハ似て大きく、 **海月取** 崔禹錫食經 海
實もまこ黄色豆の莢の如し、 月一名水母貌ち
月の海中ハ在ル似くり故ハ名くこ 滑稽雜談 泥海ハ
生ル故ハ備前筑前ハより多く此月取て擬の菜と多く
割て海月の肉と色み、塩と用 **霍亂** 傷寒論集成正
ひぢ只葉と以て淹藏もる也、 吟云夫霍亂の病
ハ夏月暑時、飲食過度の致を所、胃中擾乱上吐し下
瀉もる者是也、霍と臛と古字通用、説文云臛ハ肉羹
也、大氏人の食の為ハ傷るゝ所肉食居多故ニ特臛を
舉て一應食物と統る也、凡人其嗜欲もる所皆これと
乱といふ、○青藍云、俳諧歳時記ハ先板の諸抄香需叢書
乱ハと六月の季に出もといへども、あてて風流ハ益ゝ

ま〻今ハ〻とのせ〻とといへ〻て愚按もるハ先板の諸抄て
ま〻と出せるハ皆附句去嫌ひの用ひんがあり、 炭俵集
附句息吹ハ人も霍乱の針、其角

四月 **山科祭** 上ノ已ノ社ハ 勸修
寺の南の境内、往還路傍ハ水の切ハあ〻て、祭ハ前般
醐帝の外祖、宮路氏夫婦の靈神ハ〻て、勸修寺家の祖
もり、寛平十年より祭ハ〻まり〻て官幣ありし〻今
絶て只神饌と供もるのみ、今土人宮路氏の社と八番
の社と合せて本居神とし、九月廿七日こまと祭る是と
勸修寺祭といふ、今の世ハ山科祭といふ、九山科諸羽明
神祭もり、九月九日祭礼もり、神体ハ大己貴大玉の二神ハ〻て本朝神翼の神也、 **八瀬祭** 上辰
○八王子天満宮両社の祭もり天満宮の宮ハ愛宕郡吏
脊の里ハあり、八王子の社ハ天満宮の巽二町ばかりの山腹
ハあり、傳いハ菅家少年の時比叡山法性坊の童ハ入〻
學文もその往来休息の處ハ後人社を建土人祭の日大
竹と切てその枝ハ五色の扇挑灯ハと鉤り退て雜しハ
ゆら持あるくもり、其唱哥俚語方言と以ハ興のて、

矢脊一村九百軒ごろ、父老或ハ上さる人をの〳〵ら〳〵又吾をさゝてげらとらハ、此俚語も亦他ふ出さるものゝ、

山崎日七使 三日

名勝志八幡宮寺中讃岐ふ云日の使、四月三日是、郷方代の勤役ふ、山崎より舞鶴と云、暁陰ふ及て日の使あり、相列て山崎の瓶村よりゝ来る、儀式京洛の大臣ふ同じく、主人冠う紫藤とうけ、舞男の巾子ふ挿む、彼ふ馬ふ駕ゆるゝ、二度神庭と廻つて、下馬せしめ、一面ふ御殿ふ相対し、再拝して衣の袖と刷ろふ、神事記日の使ハ八幡宮才一の神事也、治暦三年まで、猶勅使の義あり、同四年兵乱ふ及て退轉も亦行、貴尾屋閑戸の院勅裁と申下し、在地の神人これと勤むゝる間、交野の土民、御先の役さゝ弥宅きと号、白杖と捧て鳥羽木津より出る者、等頭馬長ゆゝ、神巫舞人、次第司、職人司先行も、色掌人笛と吹鼓と打、又細男と云、二ツの人形あり、ふも武内高良の神〳〵と、此祭も今絶さるふゆゑ、〇明月記ふ建仁二年四月三日、山崎の民家悉く、經営と毎年祭礼ありとその道ふ橋と渡て、播磨大路より八幡ふ参ると見えたゝ、往昔此祭ふ山崎より八幡の山下まて、大河ふ橋と渡もとゝ〳〵今の橋本其遺跡ゝり、此使と勤ると日の頭と称し、其人と日の長者と云、郷の上首とも、其裔と長者衆と云、

山嵜祭 八日

雍州府志山城

究めて豪富の輩なるべし、

国離宮八幡の旁ふあり、祭る所大山祇の命、延喜式山城国酒解の神社一座、注ニ云ふ山嵜の神と号、同書山城国と掃津国との境ふ疫神と祭ると云、此社ゝ、山州名跡志天神八王神の社、大山嵜、北の山ふゆゝし、祭る所素盞烏の命の郷子、八王子、今土人本居神ともゝ、〇俳諧歳時記今日此使ふ童使と云ふとあり、今弐ふ日の使の所ふ記ハ誤也、明月記ニ云建仁二年四月八日午刻、水無瀬殿ふ参上云、未の刻出御、この辺の辻祭二社、天王社酒解社御前と渡さるゝ、その中一ケ頗る田楽ふの供奉副ふ土民ふ此事と営む云ことをとりて思ふ、矢ふ、土人山嵜の神と、武塔天神牛頭天皇と合して祭るのれゝ、

數

洛東三十三間堂蓮華王院とゝいふ〳〵への得長寿院の辺、同所の池の中社若と観世と、凡此所の矢數毎年四五月永日のうち晴天と候ひてあすゝ、射人堂前ふ居て、今日の昏より翌日の暮ふ至て、通ま所の矢數他ふ超過に

ると天下一とす、

山茗荷花

[和漢三才圖會]賣子木今知佐の木といふ處々山中ふかくして高きも七二三丈徑一二尺皮粉青白色老るときハ淺褐色中心白く其葉梅嫌木の葉に似たり長く尖りて二寸ばかり面青く背淡し冬凋て春生も三四月花をひらく碎ばして小く白く單瓣なり野梅の花ふ似たり絮稍長く垂る大絮と作さず但し毎二三攢生のし實と結ふ狀小連子の如し初め青く後黑し堅くして肉白色[滑稽雜談]此葉菜類の苦ふ似れバ名くといふ云云[新撰六帖]我こゝく人ものまと

藪椿

[藻經]

ちふおもふ〳〵白雲ふかき山ちさのこゝ

女貞山海經云泰山ふ貞木多しといふ是なり其葉拘骨及冬青ふ似て冬を凌きて凋まず五月細花を開く青白色九月實ふる[倭名抄]女貞和名太豆乃木又地方都波木[和漢三才畜会]女貞木の葉海石榴ふ似て鋸齒ふし故ふ姫海石榴と名くとゝ俗ふ是を藪椿といふ然るふ野椿の藪ふ咲ゆゑまて初夏の頃花あるふれといまゝんといふ[ものくさせり]の說ハ

兼三夏物

魚簗

魚簗とゞりゝと夏ふ上り簗と春とゝ下り簗と秋とゝ

さるをゝ連句ふて其季ふ連る時ハ上下の斷りふ及ぶ三季ふ用ふと貞享式ふいへり、

五月

山田の御田扇

廿八日、是ハ伊勢山田太神宮の御田植なり、今式太神宮の宝前ふて神事修行の扇あり是を御田扇といふ是を以て田を扇ぐ凡情をまて虫を生ずる患なりといふ産婦も又この扇を求て相向ふ所の柱ふくまゝ極て産安しとゝ是虫の障ふさはるべし○廿八日といへゝ日定らぬ下旬ふ日をえらゝて是を行ふ當日祢宜數輩御子羅子れを勤む神田ハ高倉山とゝ俗ふ天の岩戸といふ所の東の麓豊宮寄ふあり件の人々此所ふ至り御子羅子早苗を植るまねびをなゝ神人後を修ゝ太神宮の一の鳥居ふて神楽唄をうゝひ苗太鼓ふて舞ふ長官ハ乘輿祢宜ハ騎馬御子羅子ハ雍樹ふて高倉山をゝきて鳥居の所ふ至る素袍を着る者長さ六尺ばかりの大扇を捧て黍詣の諸人ふ戴かしむ又一說ふ尼山といふ所の土人六人女の形をかゝ伊達深の帷子を着赤き襷をかけ烏帽子をいゝぐき黑塗の棒をかゝ廻し扇ふてあゝぎまふ内宮外宮

とゆふ同じ人もとども山田の名世ふ高し、其扇と撲して泰
詣の諸人ふ與ふ内官八七本骨外官八六本骨あり、縮と負こ
る馬の画、鯛と鉤る人形の画或八鶴亀ホと画き
あるものあり、是と長官宅ホて其日の朝奏るい、**藥草**
摘くの部藥日 **大和撫子** なの部撫子 **楊梅** 時珍
の条ふ出、 の条ふ註、
曰楊梅その形楊子の如くやて味もひ梅ふ似さり、故ふ
名く實と結ふ楷の實の如し、五月熟もて紅白紫あつ、紅
ハ白に勝もり、紫ハ紅ふ勝る、**魚藻打** 石と堰木と障
顆大ホ〻〻く核細うあつて、魚の徙藻と
通るかのこと上り
藻の条ふ委し、

ま 四月

松尾祭 上ノ酉 神社啓蒙

松尾の社ハ山城の国葛野郡ふあり、王都西南と去ること三里
余、祭る所の神大山咋神、廿二社註式 市杵島姫也云〻 公
事根源 乱世以来上ノ酉ノ日ニ、祭式江次第ふ出さり、此
祭日吉の神事の如く葵ゆづりを用、仁明帝美和四年
始て祭るとりく、紀事 神輿七基、其内一社、毎年白木と
以て新造もこてもと武御輿といふ、祭日神幸畢て後桂川

の東ふ捨置日児童再び此神輿と舁もりして後これと
砕き破りその木片と取て厠ふ挿ば、これ疫ともらあの咒
ありとりく、武御輿民間ふ子ボしし宮ふ称えいふてろハ
今日再ひ遊行を猶祈ほりてるり如し、神輿七基八月
讃の社、櫟谷の社、三の宮ハ宗像の社、
夜手の社、四大神御旅所ハ七条朱雀西在、 **當宗祭** 上ノ酉
○河内国志紀郡當宗の社ハ仁和四年四月始て勧請し
公事根源 午の日使ふ川杜ホ當宗ハ程近き故ふ、この
使両社の祭のくめふ下向ず、宇多御門の御外祖ふ〻當
宗氏あるふよりて仁和五年四月十四日祭りとこゝめ行ふる
姓氏録 當宗忌ずハ後漢の獻帝 **松前渡** 南部津軽ふの
ゆ出西世の孫、山陽公の後あり、
商人産物交易の為ふ、蝦夷松前へ渡るとゆ北海九各
春の間ハ寒気強く波濤穏ゆふ故ふ四月ものめて
出岸し九月と限つて歸国ず、 **天蓼** 和漢三才図会
依てわさりと夏とし上るとゆ云、 藤天蓼、蓼ふ
山中ふ居つて今人家ふてこまと植其蔓蒼黒く柘及び
櫻桃の果ふ似て皺あり三四月ふ白花と開く狀梅花ふ

似て小し實と結ふ但し雄あり人その蘂を取り
蘂を醤ふ合和てうまと食ふ猫常ふ喜びく食ふ

祭 ふの部神祭の所ふ註を

五月 **松本祭** 朔日 淡海志 江州大津

松本村ふ神社あり祭所の神平野大明神也人皇三十七代
仁德天皇の朝あり難波の平野と移し奉るとき本宮
ハ往昔六七丁南の山祇谷ふあることの人慶長中今
の所ふ移る神輿一基あり今の傍ふ精大明神と並祭る

豉 豆豉 ちくせし 鬮く扁き黑き虫豆ゑとあり水上ふ
浮流して止まらも筑紫ふてカイモチカキ江東の
俗ふてイリとりハ拔ふふ是猪熊まえしの訛言ふ人
脊紋黑く腹ハ淺赤し関東ふて水スマシ又サウトメと
ふ是ふ然るふ得て水をましハ水馬と思ふ革多
去ら它合ふ水馬の題ふく藻の花と休ふ貯や水をはし
ともさるあり是

菰苅 蘇頌 水中ふ生ず巢蒲葦の
件の取ちひ人ふ
春の末白茅ふ生ず嶺の如し即菰菜也八月花と
開く葦の如し子と結ふ粟ふ合して蒸と食ふ

菽

植 廣韻 天豆ハ菽ふ小豆ハ荅ふ 和漢三才畫会 天豆大低
夏至の十日以前種と下ふ遂ふ夏至の鳥啣ふ
既ふ生出る形鳥脚の如くメれバく七月花
とひらき九月莢を結び下月ふまと収し

六月 **蠓** 和漢三才畫会 蠓蒙 名 醯雞 列子ふ朽葉の上ふ生ず
因て生じ陽と覩て死も甫雅注ふ飛て磑ひくこと
風ふく春つゝとき八西ふるひくこそろハ凡吹んとするとき
ハ旋て飛て磑ひくゞ如し一ツハ上り一ツハ下て春つくゞ如
きとき八西ふるゑゝ形蠅ふ似て小く翅身皆灰色背窄其大さ二分ふ過ず

甜瓜 時珍曰甜瓜の木諸
瓜ふより甜し故ふ拶り甘甜の称と得くゝ○上積曰一
三月種と下し五六月花ひらき六七月瓜熟す○美濃國本
巢郡真桑村ふ甜瓜の産
巢ふ故ふ真桑瓜と名く

花 時珍曰一名象穀一名米囊一名御米其實の形器の
如し其米粟の如し乃ち穀ふ象て供御ふ奉べし故
ふ諸名あり秋種冬生苗蔬ふして食ふ嘉佳ふ粟
白皆の如く三四月薹を抽て青苞と結ぶ花ひらくときハ

四月 **罌粟の**

苞脱もて苞四瓣大さ佛蓋の如し瓣〻花中ゆゝ鬚蕊
ゝもと畏花開て三日即ち謝て罌粟の頭ゆゝ三〻こ
三寸大さ馬鞍鈴の如し上ゆ蓋あり下に蕚あつ宛然こ
〻て酒罌の如し中ゆ白米ゆゝこ極めて細し其花愛能當
ゆあらず白き有紅の者粉紅の者杏黄の者半紅の者
白の者故ゆ麗春と云ひ賽牡丹といふ又錦被花といふ

蕙 白及 和漢三才画会 蕙蘭 紫蕙 黄蕙 紫蕙 即紫蘭

葉と生ず秋蘭ゆ似て濶く薄し色淡三月ゆし
て縱理あり三四月莖の端ゆ白花とひらく香ゆし
二種あり云〻按ずるゆ和俗蕙と称るものゝ白及の類ゆて
葉大ゆあり山中ゆ生るものゝ白花黄花あり又盆ゆ植て愛
もるものゆ黄蕙星蕙あり此根麥の如く稜あり蜀本艸に白
白及の属ゆや白及三四月一莖を抽出て紫花を開く姿凋
む根菱ゆ似て三角あり白色角頭ゆ芽を生ず云〻和俗ゆ
紫蘭と称るもの根菱ゆ似ずゝるもの
ゆ黄蕙星蕙ハ蜀本草の説の如し

夏籠 夏行 安居

佛者四月十六日より七月十六日ゆ至て九旬の間禁足安居

兼三夏物

既ゆ夏と結夏といひ既ゆ終ると解夏といふ七月十
六日より十月十六日ゆ至ること自恣といふ 秋氏西覽 南山抄
云偏ゆ夏月約束にもるゝゆ無事遊行ハ出世の業
と修もると妨ぐゝゆ二ゆハ物の命と損ものを慈ゆ違ること實
ゆ深し三ゆハ所為既ゆ非故ゆ世の謗を招ぐゝ 五雜組
四月十五日より天下の僧尼禪刹ゆ就て格律もこと結
夏といふ又こと結制といふ蓋し長夏の長ゆ方て外ゆ
出て恐らくハ草木虫蟻を傷らん故ゆ九十日安居禁
足あり七月十五日ゆ至て始て盡く散し去ること解夏と
いふ西域記ゆ十六日ゆ作と見ること結夏十六日と以て始
もるハ印度の法なり中国ハ八月の晦と以て一月〻手天竺
ハ八月の滿ると以て一月〻もも則中国の十六日乃ち印度の
朔日也 安居 秋氏要覽 南山抄 五形心静摂

夏節

と安居といひ要期ゆ任ずると居といふ云〻

夏書 夏經 夏花

夏行ハ安居也安居ハ出家
故ゆ安居の間他の化益と專らゆ動て三界萬靈ゆ回向
修行の暇と得て私ゆ住ること
等もる云〻夏九旬と八十日と旬〻九十日ゆるゆ九旬

といふ在家と志ある輩は夏と修し九旬の間飲酒魚肉を断つことと夏断といふ經文と讀誦すると夏經といふ、こゝもとと書写すると夏書といふ先祖の聖霊有縁無縁の菩提の為ふする也云云

五月

削

懸の甲

蔓纏輪 けづりとうけは柳と以てこれと作る元日祇園の削掛と標格とす甲のかたちとも是邪気を祓ふ神咒なりとぞ

競渡

息車 水馬

云云の部飾甲の条と見合まへし

月令廣義 楚傳曰競渡は越王勾踐ふ起る歳時記五月五日の競渡は屈原を極まんとすると以也後世遠ふ戲とぞ

荆楚歳時記 屈原この日と以て汨羅ふ死え人舟と以てこれと極へ今の競渡はこれと其遺俗也南方競渡のこの其舟と合めて輕利ふらしむるなと飛鳧といふ水車水馬といふ州將父老士人悉く水ふ臨てこれと見る蓋越人舟と以て車とし撇と以て馬とす故ふ鳧車水馬の名あり、和漢三才圖会 唐人来て長嵩ふ寓居して此日ふ逢ときに數艘の小舟ふ乗旗幟と立て先と爭ふ排龍々々と喚きいへい速ふるものと以て勝とす是競渡なり蓋屈原の為ふ

龍と逐へ

梟羹 梟炙

漢史五月五日梟の羹の意ふ、と作へ百官ふ賜ふ其悪鳥の故小五月五日これと食ふ古ふ梟の羹泉の炙と重ぜ蓋其族類を減せんと欲す

獣狩

部駆狩の条ふ出

六月

解斎御粥

江次第 六月十日後挑十一月中ノ卯後挑

公事根源 神今食の次のつゝとけさいの御ふ四まゐる御座の大床子ふて臺盤脚とをもて供ふ、あるきこゝろけふある和布の御汁とそへこゝ三口食て御箸とこゝ云云神今食ふて後齋のる八中こゝのこゝ名、

解斎の御ふもなどと供して

毛蟲

陳藏器曰色虫蘭ニ作る形蠶の如し交八神齋あるへゝこゝとあり、小雀蠶と名く好て果樹の上ふあり大小とも小蠶の如し身面背ふ五色の斑毛あり毒あるこゝくと刺螫ふんと欲るものゝ口中より白汁と吐凝聚て硬く正ふ雀の卵の如し其実蠶と以て繭とす中ふありて蛹と成も蛾の繭あるが如し夏月羽化して出て蛾とふる子と葉の間ふ放ス蠶子の如し、

削氷

枕草紙のこゝ

もけづりひの

ゆまつゝ小入ておさらしきかえまり小入さゝ
○水室の水とけづりぐきたるをいゝわらと

月佛生會 八日

谷佛灌佛 龍華会 花御堂
甘水 佛の産湯 五香水

○九諸寺院灌佛会と修ス諸品の花を以て小堂を飾る是を花御堂といゝ其内ハ小き釈迦の像を安置し甘草ホの香水を灌ぐ是を甘茶と云 事文類聚佛運統記 周の昭王二十四年甲寅四月八日中天竺国、淨飯王の妃摩耶氏太子悉達多を生ス云 浴佛功德經 清淨慧菩薩、佛ホ白して言く世尊若佛在世及ひ滅渡未来世の中諸の衆生云何う佛を浴せん、佛言く我法の為ホ浴佛の法を説ん諸の供養の中、最殊勝ようて衆の香湯を為り淨器の中ホ置き、先方壇を作りて、妙林座を敷き、上ホ佛を置き諸の香湯を以て次第ふるを浴し香水を用ひ畢て後淨水を以て其像を淋洗し人各洗像の水を少しづゝ取て自らの頭上ホ置く初像上ホ水を淋ぐの時ホ此偈を誦して云ゝ我今諸の如来を灌浴ス淨智功德莊嚴五濁の衆生垢を離るゝを願くハ如来の淨法身を證せん云云 ○龍

華会 弥勒下生成仏經 時ホ菩提樹あり名て龍華と云 慈氏 弥勒翻して大悲尊下ホおいて正覚と成ト云云是ハ慈氏とりゝ龍華樹といふ木の下少て弥勒始て正覚とゝゐゝ給ひ此處ホ三度説法の会あり是を龍華の三会といふなり、四月八日ハ釈迦降誕の日ゆゑ釈尊を浴し奉り、當来弥勒ホ逢奉る結縁とそれ、四月八日ともく小龍華会とゝ

深見草 牡丹の異名 和名抄 和名布加美艸

周茂叔愛蓮説 牡丹花富貴者也 書言故事 多く富貴の家彫欄丹檻の中ホあり故ホ花富貴ふる者といゝ、

不如歸

音不如歸と云ハ 崔禹錫食經 蕗葵ホ似て 格物論 啼き苦むとき樹ホ懸つて、謝豹思歸集 とゝ

蕗

兼三夏物

風爐茶

茶湯聚傳 四月朔日ハ更衣して、ころの茶を服し爐とゝ茶ぎけふより風爐と云、茶を煎る數奇屋の窓障子ゆゑ簾ふくよろ小涼しくなて

客とりて茶を出じて凡爐の茶、朝茶湯多し、遷ふハ
畫とかるとなり凡爐ハ奈良凡爐と多く用ふるなり

毛吹草 常の俗稲四月 **蚋** 和漢三才画会 蚋子 蚋蟆子
より九月まで用ふ 俗ふいふ布止夏月山谷中ふ
あり蚊ふ似て小く脚をまゝと黒色畫 **蚊子木蚊**
多く出て人と螫腫痛むこと最烈し

毋草、蚊母鳥 五雑組 嶺南の蚊子木あり葉
冬青の如し實枇杷の如し熟
ろときハ蚊いが塞北ふ蚊母草あり葉の中ふ血蟲ゆり
化して蚊とかるなり東ふ蚊母鳥あり蚊と吐て一二升云云

滑稽雑談 和俗蚊母鳥と呼て化鳥
とらふ今聞ふ都々都々と啼かのあり、 **海蘿干**
和漢三才画会 鹿角菜 和名豆乃赤太 本草ふ東南の海出 石厓
の間ふ三四寸鐵線の如く鹿角の狀の如し紫黄色又入采
て曝し貨海錯とし水を以て洗ひ醋ふ拌ませれハ脹起
して新しきかゝ如し凍極て滑りふ美也若久しく浸を
ときハ化して膠の狀の如し女人以て **五月息車**
髪と梳るふ粘あるを乱を化ふ云云

けの部競渡 **粉團を射** 天宝遺事 唐の宮中端午
の糸ふ出、 こふ粉團角黍と作りて
金盤中ふ釘を纖妙愛をべし乃チ小角弓と以て是と
射る、粉團ふあるものハ食ふとを得蓋粉團滑膩中し
て射がたし都中盛ふ此戯とるなり、歳時雑書端午ふ水
團と造る又白團と名く或ハ五色の人獸花果の狀と雑ハ
最精しきものハ滴粉團と名く或ハ麝
香を加ふ又乾團水ふ入ざる者あり、 **藤の森祭**
五日 神社啓蒙 山城の国 紀伊郡深草山の南ふあり祭る
所舎人親王○延喜式ふ載る所の真幡寸の神社
二座是之別雷神 祇毒神 後ふ三所の皇子と合せ祭る三所の皇
子とハ早良親王伊豫親王井上親王又祭る所三座舎人親
王早良親王伊豫親王紀事 是日神輿三基遊行社家輦
野井氏甲冑と着し馬ふ乗て供奉を帰路れのく稲
荷の社楼門の西並ニ藤の杜の馬場ふ於て走馬を祈願
ある所の人あるいハ是と又おのく甲冑と着し馬ふ乗
て馳駈をること前ふ同じ一説ふ藤の杜ハ早良親王故ふ
号矢神と称ふ今日供奉の人甲冑と着ることハ是蒙古

征伐早良親王歸陳の魂ひを供奉ふ事ふ始る、

富士垢離

紀事 五月七日より六月二日ふ至て、富士の行人毎日河辺ふ出て垢離とり、富士權現を遥拜ふ、是富士參詣ふおもむくとて、その間男女行人どもの病を祈福と索む行人そのもとむる処の紙符を願主ふさづく、又祈願の人どもづから行人ふ交つて垢離を修ス酒長と先達と称ス其会する処を富士小屋と称ス、

藤撫子

この部撫子の条ふ出、

六月

富士詣

紀事 六月朔日より廿日ふ至つて諸国の民人富士山ふ攀登る凡富士山ふ登る四道あり、駿遠豆甲是ふり山ふ登るもの其方角ふより、その便ふ隨ふその麓の領主多く人力の及ぶ所ハ坂路を修ち、四道の麓行人止宿の家あり、これを坊と称ス、山伏先達ハ、参詣の人ども〻を餐導して登山を明る午坊を出てその夜明るふ及で山上ふ至る凡行程八九里山腹三四の間大木森蔚くらくして上樹木なく畫ハ登ろふ堪ぬ故ふ半夜ふ入て登る土人坂路中間の岩巒ふ小屋を搆へ、ふるを篠小屋と称ス、風烈しく時ハ、ばらく此室ふ入屋主雪水を以て茶を煎じ、これを留ぐ、山上所々ふ灵地灵社あり、絶頂ふ池あり、周二里余世の中常ふ烟あり、ふるを塩硝硫黄の氣ありとも、あるを登るもこの池をめぐる若凡雨ふ逢ふ、ふまハ巡るとあるを攀跡と得ると富士山上といふ今略して山上といふ或を福定といハ後世菩提と祈ると以てもろ〻人その人と行人或ハ道者といふ、ども登る処の坂路の外別ふ沙石の道あり、帰るとき八この坂ふり下る行人脚ふ草鞋を繋て、ふ〻て穿ふくの如くせざるふ足のいたるを懲てふるして沙石ふ乗し下ると八九里の間二時ばかりを以て華ふ至る近世山の腰と巡る者あり、これを横行道と称ス、出山と称スその行程攀躋ふ比ると倍ふして且險阻難ふ、ふべ〻もこれと苦行とす、山上七月以後雪ふ雪あり、て登ることなし、故ふ諸方より来ることなし、六月を以て限とす、○一説ニ富士山八父皇七代孝霊天皇五年、淡海國の地折て湖底ふ、時ふ富士山出現し故ふ近江の國人富士と以て吾國の土とし、ごとふ、ふりて近江の人

垢離ふ及ハを他邦より来るの什も近江の上物ハ稱て、山上ふ登ると雖、近江の人ふ准じて平安と得るとの八、緣起延暦二十四年記、曰、我と浅間大神と号すること平城天皇大銅元年社と立て是と祭ふ本地大日如来、ハ神社啓蒙間の社ハ駿河國不盡郡ふあり、宮記

齋宮

權現と号ス大山祇女木花開耶姫ありハ

月令 季夏菌草為螢ハ蛍ハ湿の氣と得て成ふ故ふ色黄て草ふあり

舟遊 暑と避ん為ふ此遊びとふ已上き大坂の者、妓女及酒肉と携へ日午より舟と近曉ふ帰る言舞最盛あり、

風蘭 春雅類書一名桂蘭名花譜曰ふ叢て蘭ふ似さり、枝幹短うして動し砂土と用ひ竹の籤ふ取てこれと貯へ露ある処ふ懸て朝夕水と洒くこと此物山石の傍ふ生も取来て後擱の皮と以てこれと包ことまと掛て及び簷の下ふ掛へ凡と好て茂盛と故ふ風蘭と名く花葉蘭ふ似て較稍ふ垂る五六月花と開く微香あり、

振舞水 夏日市井の間ふ瓶とわきしてこれふ掛おく及ひ茶碗ふと添往還炎暑ふ苦しむ人ふこしてこれと飲しむ是と振舞水とりハ、

こゝ〳〵ゆゑと振舞水の一ト向道、異角

月更衣 公事根源 けふハ衣ぐるまぐ吉中所ふの装束掃部寮あらゝむ御殿のかゝひら表生絹ふ胡粉ふて繪とゝく、壁代ふ掛も御畳ふどもあらてきと敷ゝ御服ハ御直衣御ぞうしのゝもの御ひゝく御張袴内藏寮より奉る女房のきぬ袷のきぬとの衣ゝの むゝくゝら衣まゝしゝ裏ゝ上薦薄裳ふ上薦薄色常の如ゝ、

氷と供 延喜式 主水式云云九御氷と供ふるハ四月一日ふ起て九月三十日ふ盡ス氷と貢ぐ處々、同書云山城國葛野郡、摂津國の氷室愛宕郡小野の氷室栗栖野の氷室土坂の氷室堅木原の氷室、同郡石前の氷室大和國山の辺の郡都介の氷室河内國讃良郡贄良の氷室、近江國志賀郡部花の氷室丹波國桑田郡泊辺の氷室此十ヶ所ふあり云云

江州八幡祭 中卯 神社啓蒙 法華ヶ峯八幡宮八淡海国蒲生郡八幡村ふ此ゝ祭る所の神石清水ふ同じ 社記 一条院の御宇勧請

長徳二年放生会と行はる【寺誌】慶長年中関白秀次公、この法花ヶ峯に城郭と構ふる時上の宮を移し下の宮に合せ祭る、其後

御當家御陣所となる其時今の杉山に移さる別當願成就寺、往古聖徳太子開基の寺院、江州に四十八ヶ所あり其四十八の終りに此寺と建給ふ故に願成就寺の名付く神社の傍にあると普門院と云ふ成就寺兼帯なり、八坊舎五十五ヶ寺ありしが織田信長の兵火にかゝり悉く滅亡せり氏子は〳〵十三ヶ村外に新郷にて舟木上田林の二ヶ村と加ふ、例祭四月中の卯、夜宮に躍あり上の宮祭両日下の宮祭両日その中間一日と御旅祭と云ふ花表と擬門との間に於て九十三間の炬火と立高さ六七間ぐらい、七度半の使と合図に炬火に火と點じ、村々の祭太鼓も一三間の炬火と點じ三社の児三人と拝殿に座りもとの児どりもの太鼓にて拝殿の四方にて拍子躍あり、エイくサヽキヤウと拍子【紀事】八幡祭の神輿五基、越智川を渡る、

五香水 人の部佛生会の条に出、高野花供 世日【元亨釈書】弘仁年中紀州

小遊びて、勝地と相る高野山に登りて、金剛峯寺と創せ紀伊国伊都郡高野の峯に於て入定の所、又曰釈観賢（慧眼禅師の尊号）と云ふ、表性灵集に見えたり、聖宝の上足なり、延喜二十一年、醍醐帝の夢中に弘法大師奏して曰、我衣敷まこと扨ぬる願くは黍くせんと、こゝに小送る、観賢選に中て山に入り入定の窟と啓くに雲霧隔るが如くして儀容を看ず、観賢礼して曰、少年よ、こゝ道を修し梵行珍重、況て遺法を奉じ、歳月を累ぬるに、ふおいてをやと、黙許せりと、須臾にして真儀漸く見る、霧歛て、月の彰るが如し、観賢順礼して仰ぎ瞻る、鬚髪甚だ長ず、便ち剃り落して、衣と換る、諸衆ゐまと見るとあさぶも、後世疑謗致さんとて、観賢眷議して、石を重し固く封ず、○今高野山宝亀院の住持、代々此事を頂る、ひとこと色の御衣を奉る、是と花供とを八金堂に於て学侶方の僧衆師会を行ひ、花を供せるの日と、大師の御衣を乞ふる日と、同日のゆゑなり、【公事根源】是八四月に

駒牽

侍るゆゑ、八月も名に同じけれど心はもまり、天皇武徳殿に幸せ、王卿以下床子に つく左右の御監御馬の奏

と孰る馬の頭疾ふ渡り御馬と引渡せ、目馬の節会の如し、近衛兵衛の射手南ふ下り四府騎射の丈と奏左右の大将ふ之と奏聞せ、近衛少将以下番長以上六人東遊ひと奏せ右近衛納胃利狛犬と奏せ、雅楽蕪芳菲駒形と奏す、この駒寧ハ来月の騎射の馬、射手人ホと御覧ぜらるゝ、

貞観の頃よりもゝらるふの月の時ハ二十七日、大の月の時ハ二十八日ふ

行くゝこゝ云く

木下闇 茂林して暗きとゝ、万葉ふハ木の晩とゝ、木晩の意聞有

尓霍公鳥何処乎

家登鳴渡良之

柑類の花 柚金柑蜜柑とゝへて其頭假字の部ふて見るべし、

鮠 和名抄鮠師布之 崔禹錫食経 鮠魚性伏沈して石間ふ在りのゝ 遊覧志 石首魚毎歳四月海洋より来る数里を綿直して其声雷の如海人竹筒を以て水底と探て其声と聞り網と下し流と截て乙ふと取る云ゝ

戀し鳥 拾遺 伊勢の御うゝ

奉てとるみ子のもくゝまりて又の年ほとゝぎすと聞て、

「その山ゝえてきゝらんほとゝぎすと恋しきゝ人のゝ」

らまん」此哥より恋し鳥と異名せしゝ云ゝ

五月 **五絲絲** ちの部 長命縷の条ふ出、

今年竹 若竹 時珍曰土中の包筍各時を以て出旬日籜とおとして竹とゝるとゝ云ゝ是即今年竹若竹ゝ、六十年ふ一さゝひ花咲實を結ふ其竹則枯るゝを綛とゝ、竹實と結ふを獲とゝふゝ藤とゝ、大ゝるを蕩とゝふゝ、

苺の花 本草綱目 地衣草 大明日華本艸一曰此乃陰濕の地日ふ晒さゝて起る苔蘚ゝ、〇石蕊時珍曰其状花蕊の如し、〇王柏 弘陶別録 石上ふ生ス松の如し、高さ五六寸花紫ゝ、〇桑花 日華本艸 桑の樹の上ふ生ずる白鮮也、地錢花の如し、〇本邦ふも亦屋上庭園石上樹上ふ多く苔と生ず、五月淋雨降時毎ふ繁茂して花の状の如きものゝを生ず、倭名これと苔の花とゝ、

胡麻蒔 和漢三才圖会 胡麻三色ありとゝふ夏至半夏生の交ひふ種と下し、六月花と開く、七月實熟す、最早晩の二種あり、

六月 **氷餅祝** 毛吹草 豫尾寺の氷餅

滑稽雑談 和俗今日一ふ至アて雀躍雪水ふ製ーする粉餅或ハ勝尾或ハ富士山とゝろ出る水餅ホを祝ひ食して、今日と呼て氷室の節句と

御射の御ト

十日を禁裏堂上ふハ承らぢ、江次第 御射の御ト六月十二月十日此日官奏あ〻分らを 弘仁式 神祇官中臣ト部ホと率て六月十二月一日齊とし、九日トひ畢て十日ニ至と奏す、公事根源 神祇官の官人一日より本官ふこのりて是とトふ上卿ゝ〻まわりて内侍ふつきゝく奏聞を是ハ主上の玉躰ふ御つきしあらんとをうらふ奏をる義ふ人白鳳

黄雀風

五雑組 六月中ゝ東四年ふ〻ーめておとあえる、南の風あをむ是と黄雀風とゝふ、

香

梁元帝詩云季夏煩暑流金爍石、

極暑薫散

時珍曰香薷ハ夏月解表の藥冬月の麻黄と用ふゝ如し氣虚の者尤多く服そべらぢ今人香薷の元氣と傷るとをらも有病無病ふ拘らも緊用て藥ふ代て謂らく〻よく服して暑と

避くと云云○五元集 香薷散犬がねぶ川て雲の峯、其角

香薷

宗奭曰圃と作アて香薷と種暑月蔬菜ゝて菜ハ茵蔯ふ似ゝ花紫ふて辺ふ連アて穂とをす、

心太

ところてんあり

との部ゝるべし、

四月

えびす草

芍藥の異名あり 御傘 梶原性善が万女方ホとゝるふえびす草と名付ゝり云云 もくもりの誤

烏帽子魚

和名抄 芍藥 和名衣美利 須久須べし

豆相の海辺鯉先寄らんとをるとき小一物流れ来る大さ二尺ぢ〻ゝ形烏帽子ふ似て左右ふ紐の如き物ありその色瑠璃紺ふて光澤あり是と魚の名ほゝとゝふ漁者この物の漂流をると期そして海上ふ櫓と構へ鯉の寄ると見る是と鯉見とゝふ両三日をぎて累ーして大ふ鯉と獲るとて烏帽子魚と名るをを

蚕簿

和漢三才画会 蚕笛 和名夜豊、みよれゝ、蚕簿ハ槌ハ蚕簿と架を柱ゝり蚕簿ハ

兼名苑に云蚯と養小器に其上に施く繭と作らしむる者し、**枝蛙**あの部西蛙の条に見えし、

五月

豌豆 和漢三才画会 花瓣蛾の如し形外白く内に淡紫あり中心黒色其實褐色

六月是と収り取る、

六月

江戸浅間祭 朔日○江戸浅間の社、浅草砂利場の後に

あり、是と浅草の冨士と云又駒込にも浅間の社あり、又本所目及高田の馬場又鉄炮洲にも同社あり、祭る所以れも駿河に倣ひ、今日麥藁にて龍蛇と作り、是と篠に

つけて鬻くなれ多し、参詣の人是と買ひて土産とす、

江戸天王祭 相傳に元禄のもしめ大に流疫に

の社地に勧請ある處の、祇園三社の神輿を出して街

に渡御し奉る、こゝより後毎年祇園会と修す、先大

傳馬町御旅所、神輿一基五日出輿八日還輿小舩町

御旅所、神輿一基十日出輿十二日還輿南傳馬町御旅

所神輿一基七日出輿十四日還輿なり、いづれも神輿還

幸の時その町々に渡御、社人供奉馬上にて、

供奉鉾三本氏子是に随ふ神輿渡御の町々八日廃務

也、武家門に竹を植る家あり是忌竹の意なるべし、其外浅

草御蔵前千住品川四ツ谷にも此祭あり中にも品川の

神輿は海汀に渡御も天王祭とは牛頭天王の祭といふ義、

祇園会といふもこれに天王祭

江戸山王祭 十五日

といふは江戸の俗の方言なり、

○神社江戸永田馬場にあり祭る所近江日吉の神と同じ、

別當勧理院僧正神主樹下采女正その外社家数多あり、

官より神領六百石を附せらる、當社いにしへ八間郡川越

仙波といふ所にありその地仙墓仙人の住せし古跡なりしと、

慈覚大師草創ありて星野山無量寺と号し天台の灵

地として山王を勧請あるこの後尊海僧正中興し三十余院

甍をならべ、人皇百三代後花園院長禄三年太田道灌

江戸の城を築くの後文明年中仙波村星野山の山王を勧請

して、江戸の城護神ともその地今の紅葉山なり、

御當家御在城となりて城西の貝塚に移さ

る明暦四禄の後ふたゝび溜池の上にうつさる是今の社地

なり、江戸第一の大社神殿巍々として石の鳥居五十三良の

石階松柏枝とつら結て上久くり、祭礼六月十五日官祭、
神田明神と隔年に行ふ九祭祀に預るの町、南は芝と限り、西は龍町、飯
田町と限り、東は傳馬町、濱町辺と限る、北は内神田と限り
とす、神輿三基祭礼の番組四十余番各花どし山鉾の一類
本練物に出て、神輿渡御の町々、宵宮より桟敷を設、
幕を張、毛氈を鋪つらね、軒に多くの提灯を釣る、十五日の
未明先榊渡る、太鼓是に添へ、其次蔵の造り物ある引山
その次諫鼓に鶏の引山、其外の番組は例年の定
めあり、此祭は龍町より、朝鮮人来朝の形に出立ち布を
造こし大なる象の練物を出す、辺年引山の外神幸の道
本山を出て、永田馬場より、御堀端を歴て、龍町御門に入
上覧所を渡り竹橋より神田橋鍵倉河岸を過、今は竹橋
常盤橋を出る本町壹町目へ出、本石町三町目、小傳馬町、大傳馬
町旅籠町へ渡る、傘鉾大吹貫幟屋臺引山甲冑の法師
武者あり、氏子に預る處の諸侯も、又藝者の武士とりどり、
長柄鑓を立つらねて群行す、甘場町、泰師堂、山王別當の
別院なり
の境内にて、神饌を献じ畢りて、八幡日本橋筋を中橋へ、夫より本山へ還幸也、

炎天 極暑

の天と
いふ、

て 四月

手安天神祭 午の日

○江州野州郡江辺の庄にあり、永原村、北村、三ヶ村の氏
神、鎮座年月詳かならず、明和年中まで凡七百余年を
へたりといふ、又永保年中とも、四百年以前、延久五子年十月
十六日永原越前守再建、その後應永廿六亥年、八月永原
越前守雅行修補、又明應七年四月十四日同氏重秀改め
造る、この重秀も越前守に任じ、世八万石余領、京極佐々木
の同流にて、永原に住、後に本居神とも、四月午の日祭礼、神
輿二基渡御あり、例祭正月十日より十三日よりて、凡三日十句兵
行あり、巻頭は時の地頭の句を定例とす、此所北村李吟、出生
の地なり、又平清盛の妾妓王も此地に出生、故に平家社奉行、
判物の大繪図氏子三ヶ村に傳来せり、
て、別當賓光坊の説、とも、祭式未詳、

繡毬花 和漢三才會会 粉團木の高さ五七尺、葉は箱根揚櫨に似て團く皺あり、四月花をひらく、初は淡青色、後は白くなる、小さき花
攢簇して團さ二三寸、一種小粉團といふあり、木の高さ四五尺、
葉狹く長し、棣棠の葉に似て粉團に似て小く白し、大さ半

五月

天中節 提要抄 五月五日午の刻と天中の節とそ、天

師と畫 かの部 艾虎 の条に見へし、**天南星** 藻頭和經 天南星 処々の平澤に あつて、三月苗を生ず、荷葉に似て、其莖高さ一尺以来、葉蒟蒻の如く、両岐相抱く、五月花を開く、蛇頭に似たり、黄色七月實と結び、穂となる、石榴の子に似たり、紅色○時珍曰一名虎掌、葉の形、虎掌に似たるに因てなり、南星と、根圓く白く、形老人星の如くなる故に南星と名く、云々 和名抄 虎掌 和名於保曽美

鐵線花 和漢三才圖会 鐵線花 保曽美 極に三葉、微々たる葉の秧鐵線花按ずるに苗宿根より生ず、故に鐵線と云ふ、俗称に蔓に似て小く、甚細く、敦甚勁し、黑く、其葉架に倚て繁衍、四月花を開く、蕚の下に六葉あつて莖を抱く、亦一異あり、其花白色六の瓣平に開て、蘂田く紫色、最艶美、其莖糸綫の如く、天蠶糸を綟て繰とるに似て、其やとに似たり○千葉鐵線に外六の瓣七して白色常の如く、内の瓣ともに白色千葉短く細く、随ひてひらく、青き蘂あり、外の瓣既に落ち、内の蘂ひらく、

六月

天滿御祓 廿五日 ○當社は摂津大坂西成郡天満にあり、祭る所の神、天満天神、掛陽碑談、社家説に曰、天満宮の權輿は人皇八十二代村上天皇の御宗、天暦年中この地に大多(天満山)に於て、夜に松茂生すその梢に昊光赫々たりと、人ともに怪て、帝都に告て奏聞に遂く、帝即日勅使を下しさまふ時に神託あつて云、難波の梅を尋ぬ、紫紫よりこそ来るべし、蘂花豐とその由を奏に依て菅霊を此地に鎮らるる云々○例祭六月廿五日、遷物車、楽に水陸ともに渡て、詔して神輿東の御旅所に出、往還川舟少そ、数万の提灯、群集、遊船多し、

天貺節 書言故事 分要 云、宋の真宗祥符四年、詔て六月廿日を天貺の節とす、

四月

袷 文選秋興賦 御袷衣 李善注云、袷衣無裏 ○九四月朔日と更衣とも、此日より袷を用ひ、端午に至て布袴と、**網鳥** ほとゝぎすの異名、を網して取て、明年の夏鳴せんと云、

青簾 青葉の簾 藻塩草 青葉の簾 藻塩草 長、時鳥用ふ、翡翠の簾 笠とも、四月朔日新しき笠をとり

くるまりとも云ふ一説に加茂の葵を四月朔日翠笠に
くけらるゝ故青葉の笠とも云ふ云ふ一説に夏山の翠あるを
いふ云ふ○青藍云云禊手間の匂ひ「客人雑記」母の所に
青笠おもしとへるたぐひの作例あまたあらまぶ天子の御笠
とのこいふをいへ

扇を賜扇の拜

旬しめる条に
見る

甘水

ふの部仏生会の条に
べし

葵祭 葵蔓

かの部加茂
祭の条下

雨蛙

枝蛙 和漢三才画会 背青くして腹白し大なるものは寸半に過ぎず
雨ふらんとするとき鳴く故に雨蛙と名く 大和本草 土
鴨雨蛙とも云ふ最も小なり色青く木の枝にすむ 夏

青ざし

枕草紙 五月五日のことをいへる
枝蛙
条に青ざしといふものと人のもとより来るを青きうすものと艶ふるものとの二ふに数て
これまぜこしふさねとぶそてまゆらせるもバ云云李時
云青ざしハ青糸にて調しくる菓子なり

蜀葵

草葵 多年葵 此名亦蜀葵といふ○時珍曰

春の初め子と種冬月まきおのづから苗と生ず蛾ふる時
茹ふ〳〵五六尺ばかりにて花さく木槿に似て大きく深紅浅
紅紫黒白色単葉千葉の異あるいづれ

兼三夏物

扇

五 雑

俎 大明以前摺扇なし多く團扇と用ふ○扇車扇引
扇すまひ以上増山の井に出る○つゝらをり 枕草紙こだ
のうそ〳〵ぶり云云河海云蝙蝠と見て扇と
作るなり〳〵依て夏の扇の名物なり

汗衫

枕草紙 釈名 衫ハ袖の
端あらぎぬ云云 昭潭志 立山縣の里婦縷績に長せうく
竹と以て衫と為す暑服に充ツ衫ハ小襦○按ずるに和
俗ふつゝ襦袢管襦袢

汗巾

長サ一二尺の布の両端と縫ひこれを用ふ

暑のぬぐひ

山堂考索 暑と用ふる時ハ則日進で北に

編笠

食進こ長し陽勝る故に湿とす暑とする

洗

和漢三才画会 臺笠今竟と編てこれを作る竹の
青と用ひぬ呼て編笠とも以て暑を禦ぐべし

鱸

和俗夏月其肉と魚鮓に作り洗ひ浄め殺酒
に侵しこれを食ふ云云と洗ひ鱠とも云ふ

青

鷺 和漢三才圖会 蒼鷺 鷺ハ似て小く色蒼黑し 以上和名抄 今蒼鷺ヲ
称る者鷺ハ似て大く頭翅皆蒼黑項冠毛ハ赤同色
頭上胸ハ至て黑毛斑々たり 翅の端正黑背の外黑く内
黄褐白く脚緑ゐ毎に水辺に歩して魚を食ふ飛ぶ
ときハ高く挙て遠く翔る その肉最美 夏月ハ
賞 **山女居** けの部夏蓮 **青山椒** 和漢三才圖会 本草 秦椒蜀椒
も
の茶ハ註す
の二種ありて秦椒ハ其葉對生尖て刺あり四月細花
を生じ五月實を結ぶ生ハ青く熟すれハ紅ゐ蜀椒ハ
針の如き刺あり葉硬くして滑ゐ四月實を結ぶ花ハ
く但枝の間ハ生ス其實ハ紅熟せざるときハ青
山椒と **藜** 時珍曰灰藿 四月苗を生ス蔬ニ可し藜
い灰ハ 灰藿の紅心あるものハ莖葉稍大ゐて嫩
きときハ亦食ふべし老るときハ莖枝ハ堅し
べしO やうせん藜の杖ハ ちる日 **鮎** 若鮎ハ
て春ゐ ちぐ鮎とむうひ 鮎とハ
ちう落鮎渋鮎とひて秋季ゐ

五月 **菖蒲と**

獻 和漢三才圖会 仁德天皇三十九年辛亥五月始て記
て菖蒲と献す 続日本紀 聖武天皇天平十九年五月
天皇南苑ハ御して騎射走馬を観ゐ是日太上天皇詔
して曰昔ハ五日の節常ハ菖蒲を用ひて縵とせしのころ
此事やゝ久今ゐして後菖蒲掛 **菖蒲の鹽** 八事根源
ざる者ハ宮中ハ入ことなかれ 元五
六府あやめの輿を南殿の階の東西ゐ四日ハ朝綱の庭
ハ是ところ主殿寮所ゐ菖蒲ゐ〇菖蒲の御妻の
料ハ梅ゐ畑ゐて供奉人今出川家ハ納む即蔚を遣ハ
衛士ことを作る其法根菖蒲と連ねて棟梁と 細木
と以て柱とす 迺ち小殿の形と作て檜の葉並 **菖蒲**
菖蒲を以殿宇を葺衛士禁裏ハ献る
葺 時珍曰菖蒲ハ蒲の類の昌盛ゐるもの故ハ菖蒲と
名く 和漢三才圖会 菖蒲屋の葺ハ ゐ或件
の日菖蒲ハ浴し或ハ石菖の根を以酒ハ **菖蒲人形**
清しことを飲バ邪氣を禦ふ 元五
此人形ハ力士の形を模して作る多ハ江戸ハ元禄の
ころまでハ市中を賣ゐきゝ ゐも 夏懐集 端午の部

ふ「五月雨や傘に付くる小人形其角」とあり、

菖蒲

今、十軒店尾張町其外便りよき街に是を賣る

ひく沼沢江池にふ下ゝ〻ちて引心と寄ふるめ〻〇安

引こゝ草末にの露ゆ五月雨ふまさる水野のあやめ

ひくまり

菖蒲の髻

菖蒲を献ずと云

資任

菖蒲

糸下とこゝる〻〻

菖蒲の案

延喜式 典薬寮式云五月五日菖蒲生菰黒木

の案四脚芋六両黒葛四斤と進る省輔以下

寮頭とかふ執る人進み訖りて

即退出す輔曲ゝとこれを奏す

菖蒲の枕 緑袋

やめ〻〻ひと夜〻ろもの枕〻ふむすゆもこそね夢のこゝし

かゝ」前中納言雅具

後水尾院當時年中行事 あやめの枕

一対ゆ人御枕〻ふまり〻ふ極鶴調進を御

枕ハ匂當の内侍ゝ〻ひとすゝ其様あやめと九〻五六すゞ

かゝふ切て五すゞ〻ふあとゝきと紙ひ

ねりあし結ひて両方の小口ふさ〻ゝ

菖蒲湯

同年中行事 五月五日の条云ハさゝふの御湯まゐる

ゝべのゝ〻ゝぶの御枕一対とゝすゆゝふつゝあゝら竈殿紙

ひねりを引ゝきそ御湯ふ入る 大戴礼 五月五日蘭と

菖蒲と以菊の葉ふ代るあり

菖蒲

多〻ゝ人沐浴也、五五是菖蒲

蒲の占

三潮草 女兒の戯ふあやめを結び唱へ

ふと軒のつゆ〻ふ〻ゝんうゆ〻〻〻〻ふ

の糸」如此りひて一事と祈る、願ふ所成るかの

菖蒲浴

ハ蜘蛛あ川て網を菖蒲のゝ〻ふ曳〻〻

衣

京師の俗端午ふ菖蒲浴衣同帷子と與ふるこゝ必

家〻ふありこゝ官家ハ菖蒲重こゝ朝服あり花

田萌黄のゝ〻根菖蒲とゝハふ表白裏紅又擬衣とゝハ表

紫裏薄藤又菖蒲重紅梅を用ゝ〻ゝ〻れど五月五

日着ゝる処の常の浴衣帷子と菖蒲浴衣

菖蒲酒

菖蒲帷子ゝりゝのとて堂参の色と用ふ非〻

荊楚歳時記 端午ふ菖蒲の山の洞中ふ生る一寸九節

の者と以て或ハ鏤り或ハ屑ゝして酒ふ浸め以瘟疫と辟

く

棗と早 石菖蒲一切の悪と除く端午の日菖蒲と

切ゝ酒ふ漬てゝとと飲む或ハ雄黄と少しゝ加ふ

棟と佩棟葺

證類本草 五月五日人棟の果と取

て〻ゝとと佩ゝ悪氣と逐ふ〇時

珍曰茶ぎるゝ羅願尔雅翼ゝ五楝の葉とゝて物ゞ練ゞ
故ゝくれと楝と名く其子小鈴の如し熟する時ゝ黄色金
鈴と名く形と象るゝ 増山の井 今と片田舎ゝゝ端午に
あゝたの葉と軒ゝぬく所侍り、今せんだんの木とゝふもの
也ゝ

有無日

廿五日 公事根源 これハ村上天皇の御国忌ゝ
宮中ゝあゝとゝ申しの日と也申ゝ也、殿務日ニ
ゝゝらるゝもゝども政ゝとなゝと侍らゞ又急事なゝく
あゝこゝ、俄ゝ政事ありゝゝてゝゝゝゝしの日と、申ゝ

楝の花

蘇頌々曰楝木の高さ丈餘葉密ゝて槐の如く
長し三四月開花花紅紫色分香庭ニ満つ 花彙
石茱萸その樹高丈數抱ゝ及ぶ葉厚く光り夏月花音
枝ゝ満つ色淡紫觀るゝ堪えゝ一朶數蕚數百群ゝ
頗ゝ分香あり長き實と結ぶ桃葉珊瑚の如ゝ一總數十
顆枝の間ゝ垂糸生ハ青く熟まゝゞ黄色味甘し一種用ゝ
實の者ハ味苦し川練子是ゝ日本古来罪人と梟首ゝ
ゝ此木と用ゝ故ゝ他材ゝ用ゝも俗誤て旃檀とゝゝ旃
檀ハ檀香ゝ又擅の字と用ゝ 枕草紙 木のさゝゝハ
ゝゝちの花ゝゝゝゝけゝゝゝゝ

ざるかのと粟ともに穂大やかにて毛長く粒粗きものを粟と云ふ穂小やかにて毛短く粒細きものを粟と云ふ苗とかふ葉ふ必て種類凡て數十青赤黄白黒の諸色あり早中晩あり三月種るかれと上時とも五月熟す四月種るものを中時とも七月熟す五月種るもの晩しさハ葉ゞれ梅のごとく下時とも八月熟す

青梅

杜國○梅とぶりいひこと實のきゆふ

杏子

本草綱目 杏ハ巣四くして尖あり二月紅花とひらく沙のごとく沙杏ともに黄ゝて酢と帶るものと梅杏とも青くして黄と帶るものと奈杏とも大と梨の如く黄ゝて橘の如きと金杏と也○和名抄にもあらめる 和漢三才圖会 本草綱目ハ海俗あんずとゆふ

荒布苅

濂ふ似さうと埃ぢふ昆布似て狹く黒色長さ十の四五尺縱の皺文あり柔らかに數株あり堅實すくに乾けハ小刀の攝とする其葉煮食ふ

鯨 大和本草 東南の海ふ生るもの形肥大さう夏秋肉多く味美あり冬春美ふ又室鯨島鯨あり味劣る

六月

芦の神輿

つの部津島祭の条下ふ見し

熱田祭

神社尾張國年魚市郡江嵜松姫島千竈の郷ふあり正殿五座第一天照太神第二素盞烏尊第三日本武尊第四宮實媛命日本武皇妃第五建稲種命宮實媛の兄太宮司の祖神右五座西ゝ向次て是ゝ ○土用殿八神躰草薙の宝劔あり又熱田七社ハ大宮八劔宮高藏宮大福田宮日割宮水上宮源大夫宮是ゝ此外摂社末社一百余座あり當社八人皇十二代景行天皇の御宇鎮座ゝ其後天智の御時故有て皇都ふ移奉ゝ十九年と經て天武天皇朱鳥元年ふくゝ當國ふ還座ゝ其砌八例祭勅使下向有て官幣と奉ら其ゝ抑當社の神事年中數度あり正月十日長剣踏哥の神事大福田の社ゝ始て政所大宮八劔又大福田ふて終る此社八倉稲魂を祀る故ふ五穀豊登ゝ祈る神事あり舞人十二人島巾子一人笛一人陪一人各櫻山吹と挿頭ゝ同十四日八歩射の式十五日八歩射の的廿二日八両宮の歩射会三月初巳午木の日祈年祭○同月初末の日午刻御田神社の供御此日烏喰の神事ゝ俗ふ烏祭とゝ是八神事ゝ ○ゝじまらさる前ふ大宮祭支殿の前ふて祝座の長外ふ一人平餅をゝて烏と呼ぶ此餅と烏のくもざるゝ八神事と

えしめぐらしいく○五月五日八神輿鎮皇樓門上へ神輩古賢なり、
○六月九日山鉾祭礼あり熱田八ケ村よりこれを行ふ東二柄山一柄○
同月晦日夏越の祓あり、鈴の社前の川岸ふおいてこれを修す又
○七月七日大宮の大掃除十一月初寅卯辰の日新嘗祭十二月
廿九日両宮外院煤掃ひホあり此外諸社
の供御ハ月々數度これ有今無ご詑て略記、

愛宕の千日詣

廿四日 神社啓蒙 丹波国桑田郡水雄の北ふあり祭る神
言一座伊弉冉尊火産霊神云 神祇拾遺 愛宕権現
端の御前軻遇槌命、奥の御前伊舎那美尊 紀事 六月廿
四日愛宕詣是平日の千度ふ當るとい俗これを千日詣と
いく寺僧六坊ホてこの日参詣の人ふ酒食と饗ぜこれこと
坊者とらふ火札と買て帰路樒の枝と求め粽と付これを
肩ふ〜て帰る樒の枝ハ電の上ふ挿むかくのごとくすると
ときハ其家火災を免るとらふ元六坊国毎ふ檀越あり貴
賤と撰ず毎年札と贈りこれ贄と贈るこの使と勤るもと
中衆といふこの山嵯峨の西ふあり延喜式ふ載る所丹波の
桑田郡ふ属ス今ハ山城の國ふあり本殿祭るところ愛宕權
現垂跡本地勝軍地蔵菩薩是則慶俊法師再考勧請セ
る所ふて當社そしめハ城北の鷹ふ奉ふらるこ光仁天皇元年今の地ふうつす、

荒和祓

部夏
越の祓の条下ふ見べし、

麻の葉流

祓草 年中行事 夏引の麻の
つくさのみをきまらく〜も 大蔵卿○麻の葉と切て幣とす
るゆゑふなを流まる川ふ流をもあり、祓草といふも麻のこと、
麻の葉ふてもそ

暑日

字彙欽文 暑ハ煮ふあり、熱して物
とする故ふ名く、 と煮ごとく〜 五〇暑き日と辺
ハ六月の季ふあり暑と
ぐりハ三夏と無ぬ

青嵐

夏末立の梢の緑と吹あら
をといふやハ一説六月末用中
の空ふ一点の雲ふく青くなる天氣ふ東風のくくつしあ
たると青東風といふ無類の天氣ふ是と青嵐といふ上云

草

麁文曰赤草一名山酸漿高さ七八寸ばかり一茎一葉蓁
吾の如くおゐて薄く小さし夏日其茎葉真紅ふなる
其苗山沢ふあり故ふ山酸漿と名く立花
と好みる人夏日ふ化と愛して花瓶ふ挿む、

青田

社詩 六月青稲

藍苅

和漢三才画会 四月苗
多千畦碧泉乱と作るる
と植て九七十日ばかり
意ふく風景ふるべし、

にいまゝ穂とあさくろ時、晴且ふ露ふ乗しこ抜採り、曝し乾まこ云抜まるふ抜採るあ此稀わして苅る者迩

麻、同苅

櫻麻 和漢三才畠会 苧麻大麻ともふ皮を剥て絲ともし通して苧と称き苧

麻と以て真苧ともし、羽州最上の産と佳しふ奈良瀑と織るかの是なり云 陸機草木疏 紵ハ宿根土中ふ在て、春ふ至て自生を、栽種ることと須ひを、荊揚の間歳ふ三ゝひ苅る諸国これを種て歳ふゝひ苅る、便其皮を剥取、竹と以て其表と刮る、厚き所、おのづゝ脱し裏の筋の如きかのを得て布と緝を、○蘇頌曰苗の高さ七八尺葉楮の葉の如くして、面青く背白く短毛あり、夏秋の間細き穂青き花と著く、○櫻麻、櫻花のさくころ栽る故の名とも、又麻の櫻ふ似る故とも、○麻苅と夏なり、二桑苅と秋とも、

青番椒

もゝ

青鬼灯

くゝ〜くゝ秋の部ふ註を、

青瓜

時珍ふ青色瓜とゝる是ゝ、江戸ふてこれを本田瓜とゝふ、九貴瓜ふ似く長大ゝり、

阿古陀瓜

阿古陀ハ宛も南瓜ふ似て今人好まゞ此瓜京師ふ多し、味美からぞ、其蔓長く葉蜀葵ニ似て花黄ゝ、

麻

地酒

諸国名物記 豊後国の製ゝ云 和漢三才畠会 南都浅茅酒云云 毛吹草 豊後国麻地早云云 又朝生酒とも書、或ハ土ゝりとも云、酒方の書ニ云麻地酒ハ豊後国ゝり出、其造法糯米粳米等分ふ合製して冬三月寒水と用て是と釀し、土中ふ埋め草茅の類と以て是と覆ふあり、冬春こ経て夏月土用ふ至て則土中ゝりこと出ちふ疏ふ熟せゝりて二ゝりの名あり、夏月の飲ゝ賞翫を、

洗飯

すの部水飯云云 紀事 六月の条ニ出、

雩

早する時八民間請雨の法と修ス是ゝ雨ゝと鳴らゝて踊躍或ハ笠と戴き蓑と著雨中の舞とて是と祝し、諸神と祈ゝ云云、

秋隣、秋近し、秋と待

いづれも別義なゝ

さ

四月

下帯

御湯殿記 五月五日より女房上下帷子下帯と用ふ又四月ゝゝ用ふ、あゝ是ハ洞中の御事ふ、凡ハ帷子といろゝふ染て着し、附帯

山王祭

申の日、但ニッあれバ

二の近江国日枝の神社八滋賀郡坂本ふ有、祭神大己貴尊
申、こ所謂上の七社八大宮大国主命十面観音二の宮廢多羅神
及ひ金比羅神ニて天台山壱龍寺の鎮守ふ准ち薬師如来聖真
子八幡大菩薩阿弥陀八王子灌頂大法王子千手観音ニて補陀洛
山と表す、客人の宮白山明神の灵尊去来諾の大神ハ山王の
行化と助け、比陸と出てこの山ふ来現あるふ故ふ客人の宮と
いふ十一面十禪子八地蔵の應化ニ大師此山と開き成就の後上
定心院ニ創む殿山東の堂ゆあり十禪師と置くふ九人と
えらひ得て一人と欽く安慮と得て数ふ満て十禪師の才
器と歡抃して忽然ニ〜てこ〜ふ故ふ社とその所ふ走て
祭供をこ〜と十禪師とハ賢中の七社、牛御子八大威德大
行事八毘沙門、早尾八不動氣比八聖観音、下の王子八虚空藏
王子の宮の珠聖女八如意輪ふ下の七社小禪師八弥勒龍樹
恵王子八愛染、新行事八吉祥天岩滝八弁天山、末八尸利支天
飯の宮八不動、竈殿八大日、以上廿一社ふ〇三月十八日山王祭
の神とその所ふ於て伐取て四月三日ふ至て西教寺の側
の松の木ふ寄せ立て又山王の社前ふ置夜ふ入て諸人こ〜と
とく、大津の四の宮ふ立ツ祭の日神幸の時大津より大宮

の拜殿ふ返し入奉る〇申の日江州東坂本の山王祭ニて午
の刻過て田楽法師、獅子舞、比叡辻の人並ニ衆徒前駈して
神輿と迎へ七社の神輿山と下る時、前後とゆらをひ競ひ
す、こて舟ふのせ〜む、山門の僧徒桟敷と構へ翠簾ニこ〜と
て是とこ〜ろ〜ることと横桟鋪とい〜田楽法師ホヒの前ふ於こ
藝とふもこの日京の山王町ふり供物と吉の社ふ献も前日
天台の當座主の御室ふ至てこ〜と加持し、翌日東坂ふ上至
りて供ち、又江州膳所の地人御供と献ぜ祭の日縛船二艘明
上ふ浮め、音楽と奏、て件の供物と献備も是と御供船と
いひてその船ふ乗るもの、多くハ猿皮と著て猿の假面こ發、
猿ハ元来日吉の使令ふこ〜ふとの中、六社の神輿ハ仮りふ供
ちるゆ紙〜て後湖水ふ撤つ大宮一社の神供ハ、神輿の前ふ
置ふこ〜その後神輿船と陸地ふ寄せ神馬相むく〜得て輿
中の神駒こ〜ふ〜ふ、本社ふ入ふ〜といふ、七社の空輿ハ坂本の
地人こ〜ふと昇て神輿屋へ入ふ〜今日山門ふ属ちる所の供
人其さ盛盛とふひ、神幸と警固ち、俗諺ふ山王祭ふ礒る
ものあんだ寒の語ハ今日のこ〜ふとこれ人と害もふ及
ふの語ふ祭ての前夜いまと八王子の神輿と祭ふ急

ふ山坂と下りて、七社の神輿各本社七ヶ所の拜殿ふ居う、
抑山王祭ハ七ヶ年諸てぎ〜そハ盡く見つくしがく〜とつくそ、
古老傳へていふ九月中の申の日八王子三宮の西神輿とハ
王子の山上拜殿ふ舁きそなおくそ四月末の日ふ至て件の二社
と神輿ふ迎へ奉ると午の神事とハ八王子拜殿ハ元来
山嶺ふ造りて出して階下遠ふ低し、神輿半ハ拜殿ふ向り半
拜殿の欄干と越て外ふ出し、神輿の北の方の榊ふ柱とそ
相圍と待て柱と接とれハ神輿こゝしまふ落つその下ふ神輿
舁数十人並居て中ふて諸取直ちふ山坂と下を誠ふ生死とと
の一時ふ究ひこゝ八瀬の土人頭て役もう所ありこゝとと神
輿落ふ人下し終りて、両社と二の宮の拜殿ふ宮置直ち二の
宮の神輿と拜殿ふ迎へし奉るとハ近年末の日の晩とわる
十禪師の神輿も又同〜、末の日二の宮十禪師四社の神輿
と大政所ふうつし奉る同時警固の式あり、大宮、聖真子愛
の宮ハ大宮の拜殿ふうつし奉る（此間ハ公人各白素絹
紫の刺ぬき五條袈裟と以頭とつゝ太刀と佩その余数十
輩甲冑と着〜鎗長刀と持てその所と警固し、神前ふ武
器と立つらねて、終夜警固の勢ひとゝ〜て谷下山を、此日京
祇園の社より御供と捧け来りて酉の刻献備ふこれと未の
御供とりふ暮ふ及て宵宮落〜といとあり、政所四社の神
輿と石垣の際へ出し石壇の下より杜ふて神輿の先の方ふ榊
端を持せ置て、こゝも又合圍と待て四社一同ふ落さんと設け
おく〜神事の役人その所々ふ来集りて、時刻ふ至ハ御子舞
大政所ふ来りて、三の社三の宮と次第に舞て退く、次ふ田楽法師
装束ふ菅笠と被て、藝と施し、神輿と拝ち、この時公人頭取
狂言さしたさて、ものう仕れといふ、田楽笠とぬぎて立烏帽子
と着てうゝい舞ふこの舞の扇と挙ると相圍ふ神輿と落ち
四社の神輿草中ふてうけとり先とひらそひて走る収納所の前
氣の宮ふて前後とまふ相揃ひ是より次第の如く神輿と並へ
大宮の拜殿へ迎幸て村合せ奉る〜当日申の日山門の大衆桟
敷人の義あり、云公人甲冑ふて衆徒と警固ち桟敷の前
ふおいて御て姫田楽あり、是ハ賓宮ふ勅使嗣参向当日まで
御滞留勅使の饗應の遺意といハ、人皇七十代後三條院延
久四年四月廿三日始て祭の官幣と立らるゝのよし、廿二社注式ふ
出、或ハ六〜四代、圓融院貞元二年四月廿六日、始て上卿弁外記
史諸司と遣はさるゝとといへり、〇九神馬の催し、三番の鐘

よ應じて、參詣の輩石の鳥居へ来て集る、三塔の公人人數
をつらねる、未の刻ばかりふ四の宮より榊を渡す、礒成束帯
濱成文宮、唐装束にて各馬上、七度半の庭至て榊を渡そ、
此間七長け 社家春日祭といふことあり、社家の拍掌を待
て、大宮前の麻を動かすを合圖として、神輿各先をつらら
ことひ、舁出す前後の勝負石の鳥居をぞくことあり、こ神
輿ハ飛ぶが如くハッ柳ふいてるこ、ふおいて神輿を船に乗
せ奉るも又先後をつらそふ、この神輿船ハ潮辺七浦より
毎年二月ごと出す、是より辛崎の社にて神供の義行て
七社神輿の駕輿丁例年潔齊精進してこれを勤ゆ今日の
勝負の手柄を褒美して禄を賜ふ、谷々勝手より
これを出す、日次紀事ふ七社害寄より、神馬を陸地還幸こ
いふ誤なり 日吉鎮座記祭儀式卯月の祭礼ハ琴の御館大
樫木を以て神幸の祝詞を奏し、唐崎ゆ先盟の如く恒世う
餅粟の御供料を奉る、神輿を出し祭ることハ桓武天皇延暦
十年三月御輿祭始るこハ延元年中供水以後の例なり七社
の神輿、御供を献るを各七勝、献供の式畢て神輿舁る輩
ハ唐崎へ上り、陸地を木社へ帰る、西ハ高野矢脊修学寺、佛

持寺、田中、山中の人、東ハ大津志賀、河野坂本、苗鹿雄琴、仰木、
乳母、真野ふの土人也、神輿舟ハ若宮の濱へ着岸、是より上る濱
といふ所の土人、神輿を舁き炬火挑灯を本社へ還御あり、翌
酉の日廟の神事といふ者大坂より来て、神楽を奏し終る也
後神輿を
納るなり、

榊取

加の部神祭

三枝祭

吉日撰ひ、
捨て抛ふ川、

（大和國添上郡率川の河波神社の祭、或説ふ率川と三枝ゆ
別社、率川の社の南ふ三枝卿子の社あり、諸神記ふ件の社ハ
右大臣是公の建立なりとまふ、南家の苗裔この祭と行
ふ、一説ふ三枝の花を折て酒樽ふ挿ざる故ふ三枝の祭と申
とも、頭形の説ふ三枝ハ、ふすあくきまり、ふ廣るもハ祝ふ
る、是公事根源是公の建立と申口傳あれど、今といふる書ハ
洛海公の撰れて、養老年中ふ奏覧ぜらる、是公の大臣ハ洛海
公の曽孫、このを既ふ今ふ、ふこゆれた是公の再興也、菅東
さ

嵯峨祭

中の亥〇丹波国桑田郡水雄の北、白雲寺愛宕
権現の祭まり、

滑稽雑談 倒祭神輿三基

滑涼寺ふあるて、祭日の送て迎へも此地ありるこ寺ハ山の
下ふありといども、神地ふ属も故ふ清涼寺の櫻川ふ顧して

愛宕山とり、蓋故あるうこの日一基の神輿ふ冠らせる金屋
八愛宕山より下も此金屋下るゞ期とゝて神幸と催スー
基ハ野山大明神と申て、野宮より迂幸と云云いづまの土
人本居神ともこの祭ふ土人嫁と姙もの如く繁とかゝ式
せ、匂欄ふ於て舞しむ近 櫻の實 和漢三才画会清
年引山或ハ金鉾と出を、 明の前後花とひ
らき實と結ふ大小大豆ゞ如、生ハ青く熟もゝ、赤黒し仁
あり、小兒好でこゝと食ふ味ひ甘美よく魚毒と解ゞ俗ふ
此子と櫻
坊とい、

五月

五月の王

くの部 茱萸の条ふ出、

鏡 異聞集 唐の天室中揚州より、水心鏡と進る背ふ盤
龍あり、五月揚子江心ふ於てこゝと鑄る、背龍頗る異
ちう、後旱もこゝと祈ゞ則雨ふる 搜神記 金錫の性ハ
一あり、五月丙子日午時鑄ると陽燧ともゝ十一月壬子の日子
時鑄ると陰燧ともゝ○時珍高臺録と引て云ゞ陽燧一名陽
符、火と日ふとる、陰燧一名陰符、水と月ふとる蓋銅と以て
こゝと造る、こゝと火水の鏡とい、 五雑俎 唐より以前こ
ゝ揚州より鏡と貢もゝ五月五日と以揚子江心の水と取く
こゝと鑄る凡鏡ハ他ふし 左近の真手番
水清列ゝ則佳ちう、

公事根源 五月三日ハ左近の荒手番四日ハ右近の真手番
五日ハ左近の真手番六日ハ右近の真手番ゝ左右
近の馬場ゝ騎射のこゝあり、射手ゝ大將の申さ
ゝ云云此日随身褐の尻と折て着る故ゝ
日とい、荒手番ゝ同しさまゝ真手番正月ゝ
五月五日とひとつの日とい、ひとつハ引折の略 河海抄
左近の馬場ハ一条西洞院 寂勝講 公事根源 先ゝ
右近の馬場ハ一条大宮在、 日とさゝ
四ヶの大寺 東大 興福 延暦 園城 寂勝王経の疏 ふ
證義講師聽衆ゝ
ゝ 元亨釈書 永延皇帝一条寛弘六年六月十九名德と宮中
ふ延て寂勝王経と講論ゝ五日立て式ゝ先代或
行ひ或ハ止む今よ

五月雨

梅雨 入梅 和訓栞解 徽雨 墨栗花 ゝ

ゝ後例とゝ云云
さつき雨降るの畧○梅雨 坤雅 四五月の中梅黄み
落んとする時水潤土溽して柱礎ゝ汚蒸鬱ゝて

雨ふる、ことと梅雨とゝ〻故ふ三月雨ふることと迎梅とゝひ五月雨ふることと送梅とゝふ○入梅 四時纂要閏入立夏の後庚日ふ逢ふと入梅とも芒種の後壬日ふ逢ふと出梅とも雨とゝもと新穀ゆゝしゝ○黴雨 紀事 立春後百三十五日大概黴雨とも諸物黴腐る此節陸地處々ふ水ゝちゝむ涌出る俗ふ津井穴とゝふ○墜栗花穴 紀事 筑州太田郡丹生山田の庄原の村ヶ才天の祠のやしろ毎年水ゝちゝむ涌て期と怒くば是則中將姫の嫁自瀑前と祭るのもの墜栗花左衛門とゝふ

早苗早少女

たの部田植の条下見るべし

榊の花

和漢三才畫会 坂樹紀 賢木式 本朝 龍眼木 漢語 和名佐加岐正字未詳 按ずるふ本朝神社必用の木あい浮屠の木寂と用ふるがごとし葉小さく色深青やして香ふ〻四時周まそふ白花とひらく實と結ふ生ハ青く熟せるとき紅ゆゝ日本紀ふ八百萬の神ゝち天の香久山の坂樹と取て天の窟戸の事と祈ゝ以来神の縁木ゝゝ

柘榴の花

潛確類書 石榴 種甚多し千葉深紅やして實と結ぶのと空球と名く瓣葉のもれと火榴と名く甚ごとく花と名く平葉のもれ一種白花とひらく白榴とゝふ黃花とひらく黃榴とゝふ 博物志 漢の張騫西域ふ使を逢ふ林安石國の榴の種と得て歸る故ふ安石榴とゝづく

さるとりの花

[illegible] 萩葉 [illegible] 山野俗かめりそ

五月躑躅

花史 杜鵑又石躑躅と名く此花杜鵑の鳴くとき英と ゝらく

故ふ名く 和漢三才畫会 山躑躅 山石榴 杜鵑花 和名阿伊豆豆之 今云さつき本草綱目ふ云處々山谷ふあゝ高さ四五尺低き物一二尺春苗と生じ葉の色淺緑枝小やして花繁し一枝數蕚三月始めて花とひらき蓮華躑躅の如ゝやして石榴の花の如し紅紫五出千葉なるゝ有のあゝ梅ぎるふ品類三百余種ふ至る四月もじめて開き五月と盛ことも俗ふ五月と称ふ授州須ヶ一の谷ゝゝ二の谷權現山ふ至て九三四里だゝゝ遠州秋葉山の禁中乾川の両辺もゝゝ三四里だゝゝ躑躅杜鵑花甚ど多し夏月ふい満山錦のごとし

鷺撫子

なの部撫子の条ゝゝ

早さ

松茸 和漢三才画会 松茸八九月の交に盛んに他月ことなく五月出るものを俗ふ早松茸と名く其味香美

蠁子 和漢三才画会 倭名抄云蠁子和名佐之酒醋の上にとぶ小虫なり按ずるに醤醋腐肉の中に初め蛆と生じ羽化して小蠅となる身黒く羽黄色大さ一分に過ぎず畏眼鏡を以て視るに蠅と異なることなく然るに蠅の子と視るに蠅と異なることなし

五月闇 李流恭森歌云葉破菖蒲未休滴職光透長庭沙色根無長叙千仞割断頑雲看晴碧 藏玉 さつきの暗間と云ふ空よりの月なり

六月西園寺殿妙音講 十六日 紀事 六月十六日十七日西園寺家妙音講と修せらる今日種々の珍果を家の妙音天に供ず堂上並に衆人相集りて管絃を催す又西園寺家の外琵琶を弾ずるの家又此式あり近世絶えて十六日此を修す 体源抄 妙音院相国師長公妙音天を四条の北室町の東に造らしめ毎月十八日妙音講を

と行ふ云々○妙音天は弁才天なり

座頭の涼 十九日 紀事 六月十九日盲人鄰京会ありて是を涼と云ふ在京の検校及勾当上首一人清涼菴に会し心經を轉讀し頭人検校饗應を設け六波の中昔昔四人を撰びて平家を談ず暑氣甚しく座席狭し故に検校の外勾当上首其以下並遠方の人来会せざるに其外は粗二月十六日の式に同じ

座摩比御祓 廿二日 社説 摂州西成郡の総社坐広太神宮は十五代神功皇后三韓より帰陳しまつる時神武天皇の古例に倣ひて御船難波の岸浮見石の邊に寄せ神璽安鎮の為齋殿を造りたまふの地なり神功皇后十年庚子難波大江の岸田蓑の島に鎮座浮見石は今の御旅所の鎮坐石なり祭る所生井の神福井の神網長井の神右の三車井の神に祭る所生井の神福井の神網長井の神右の三車井の神に祭る所生井の神福井の神網長井の神右の三車井の神に

城内ふ属す北ハ免餓野ふ南北と田蓑の島といふ所ふ江口の辺まで當社の境内ふて赤社あること、天正年中貫江の側ふ遷り坐ふ云 延喜式 坐ふの社○祭礼當日氏子の市民種々の趣り物と出まで社司西横川の川上ふ床と構へ氏子の形代と流 禊と修ス 神代巻 然るこの彼地多ふ蛍火光く神及び蠅声邪神あり、 小蠅声神 奥儀抄 さてこの国ふ多くの神あり、 養草木咸能言語あり云 いそこ譬バ夏のまへのちりとみごとてるやうふ、ものき神のようなりこと、ちらへるぶし、 三伏 陰陽書 夏至ノ三の庚と初伏、中伏、四の庚と中伏、末伏、是と三伏、いふ、

とて六月ちらへ、そるるあり、

代ととて立秋の後、初の庚と

鯖釣

時珍曰青魚亦鯖ふ作る色と以て名とること大なる。

四月多くし數丈浪の為ふ漂ふ所と、釣せまで紹せたして亦獲べし、 和漢三才画会 能登の海上ふ

鷺草

奥州處々ふ鷺草あり、春苗と生ぜ麥の嫩苗の如し高さ尺ばかり六月莖と抽んで花と開く、正白色形鷺の如し、故ふ名く、連鷺草

さらし井

いの部井戸参の条下ふ出、

とるる一種あり、高さ五六寸葉畧大く万年青の嫩葉ふ似て花白色鷺千有餘群飛ふ似たり云 櫻麻

あの部麻の条ふ出べし、

豇豆

和漢三才画会 十八豇豆長大なる者本草ふ相泥じて其莢長さ四の二尺ふ至ると云ふ者是あり、夏至の前ふ種と下そ蔓長く籬ふ延其莢尺余ふ、その子九十八ばかりあり故ふ俗呼で十八豇豆とい、六七月莢の嫩さものと煮て食ふ味甘美赤白の二種有

四月

擬階の奏

七日 公事根源 四月七日ニ至ハ二月の列見の時の成選の短冊と二省ふ出てまるおると、大臣奏聞する儀あり、列見巡引の時ハまこと延るあり、ととてぬれバ短冊とものこと引ふ入てなをて退出さ、ふるとあり、 頭書 擬階の奏擬ハ議也、誰々を加階させらるとあと議する奏あり、

桐花

時珍曰桐ハ花筒とあり故ふ桐と名く、其葉四大あり、て光ふ長く角あり光り滑ふて蕊あり、最生長し易し、花と先ハ葉と後ふ三月花とひらく、掌牛子のごとく白色花心微紅あり、其

木輕虛皮の色粗白し故ふ白桐と名く○梧桐一名青如狼狸○宗奭曰梧桐四月嫩葉小花を開く裏花の如しゑ[天和本草]梧桐又青桐といふ古人詩歌ふ詠ぜ〻ハ是あり世ふ白桐多く梧桐ハ稀ゑ[和名抄]檣桐者三月花紫く琴瑟ふ作るふ

金柑の花 時珍曰其樹橘ふ似て甚さ高大ならず、堪こるかれ是あり、五月白花とひらい、

枳穀の花 時珍曰木橘の如くふして小く、高さ五七尺葉橙の如く刺多し、春白花と生ず、

鴨足草 一名ゆきの下、ゆの部ゑ見

木芍藥 芽名之[賈躭花譜]天宝中禁中初めて木芍藥を重んぜ四本を得くり、紅紫浅紅通白興慶池の東沈香亭ふ移し植とゑ〻○時珍曰牡丹ハ其花芍藥ふ似て宿幹木ふ似くり、

羊蹄花 羊蹄根時珍曰羊蹄ハ葉の長さ尺餘牛の舌の形ふ似くり、夏ふ入て薹と起し花と開く實を結ふ夏至即枯る羊蹄ハ根を以て名るく根長蘆菔ふ似て莖赤し[和訓義解]俗志の如又きしく とり、夏ふ至て小黄花とひらく、其根大黄ふ似くり○按

大黄とり、者是あり、莖花とゆふ黄赤の二種あり、其實枝ちのゝ振ア動せそその音きしくとゑ、

剖葦鳥 蘆原雀 蘆鷺 和漢三才圖会 蘆兎 蘆原雀 蘆鷺剖 以上俗称 按ずるふ 蘆剖

狀雀の鶯ふ似て大さ雀の如し青灰の斑色長き尾田沢芦葦の中ふ在て好んで葦中の虫と食ふ其鳴声喧く亮〻ゑ故ふ此名あり

兼三夏物

切麥 ひの部麥の条ふ出る、

木布 紀事 夏日奈良瀑布、讃布、高宮布、木布の類と言ふる、又云森布、葛布、藤布ホのハまゞ瀑さると生布ゝゆふ木布とい牛布ふ同ゝ、

五月

儀方と書 [九雑組]五月五日すだうの紙ふ儀方の字と書、ゑと家の四方ふ粘つるゑと、其年蚊蠅と退く、

競駒 くの部競の条ふ出る

騎射 日の条ふ出る

中行事 歌合 五月五日豊楽院ふて昔ハ騎射と自御覧じけるあり、是を馬弓とゆふ天子群臣みちのやめのうちと冠アみふのけて節會の儀式ありゝ〻続命縷ちまひけるとゑ花ゆと奥あるとゑをそゑれ

祇園の神輿洗

晦日 紀事 五月晦日、祇園の社ふ詣で、各粽の葉を受て火災を拔ぐるを茅拔といふ、夜ふけて神輿洗あり、其式神輿三基、所謂素盞烏命・大政所と号す、西八條田堀少將井と号す、東龍王女合殿前と号す、大政所を御前と号す、神輿三基、神輿屋を出し、直ふ拜殿ふ入る、少將井の神輿三基ハ神輿屋より南門を出て、石の鳥居より松林を過ぎ、祇園町より目病の地藏堂の前を過ぎ、鴨川の辺ふ曝して、いやゝ河水ふ神輿を灌ぎ洗ふこと、神輿ハ、ひとつハ今その義なりといへども、曰きふまりそこを洗と称ぶ、後再び祇園町より西樓門ふ入り、二基の神輿と共ふ拜殿ふ安置ま、その供奉四条之居の役者、筆の先ふ提灯を張外面ふ各姓名を書し、高く是を擧く、祇園の町々も家毎ふ高く提灯を張る、又六月十四日条礼終りて後神輿三輿社頭ふ在ま、同く十八日の夜、二基の神輿ハ直ふ神輿屋ふ入る、少將井の神輿ハ今夜の式の如し、凡神輿三基黄衣の法師三人、各常ふ金銀花ふの部忍冬の条を見るべし、胡ま、と頂ゐて主宰ま、

瓜

時珍曰胡瓜張騫西域ふ使して種を得、故ふ胡瓜と名く、按ずるふ、拾遺録ニ云、隋の大業四年諱を避て胡瓜を改て黄瓜とす、正月三月種を下し、三月苗を生ず、蔓を引て葉を生ず、四五月黄瓜をひらき瓜を結ぶ、

王簪

和漢三才圖会 此者巣円く濶くして、末稿の擂干の形ふ似る、故ふ俗呼てきゝぐるしとい、五月花を開く 本草 時珍曰王簪、一名白鶴仙、共に花の象を以て名と命ま、人家栽て花草とす、二月苗を生して義と為ま、高さ尺ばかり、柔ある毫白茸の如し、其葉の大さ掌の如し、團くして尖あり、葉上の紋車前の葉の如し、青白色、須臾蕚六七月蕚を抽んづ、蕚の上ふ細葉あり、中ふ花蕊十数枝と出す、長さ二三寸、本ふふ末大あり、いまだ開ざる時、白玉の搔頭簪の形の如し、開く時微綻ぶ、

秬蒔

和漢三才圖会 按ずるふ、四出、中ふ黄ある蕊と吐き、頗香し、人ハ餅として無ふ食ふ、今ハ唯磨末とし、團子餅として賤民用ふ、

六月 祇園會

神社啓蒙 二十二社註式ニ云、皇六十四代円融院天七日、十四日、禄元年六月十四日、御霊会と始り、今歳ようこれを

行ふ 紀事 先吉日の朝、巳の刻、大鉾を六本、各四条通りと東洞院の西に出づることと渡るとの八六本の鉾、各称号あって、其中、長刀鉾、闇ととるに及ぶまで、毎年魁首たり、この鉾四条通りに、東の方の先に立ちふるまふて、此鉾行ざる時、次の鉾過ることあることなし、函谷鉾と号、二ともに洲濱鉾、或、放下鉾と称せ、ともに西の方の終りに立ちふるまふ、故にこの三本、闇ととる、及ぶまでその間に鶏鉾、菊水鉾、月鉾、三本、船鉾一本並大神山、飛天神山、古千山、太子山、山伏山、孟宗山、琴被山、白象天山、郭巨山、芦刈山、蟷螂山、笠鉾山、二本、花盛人山、木賊刈山、岩戸山、舟鉾、以上十七本、凡鉾一本、後山三本連行もぎの八角堂おいて取とるの闇のごとし、

相傳に長刀鉾の長刀は三条宗近の作なりと、民間、疱瘡と患ふるものこれを祈りて、病愈ときは、凡鉾毎に長さ十余丈、余下に車輪二又と結し、左右に大縄をつけて数十人これを引、その年役に従ふ小児、その上に乗り、首に宝冠をいただき、腰に羯鼓を繫き、躍りてこれを左右、侍立の小童、團扇を以てこれを揮揚す、笛、太鼓、木の物に、てこれを拍ち、凡鉾毎に一本一箇うしろうめくこの大ふる物、車にのせてこれを引、京極を下り、五条松原通りより、各本所に還る、神輿旅所に至て、神を假宮に遷ること四日、巳の刻ばかりに山渡る、第一 辨慶山、その次、鈴鹿山、観音山、八幡山、役行者山、黒主山、浄明山、鯉山、以上八本、昨日とる所の闇の次第に因てこれを渡す、才九、鷹野山、才十、船鉾、闇ととるに及ぶ、此鉾、三条通、西の終りに立ちふるまふ、西に三条より東に京極を歴、四条通りを過て、各本所に還る、同日午の刻ばかりに三社の神を神輿に参し、旅所に遷す、四条通りの西を歴て、大宮通御供町に至り、三社の神輿を安置し、御供を献じ終りて後、東の方三条通りを過、京極を歴、四条通りより本山に入る、両日、前後の祭式古例あるべからず、

祇園臨時の祭

十五日 諸神根元抄 天延三年四月、融院の御宇、六月十五日始て走馬を奉らる、勅祭、東遊、御幣、本の使左少将藤原理兼、左右御馬五疋あり、左右近衛の官人供奉、この後中絶、崇徳院天治以後毎年相続、慈覚大師傳 四 慈覚大師、天慶年中、二年甲戌、感心院と以て師に附す、三十二社註式 天慶年中、祇園の社に以て日吉の末社とす、○この臨時祭、慈覚

大師寺務の星年もゞめて行くる今猶祇園宮殿の傍ふ大師の尊像を置、**北野九度詣**

九日 [神社考] 北野の聖廛ハ天慶三年七月十六日右京七条坊の婢文子ふ託して、右京の馬場ふ棲んと欲ス、其女甚ゞ賤して宮構そなふるあくまで家の側ふ樹を天暦元年六月九日始て北野ふ移ス、[滑稽雑談] 當世ふ至て毎歳今日九度詣と称して、南門の外弁慶松の邊、或東向観音の堂前より、神前まで往返九度して、神拜とゝもせり、是聖廛此地ふ遷座の日なるよふ

木耳取 時珍曰木耳朽木の上ふ生より、九度八九日の義を用ふゆゑ、

も枝葉もく、濕熱の氣ふ生る所、木耳木蛾とふ○按ずるふ此物多く梅雨の前後ふ生ず、六月ふ至て木耳堅く備る、此時取ならし、

麒麟草 漢名未詳高さ尺ばかり、莖葉景天ふ似て小く、其葉淺緑みして鋸齒ありの、莖の端ふ花と生ず、花ゆゑ景天ふ似て色黄なり、夏ふ秋ふ至て其花猶あり、景天の別種ゝ、

金瓜 濃州兎原郡田辺村小路村より

銀瓜 参州の産其色白銀の如し、

ゆ

四月

雪見草 卯の花の異名なり [藏王が見草名也] 聖よ[illegible]袖なれし雪つけぬるてむ、

鴨足草 [本草綱目] 蠅麿 虎耳草 蝕濕の處ふ生ず人状の如し、茎の大さ銭の狀の如し、初生小葉の葉及虎の耳の形ふ似たり、夏ふ花をひらく淡紅色

兼三夏物

内衣 和名鈔温室云菜浴の法、七物其七ツと内衣とゝ、和名由加多比良、論語註明衣ハ布を以て沐浴の衣とす、○今ハ夏日平服ゝ所の木布なり以て内衣と云、

五月百合 時珍曰百合やゝハゆのゝびらの畧ゝ、根、衆瓣と以て合成ゝ或ハ云百合病を治ゝ故ふ名く其葉短くして濶く微竹の葉ふ似たり白花四垂の者百合、○[illegible]百合 鬼百合 袂百合 黒百合 博多百合 車百合 透百合 鹿の子百合ふの製品あり、各其頭字の部ふ入べし、

六月夕被 ふの部夏被白雨の条ふ出

月令 此月土潤溽暑大雨時行 夏字和訓 五色線二五夏の雨こゝ錦雨といふ 御今 白雨と書ここハ天満の森由臣法橋山谷の詩ふありと申されしうだ九執筆の

顔

時書始し文字と 離騒註 凍雨ハ夏天の暴雨 和漢三才画会 彼岸の中ふ種と下し立夏前後ふ種と移し五六月正白花と云らく日午ハ凋こ暮ふ盛こ故ふ名顔と称ス賞と結ぶ早晩の二種あり ○ 夕顔や秋ハいろくのこくべこうあ 翁

め 四月

冥途の鳥

三魂と縛めて關の柄下ふ至るふ三の鳥 樓掌る一と無常鳥と名づく二と枝目鳥と名づく我汝ゲ舊里ふ化して鸕鷀鳥とあり怪語と示し別都頓置 壽と鳴ん我汝ゲ舊里ふ化して烏鳥とあり怪語と示し阿和薩迦とあらん 倭名抄 鸕鷀和名保度々 本朝 蕪

三夏物

めふ見ぬ鳥

蝶蝶とい 詩歌未考

鮒

毛吹草 和州南都飯蘇 ○世俗まゝ夏月まゝを賞せ〻其製多しとゝも京の六條南都の製

飯

ふ限る

め 四月

水屋の能

四日五日 紀事 南都 水屋川の南ふ水屋の社あり祭る所の神二座素盞烏尊稲田姫あり云云 此祭ハ伏見院の御宇疫病流行ふよりて始めて行ひ〻ハ神楽ホあり〻ふ也今ハ申楽四番あり地人能藝を施す四月四日五日あり

御形の日

の条ふるべし

三月過鳥

その異名 朗恒抄 四月五月六月ぞうあまたハふつきすぎるこゝの○さみだれの雲間と鳴てもどるくわかもびの良のふつきもこ鳥

都草

大和本草 細草ふ四月黄花と云し葉ふ似て三ふわ〻る仙臺荻の如く花の形豌豆の花ふ似て色よして小ふ〻實ハ莢ありて両々相對す

蜜柑花

本草綱目 樹の高さ丈餘其葉両頭ふ大り緑色ふて面光る四月小花とひらく色白うして甚ぐ香し 大和本草 其花を花橘と古哥ふよ名て

兼三夏物

短夜

夏 み

明安一月令廣義 夏至の節晝六十一刻三十分夜三十八刻三十分○古今 夏の夜の子ろくとはほとゝぎすもなく一声ふ明るきのみ、貫之、

○寐入らぬふ飯焚家と明安き、冬松、

水鯕 和漢三才圖会

惠曾魚正字未詳、按ずるふ鯷ふ類して、灰色ふ黄ふ帶、頭畧蝮蛇の如し、鱗硬く鬣起し、下ふ碧の線文三條あり、大サ五六寸より尺半ふ至る、

糸切歯 水鯕水鱧此節と賞もひらきて潮ふひ〻上夜と越て生捕〻用ふ朝ふ漬ると其儘用ると、畿内ふて

水鱧 和漢三才

地流〻清流〻とつふごとと水鯕とゝふ、

鼠会 海鰻 慈鰻鱔 狗魚 和名波無、俗ニ波毛、唐音の略

ゑ、俗ふ鱧の字を用ふるい甚ご非あり、

糸切歯 五月の頃ハ潮も自然と多〻此時磯辺へよると網ふて取るゝこと水鱧とつゝゝご、又一説ふ鯕鱧の両種と大坂より大和へ送るふ桶の水と湛へ魚を漬る大和川と舟ふて引のぼる大和の土人鯕と才一ふ賞し鯛よりも勝ふりとも彼水ふ浸し大和へ送る

蚯蚓出

月令 孟夏月 螻蟈鳴蚯蚓出 本草綱目

土龍 地龍子 歌女おの諸名あり○時珍曰術家ニ云蚓雲と起もべ〻文陰晴と知る故ふ土龍、地龍子の名あり、其鳴と長吟、

海松

故ニ哥女とつふ、

崔禹錫食經 水松狀松の如くふ

て業ふ〻、

土佐日記 おなじつのれくゝハ子の日うのまねらぐうこ松とぐふゆあ〻ものを、

源氏葵の巻 むかつきて千ひろの底のふるさのゆひ

ゆくをもハるもこのこゝそをんし、源氏

五月 さつ

すまのし

水馬虫ことす、

通俗志 糸切歯 年浪草 ホふつもまゝハ

ゝも、青藍按ずるふ今も關東ふてい蚊虫とゝづすゆし

ゝふつゞゆくゝもこの説ふるとうゝんう猶まの部蚊虫の

糸すの部水馬虫の糸たゝ

ひふのよう〻〻ゝるべし、

水鳥の巣 浮巣

字彙 鳥穴ふあると巢といひ、水ふ浮ると巢ゝとつふ、本

朝食鑑 菰の集解ふ云菰の葉、蒲葦ふ類して蔓茂す、夏月水鳥此中ふ宿ゝゝ以て乳もゝ

六月 御手洗詣 十九日よ

つ。晦日まで、山城国愛宕郡、紀或ハ只洲ふ作る、下鴨紀の納涼の社こまと紀の宮とハ蓋地名よりて是と称ス社の東ふ御手洗川あり、その水清冷ふて溢を流る是祓と修る七瀬の一く、諸人此水に臨て暑と避く。[紀事]下鴨の社司、川合の社の前、住吉の東の川辺ふかいそ六月祓と修ス十九日より晦日ふ至つて、諸人糸詣し、納涼の遊びとなるを、林間ふ假ふ茶店と設け、酒食及び和多加の鮎、鯉のさ〜身、鰻の樺焼、真桑瓜、林檎ホの果と賣、或ハ竹串と以小團子、数々と貫き焼てこれと賣る是と御手洗團子とハ、

御祓

[神代巻]諸の神、罪と素盞烏尊ふ帰て、抖之ふ千坐の置戸と以て、遂ふ促徴髮と拔、爪と拔て、是を贖ハ、亦曰其手足の爪と拔て、是を贖ふ已ふ罪と贖ハ、亦曰其手足の爪と拔て、是を贖ふ已ふして竟ふ逐降ま、云云故ふ夏祓とハ、

御祓川

御祓とも、川古より七瀬あり、[拾芥抄]川合、耳敏川、東の瀧、松ヶ崎、石影、西の瀧、大井川、

道饗祭

晦日[公事根源]是ハ疫神の祭なり、毎年ふ必行ひべきなり、近ごろハ絶て侍るふ、鬼魅の他方ふ京路ふ入さらしを為ふ路上ふ供物とそなへて祭る、鎮火道饗の祭と、四角四境の祭と、申ス、

水の内合

[通俗志]ふ、ふるきとい、ふ車賤の者、夏日炎暑ふ堪ずして、水練のまねびをして大勢集り、其真ふ乗じ左右ふ、まて互ふ水とあびせ、のけて、勝負と爭ふ、

名

荷笋

蘇頌曰、蘘荷春初て葉と生し、甘美ふ以て、根茎ふ似て、其葉冬枯る、根蘊して、堪ふ用ふべきなり、秋の芙蓉ハ蓮ふ咲て、用てこれを物ふハ、

水芙蓉

[貞享式]此名ハ新撰養集ふ、芙蓉花、芙蓉と好む木の下ふ在て生るもの花美ス、和漢とも、秋の部ふ入るとも、水芙蓉と、い、時、漢ふ蓮の一名と、倭ふハ、和らげて水芙蓉と讀ども、芙蓉ふ水を結びとう、部るとい、詞とそ、こハ決て、こ夏ふ、ちるとハ云言とそ、て夏の句とも、こ、ろ、証句とそ、

水葵

[さくらせ]本名蓉、又見葵ハ、尊ふ似て夏黄花とゆらく、又白花のあり、

水中ふ生立て潔し人家近き池ふを生ぜず依て見られる人稀ふ、こゐぎさと水菱とおほえこる輩ふ浮

薔ハ秋ふ入碧花ふり混ぞべらびく、

四月 白重

桃花葉葉 白重 春夏

白茎平絹更衣の時上下ふこまと着、**薔薇** 時珍曰営實 薔薇 此草蔓柔ふ藪き墻ふ依て

授て生ず故ふ墻薔と名く、其莖棘刺多く其子簇て生じ、営星の如し故ふこまと営實と名く、又曰春嬢き蘂と抽んて、既ふ長そうとき八叢と成す、蔓ふ似て莖硬く刺多し、ふき葉尖て薄く細なる齒あり、四五月花さく、四出、黄心白色、粉紅の二色あり、實と結び簇て成る、生ハ青く熟すれバ紅あり、人家ふ栽玩ぶもの、莖組葉大ふ延長すること数丈、花も又厚く大ふ白黄紅紫の数色、百葉ハ出、六出のものあり、大和本草 野薔薇花白く單く、野ふ多し、

新樹 この部若葉の条ふ出す、

茂草 元帝纂要 夏草と茂草といひ木を蔚林茂林とふ、

梭櫚の花 時珍曰三月末端茎中ふ於て、数の黄苞と出ス苞中に鯉子ガ如し是

ハり列とるハ、乃花と孕めるもの、狀魚腹の鯉子ガ如し是と梭魚ふ梭笋とハ漸く長じ、苞と出すとき、花穂と成て黄白色實と結び累々として大さ豆のごとし、

芍藥 蘇頌曰芍藥 春芽と生じ、

叢とふす、莖の上ふ三枝五葉、牡丹ふ似て狹く長し、一二尺夏のもじめ花とひらく、紅白紫の数種あり、子と結ふ牡丹の子ふ似て小し、秋時根と採る、○時珍曰芍藥ハ

蝶花 和漢三才圖会 鳥扇 是今云胡蝶

胡

羊蹄根 きの部羊蹄花の条ふ註す、

白及

四手孔

ふ名と也、○董子曰芍藥一名將離、別んとする時ふ贈る、○花の宰相、えびす藥、えびす草、貝好草、ホの異名あり、其頭假字の部ふわくらて註しあり、

花あり、四月花とひらく、狀鳶尾の花ふ似て小し、灰白色黄の紋あり、實と結ぶ、一種小著莪あり、小ふして長六七寸、石菖の葉の輩のごとく、花もまた小し、浅紫畧菖蒲の花ふ似て小く美し、愛ス、し、けの部慧の

田長　ほとゝぎすの異名あり、或書にいふ此鳥農業と催さんとゝめ、四五月のころ来る田を作らざる則作る時過ぎハ熟せざると啼五五田長の名是ふのこと

○越谷吾山いハく、諸鳥皆三指只杜鵑のみ四指あり、その樹上ふ宿るゝときハ二指前ゝ向ひ二指後ふむけ四指田長ハ是とりて名つく或ハ死出とゝもの非〉古今

いくさくの田をつくれどもほとゝぎすもゝでの田長と朝れくゝふ、藤原敏行

蜀魂　ほとゝぎすの異名

ゝり蜀王本紀望帝其臣鼈靈が妻と淫しこの位を禪ゝて亡去ぬ時ふ子規ふ、故ふ蜀人杜鵑の帝と見て望帝と

謝豹　五雜組蟲ふ差とゝして死ゝ人とこれバ足悲む、と以て面と覆ふ羞る状のごゝ、此虫杜鵑の声と聞バ則死ぬ故ふ

賤鳥　ほとゝぎすの異名あり、○名ふものゝ山里ふあく杜鵑を又謝豹といふ、

鹿の袋角　和漢三才圖会鹿茸俗ふいふ袋角、茸字ゝ部ふ詳ふ、

草の生る良俗ふ以て草冠の字とゝ鹿の角初て生ぜ、未開うざる草に相似ゝり故ふ然ゝ長さ二三寸尖らむ堅ゝらむ本草云鼻を嗅べゝらむ小白虫あり、ことゝと視れども見えぬ人の鼻ふ入て頻とゝくゝ嚏を

兼三夏物

新茶　古茶　紀事此月茶と製し了て諸方の人壺と携へ新茶を領納し然後ふ壺と山谷清冷の地ふ寄て盛暑土用の暑湿と避く洛外愛宕山宜しゝ、九茶と製ゝふ前後の次第あり故ふ摘茶の時焙炉の時擇茶の時こゝ〇古茶と新茶ふ對ゝるの名新古ゝゝ夏季ゝ、

紙帳　紙をもて作ゝる故帳あり、貧しき者是をもて蚊と避く

紙帳賣　用捨箱飛鳥川云むし夏近くゝるゝバ紙帳ゝ冬ふゝるゝバ紙衾とゝふ物と商ふゝる人

今ハゝくゝ〇此飛鳥川ハ享保出生の老人の筆記ゝ

ゝバ元文寛保の頃ゝゝて八此商人来ゝてゝゝゝ〇向の岡

蠶烏賊　南越志其性烏と嗜ゝ飼ゝ水上ふ浮ぶ烏是と見て死せりゝゝとゝ啄ゝ乃ゝ

蛇鮨　毛吏草越中の松皮鮨俗蛇の鮨といふ龍ふ似ゝ故ゝ

宝八年刻　夕立ゝゝるゝ中ゝゝと紙帳賣、立墨

取て水ふ入ることと食ふ因て烏賊と名づくいふこころハ
烏と賊害へべし【こくうせき】夏季ふ用ふるハ遠土山中
ハ海濱ふ遠き田舍のことあり江ふ大坂ふ繁花ふ
ハ生鳥賊春より四五月ふ至て最中ありて塩烏賊と用
ふることあり【新麥】【朝食鑑】早きものハ三四月熟し
晩きものハ五六月熟ス是新麥の候
【潛確類書】水中ふ生
【和名抄】蓴 和名沼奈波
す巢息葵ふ似て水上ふ浮ふ花黄白子
紫色三月より八月ふ至て莖細く叉の股の如し黄赤色
短長水ふ随て深浅あり名づけて蒸菜といふ蒸菜ふ堪
ず味甘く寒あり十月漸く【紫蘇】時珍曰蘇ハ紫
粗硬し十一月萠泥中ふあり【蝶蝦】蚊の
ふ似ふ音酥舒
暢ふ蘇の性舒暢して氣と行て血と
和ることと蘇といふ紫と云ハ白蘇と名づ
葉とろふ虫あり【傳燈録】仰山洪恩禪師ふ問ふ如
何ゝて見性を得ん師の云ふ蟭螟虫の蚊の睫ふ
ありて巢と
作るがごとし

五月

續命縷、朱索、條

達ちの部長命縷の條下ふるべし

菖蒲刀

黒川道祐曰端午ふ
菖蒲刀といふ其形の相似ることと以て高物ふ食べてこれ
用ふる處の木刀或ハ
と称兒輩勝負ふ横ふ端午石戰の戯の後ふ多くこの
刀と以て相戰ふこれと菖蒲切といふ菖蒲と申水
勝負と和音相近し戰勝負の義寓ふるふ不水
【金門記】重五の日午の時酉ある時念ふ一竿の竹と破
まバ竹節の間ふ必神水あり瀝と取て癩の肝と以て
れバ心腹の積聚と治ス【紀暦撮要】【新宮祭】音
今日西ふふときハ來年大ふ熟ス所神新羅明神
三井寺の山中ふ於てこれと訓ふ祭
ふ【元亨釈書】新羅明神ハ天安二年日珍師者渡大師船ふ乗
て唐ふ帰る海中ふ老翁船ふ現て曰我ハ是新羅國
の神誓て師の教法と護持し慈氏の下生ふ至る語て
こえて三井寺山下の土人ふ告て新宮祭といふ○大
津所々祭多きこ故ふこれと關祭と語ふ
祭と称ふるゆへハ貴船明神の祭ふ貴船の祭羅明
神の祭ふ同ふ逢坂山ふありし其説迂ふ異へ摘考ふべし

賑給 公事根源 こまこハいやしき民ハ米塩ふぢと給ふ
京中の條理小路を分て接花達使承て之を是と
引米塩の勘文を申て の侍る 大臣殿ハ いきて是を
さゞむ 欽明天皇の御宇 このうち ハ ○貧窮の者給ふ
し 禮記月令 ハも侍る ふ也 西宮記 東の手ハ愛宕 諸
寺北の手ハ右近の馬場西の手ハ右兵衛の馬場

鳥毛と草 はの部羽接 **麥門冬の花**
鳥の条に註す

大和本草 葉厚く五月ハ莖立て頭ハ穗の如く 下
長く連てとる紫花といらきて實ある秋熟す

毛の花 大和本草 繡線菊 小木ふり 最生ず 臘月
早く萠生ス四月花をひらく おもまり開き
て盛久し 真紅あり 淡紅あり 愛す

越瓜 時珍曰 越瓜地と
べし 葉ハきゝうりに似 ふ 漢名未詳
以名くるゆゑ俗ハ稍瓜と名つく 南人菜花と呼ぶ 三
月種と下し苗と生し地ハ就て蔓を引 青葉黄花夏
秋の間ハ

新茄和 世人茄子の料和 豆豆の棒和といふ
實を結ぶ へう 其形狀料ハ似棒ハ似くる故

名とも ちんさうこん

と 五音相通ふ り、

白ぢえ くの部黒ぢえ

の条ハ註す

六月

勝曼荼 朔日 元亨釈書 推古天皇十四年秋七月
太子聖御ハ 徳御ハ 對して勝曼經を講
太子曰吾昔勝曼夫人なる時釈迦世尊此經を說ハ故
ふ吾ハ此經を講ぜ講已て蓮花と雨いる 大サ三尺ヲ
義疏を製して世ふ傳ふ ○當寺勝曼院の ハ 太子此道
場ふ於て又此經を講じ給ふ故ハ寺号 ふ 摂州四天
王寺の西門西北百歩 ハ 本尊愛
深明王毎年六月朔日開帳 と愛深 ハ

神今食 江次第 六月十一日神今食 其式 行幸あるときハ中
和院 行幸 ハ 神祇官ふ於て行
ハ 公事根源 神今

志渡寺祭 十五日 ○ 贊州 十七日迄 寒河
食年ふ両度 ハ り
郡補陀洛山清光院志度寺 真宗 真言 緣記 本尊十一面觀
世音是補陀洛界觀音の御直作 ハ 本尊 御
衣木 継躰天皇 年近江國高島郡三尾崎山白蓮華
谷ふ流出湖水ふ漂ふ 七十年 崇峻天皇御宇湖

水より又宇治川に流出山城國淀の津に止ること三ケ月
夫より海中に流出漂着すること數十年、推古天皇三十三
年、當浦の高嶋と云小島の磯辺に漂ふ蘭を見て引揚げ日月を經
浜といへる者、彼木に瑞光あるを見て引揚げ日月を經
觀音大士童子と化現し、十一面の尊像を刻み、暮に
一子の刻に開眼等、終に寺號に云、この堂、藥
原不比等、淡海公當浦の海人に契を結び給ひ不背の珠と
龍宮城より返し送る、海人の死躰を葬り
し所を故に志渡寺といへり、死渡寺といへ、天武天皇十
一年辛巳その暮に精舍を建立し、死渡道場と名づく、抑
志渡祭は、房前大臣、天平九年丁丑四月十七日薨ぜ、房
前公當浦に下り給ふ時、庶民に慈悲をなす、王に故に
庶民この恩沢を報ぜん為、六月十五日より十七日まで三
日夜の間、これ海人の墓に於て水祭をなす、此日諸人交
易して市をなすこと祭といへり、房前大臣の薨去、
四月なれども農業の障ある故、六月に祭る、今日四
月三警固の季夏土潤ひ溽して暑し、注云
義あり

溽暑 月令 季夏土潤ひ溽して暑し、注云 溽は濕なり、土の氣潤へば故に蒸鬱

として濕

清水 說文 岩間に出る水、清澈る水、石間に流るる水 御傘 清水は雑く結ぶといへども夏之堰を夏之堰 貞享式 清水は

ひもぶといへる詞ども、古抄に夏之堰結ぶの詞及ば
涼と称もまば其詞ふと及ばざらん、堰結ぶの詞に及ば
も清水とどりと夏茶子とせり、例の蕉門の新撰なるべ
し、

白梵天 和州田村の梵天祭 和漢三才 種南都にもこれあり

將醬油造

醬会 醬油俗名比之保本邦の俗油の字と加入醬油は本草に載る豆油なり

ひ 四月

翡翠の簾 簾の條注、あの部書

平野祭

此祭今絶たり、祭る神五座なり、北野天神の西にあり、貞
觀元年十一月九日始て祭祀あり、寛弘元年四月十日臨時の
祭あり、

廣瀬祭、龍田祭 四日○廣瀬の社は大和國廣瀬郡河合

村にあり、○龍田の社は同國平群郡龍田にあり、公事根
源 祭の日、廢務あり、年に二度行らる、使は前日に入

忌風神の祭といふ是ふり、[増山の井]廣瀬ハ大忌の神、龍田ハ風神なり、風水の難を除き豊年の祈ふ公こゝ祭ふ

日吉祭

山王祭ふり、さの部こゝ見し、

美人草

[名花譜]花四辯色艷麗要ふ類して小ふり、[古文前集]曾子固ふ虞美人草の詩の頭注ふ云項王亡滅して虞姬自刎ず其墓の上の草と人呼て美人草こゝ同く詩ふ云青血化為原上草〇一種虞美人草といふ者あり異種こゝ

兼三夏物

單物

[釈名]衣の裏ふ日こゝ單衣こゝ

日傘

夏日日と禦く傘白紙或ハ青紙こゝ以て張骨の油こゝ用ひこゝ日傘こゝ

冷麥

[青箱雜記]湯餅温麺こゝ麺こゝ以食こゝ煮こゝ煮こゝ昔湯餅こゝ[貞享式]冷麥冷汁この二品ハ京家の式目ふ多く八月の季こゝ煮こゝ煮こゝ冷の字の惑ふ名こゝ夏ハ涼こゝ好こゝ秋ハ冷こゝ悪む天地自然の道理こゝて此等ハ夏こゝ決こゝ

冷汁

煮冷夏月羹こゝ調和して其器こゝ冷水ふ浸し氷こゝ

干鱧

[和漢三才図会]風海鱧、海鱧ハ頭相聯て白鯊ふ作り形片板の如きこゝ夏秋こゝ賞こゝ鐵こゝ刻こゝ酒醤ふ和して膾ふ

干河豚

[同上]名護屋鰒ふり甘黄赤こゝ代ふ、

蛭

[同上]蛭ハ水中の濕こゝして白點あり、辣鬼ふく腹白し味美ふ皮を惟皮こゝ剥てこゝ乾し、皮鰒こゝ名づく、夏月臘こゝて是こゝ食ふ生ぎこゝまく海帶昆布こゝ久こゝ雨水ふ浸こゝ共ふ小こゝ仙こゝて蛭こゝふる牡石灰食塩こゝ忌む試ふ塩こゝ蛭こゝ點れこゝ

蟾蜍

蟇頭曰蟾蜍多く人家こゝ下こゝ濕盤縮こゝ死こゝ處ふ在り形大きく背上ふ疣磊多くし行こゝ極めこゝ遲く緩く跳躍こゝ鳴く

抱朴子

蟾蜍十歳頭上ふ角あり、腹こゝ下こゝ丹書こゝ図芝こゝ名づくふ山精こゝ食ふ人こゝ食ふこゝ得れこゝ仙こゝ成こゝ術家こゝ用ひこゝ霧こゝ起こゝ雨こゝ祈り兵こゝ辟け、縛こゝ解く今こゝ技ある者蟾こゝ聚こゝ蠱こゝ作こゝ使こゝ

晝寢

[笈日記]ひやこゝ壁こゝ

こゝて昼寝ハ的翁、支考評曰此句、いふ風やこゝ翁の申こゝれしこゝハ是ハ只残暑こゝ承引こゝ候へかるこゝ

故屋の釣手ゐどやらまくおなじらおのへべさこをおの
ひねもす入ゐらんと申侍るハ此謎、文考ふるこれこう
こと笑ひてのこ

五月

辟兵繒 ちの部長命縷の条こゑ

鬬百草 劉全嘉話 唐の中宗の朝安樂公主端午ふ百草と鬬ハし其物の廣きと欲し
驛驛してこれを取らそむ又他の為ふ得られんことを恐
て其餘ことと剪弄〇歐陽公鬬草詩ニ云共鬬今朝勝
盆稽百草香 ひとつとせ九日 さの部左道の真 未央 手番の条ふ注も

柳 園史 金然桃その莖幹二三尺叢生て其葉柳ふ
似て梅雨ふる時黄花とひらく桃ふ似て葉長くし
て金糸の如し、 姫百合 時珍曰山丹其葉長くして狹尖
て柳の葉の如し紅花六瓣四ふ垂
ざる者山丹ふて四月花と開く根少ふして瓣少ふし、 菱の花 時珍曰芰一名
蔆其葉ふ散故ふ字文ふ從くその角稜峭し故ふこれと菱とい三
月莫を生して逐ひ葉水上ふ浮ぶ前中して尖あり光面鏡
の如し葉の下の莖ふ股あり蝦股のごとし一莖一葉兩々相
差ひて蝶の翅の如し五月小白花をひらく日ふ背きて畫
合一宵ふ凋む月小ひ時珍曰移ハ乃結ふるの
隨ひて輙移ま、 **移時** 孫山東河南ふ亦五月ふ
と種、 **枇杷** 廣志 枇杷ハ冬華さくさ實黄ふて鷄子の如
書ふ云其木隱密婆娑として愛ふべし西時周ふ葉
驢耳の形ふ似て毛あり盛冬白花とひらき三四月ふ至て
實とふて、毬と作して黄梅の如し、 **六月** 氷室
皮内甚ふ薄く味甘く核小栗の如し、
日本紀 仁德天皇六十二年五月額田の大中彦皇子闘鷄
ふ獵ふ時ふ皇子山上より望て野中ふ瞻王ふ物あり其
形廬の如し仍て使者ふ遣ハして視せしむ還り来りて曰
窟あり因て闘鷄稲置大山主と呼んでこれを問ふ曰ふ野
中ふあり何の窟ぞ答へて曰ふ氷室あり中臣皇子命の氷と
將来ふて御所ふ献ふ天皇ふ獻ふ是より以後毎ハ
季冬ふ當て必氷を藏め、春分の始ふ至て氷を散る **氷室御調** 公事根源 三
水司四月一日

ようで九月の月齡まひ

で是とゝ申てまつる

と八熱月まるとも御膳ゆを氷と用るとい八氷水と八

源氏物語ゆもゝえとり註云氷水〉と云〈枕草紙いとし

くおつきひる中ふいゝるゝわざとせん扇の風もぬる〻ひ

ゝづふ手とひゝ〻て〻〇室の氷のゝけるとひゝふと云

氷室の雪

氷室の雪と八氷室ふか氷室の櫻

青藍桜ゝるふ氷室作る山のいと寒ゝ〻八季夏ゝ暑氣

をうけて漸く咲そゝる櫻とゝくゝるべ〻〻

千載集小野

の氷室山のゝこふ殘ての櫻ゝゝひけゝる時「下ゝゝゝゝ氷室の

山のおゝざゝゝきえのゝゝ雪ゝとゝゝる仲正「奥

の細道芭蕉翁紀行六月九日湯殿山ふ登ゝゝゝる条ふ云腰ゝ

けてゝゝゝゝ

と名く樹身光滑く高さ丈餘花瓣紫皺蹴開蕚赤き
莖葉相對す四五月始て花さく開謝稍遲して六七月に至る
べし 三才畫会 紫薇俗人百日紅と名く其さま極くいきい
自ら動故怕痒花と名く 大和本草 紫薇花と以て百日紅と
也又猿滑と長 **鼓子花** 時珍曰其花瓣とゝのさま狀軍中に
吹所の鼓子のごとし故に鼓子花 和漢三才畫会 此花牽牛花の如くして紫紅色日
の名あり
午に盛んなれども且暑に萎む故に俗牽牛花と以朝顏と
称すこれに葵して **未草** 本草に時珍曰葵公路花と録
此を昼顏と名く 云睡蓮なり萍蓬草のなり
く其美荷の如くして大なり其花葉に布て數重夏の昼
に當りて花をひらく花は萎むこと水に入畫示すこと出す
○和俗ひつゝ草と称す上の乾のごとく米の **射干**
時うり花萎む故にいつゝ江湖に多し
ふきくかの **瓠花** 時珍曰壺盧數種あり名狀一ならず
部こるぐし 其實一類各色あり並に正二月と以て
種を下し苗を生ず蔓を引て延緣す其葉冬に枯る
似て稍円にして柔毛あり嫩きとき食ふべし故に詩に云

番々瓠葉采采之事は之五六月白花をひらく實と結ぶこと白色
大小長短各數種色あり大なる者は壺盧と同く小なる者は
瓢簞に似て微有く皺あ
浮ぶへく笙として以樂を奏べし **苜蓿** 和漢三才畫会 是蘊
つゝ六月細花をひらき穗をなす子扁にして光り黑く鷄頭子
に似て人莖葉を採て蔬とす赤莧は莖葉赤紫色高き
の三四尺畧雁來紅に似て美し五色莧赤十葉錦に似て
共に園に種て愛す 萋續輪 黎莧吐二種夏茶に茶 **姫瓜** 和漢三才畫会 姫瓜は俗称菜瓜五六月に成る
さ二寸ばかり圓にして淺青色味苦く食ふべからず熟
るときは稍黃微甘にして食ふに堪ず 雍州府志 九
條の田間より出る大さ梨のごとく其色至て白し故に姫と以て
くるとこ称す女兒の瓜と求て用し莖ごとに白粉と其間に
傳聖と以て髮髮眉目口鼻と畫き水引と以て其莖に結
ひ提携て玩具とす 續養蠶集 **將酒造** 時珍曰大豆の將酒
姫瓜や袖に入てもかもうるを至曉 按ずるに劉熙の釋
名に云醬は將なり能く食物の毒を制す
將の暴惡を平らぐ如し ○製法畧之 **引飯** 飯の糞也

冷水賣

江戸の街頭ふ手桶一荷とおろし炎暑ふ冷水とうる

孟夏旬

扇と賜扇の拜

年中行事歌合 夏冬季あらこまる

始ふ臣下ふ御酒とらしめ政ことこと

四月

杜本祭

上の申 ○河内國安宿郡國分村祭ふ神二座齋式人神、經津主の命をして香取大明神是なり、〔公事根源〕杜本祭四月上申 日ノ神社河内國ふあり、午の日使ふ、仁和五年四月ふ祭初る、〔河内志〕杜本の神社ハいまハ古市郡駒ヶ谷村ふ坐ス式ふ安宿郡ふ属ス、あれども、一向その所をまず、こ駒ヶ谷村と國分村と領ス、その故ふ或人云国分村火の谷と申ところと當時杜本の宮と唱へ来る、古代ハ杜本千軒ありて坊舎千軒あり、勅使参向ふ、しかの甲傳ふ、その近辺土中ふ、古毛と折々掘出ふ藤のうちはとひ春ハ花咲くまで常ふらぬ木立也名神木と申傳るのところ、四五十年以前山田の日蔭とるもと以て山の持めし善九郎と云者、件の樟と伐ふ斧ハ善九郎ふ家のうち柄ばかり残り俄ふ山一面ふ焼出件の斧ハ善九郎ふ家のうち飛来る、程なく善九郎ふ妻病死ス火の谷明神の影向ふこの必ずるあやと村中騒動して、こうりつ小祠と建て神楽と奏し神慮と慰め奉るこの崇りふ、杜本の宮の事、年繋ぎ来るの所善九郎方ふ古き書物の證ともきけり、件の善九郎やこの節次弟に死果ぬ、やく九歳の孫一人残まり、よりて親族どもうち寄書物穿鑿ス、こう出しこうとこうこうその木と伐ふやとうまこうるもの、末孫今ふ明神と異名と呼来るより近年国分村の枝郷ひろう所ふ処ふ信仰し奉る、小社の上ふ覆ひともつ、ひ九月九日御酒燈明と捧げて祭るこ、○巡喜式ふ杜本祭夏四月冬十月並ニ上の申の日、ことと祭るこ、こえこう、いくさま古き神社ふ今考ふへき物ふ、善九郎より取出せる筆記いうふと事う記ありけん、見ま

諸蔓

かの部加茂祭の条ニ出

文字摺花

四五月ニ花をひらく紅白色花連なりて小〻蕊ニ十餘つらなりひらく榮蘋のごとし園ニ植て賞翫ス

五月 ところひ草 或人云紫ごと

證ニ未考

藻苅 藻舟 藻の花 時珍曰藻ハ水草の文あるなり潔淨潔浴するごとし故ニ藻と名ク三種あり葉の長さ二三寸兩〻相對ス即馬藻ノ葉細ク絲及ひ臭の鰓の狀の如クニして節々ニ連て生ず即水藻ノ俗ニ鰓草と名ク

和漢三才圖会 時藻 水藻 和毛

毛一日毛波海人船ニ乘て出て繩を以て腰ニ繫ぎ水ニ没てこれを苅取て田ニ投入て養ふ

餅梅

名義未詳梅子ハ梅雨の時熟ス其肉黄熟して更ニ萃なり液多きなり疑らくハ是餅梅ノ俗果穀の類の粘るものを呼で餅ス此をいふ

揉瓜

越瓜胡瓜ともニ縱ニ切劈横ニ割て塩を攀て揉て洗ひ水を去て醋ニ和して食ふ

廿 四月 千團子 日

○一本ニ千誕子ニ作る江州三井寺の鬼子母神ハ今日諸人參詣ス此神一千の子ありと以て享ス餅一千と供ス故ニ千誕子と云

石蒜 一名いもの部

團子といふ

五月 赤靈符

抱朴子曰或人共ニ赤靈符と作り心前ニ著

蟬 初蟬 格物 空蟬 論蟬

五月五日を以て赤靈符と作り心前ニ著ク兩翼家長くして腋の下にあり或ハ以爲口あり腸を以て爲者ハ種類多し枚舉ス遑あらず異之○空蟬をこの蟬とものひ又ものけくるといふこと古のことも多し

石竹 ふの部撫子

栴檀 の条ニ注す

花楝 くおの部

叡脊ある人瘦根密即高サ尺余の

石菖

時珍曰石菖水石の間ニ生ス果ふるあり九ハ石菖蒲ハ人家砂を以て石ニ栽ること一年春ニ至て剪洗ス愈剪ハ愈細ニ高サ四五寸葉韮の如く根匙の柄の如し紐き者亦石菖蒲ハ其しきと九ハ根の三寸二三分葉の長さ寸ばかりなること錢蒲と云ハ是ふり按ふるに雁仙神隱書ニ云石菖蒲一盆と凡上ニ置夜の間書と視る時煙と收て目と害ス

六月

施米 公事根源 施米東山西山北山をごりの所の山寺ふ
侍ふたつきおかき法師ども米塩と施こと事多
五月賑給六月施米いろ〳〵貧窮孤獨の者
ふ米とたまふ〳〵ふり誠ふありがきことなり、

蟬の諸声

多く鳴ふるとい〳〵 玉吟 鳴立てとゝもとふこゝも不隠
山の雨ふりふるきさせしの水ゆふまも 後柏原院

蟬時雨 蟬の多く鳴立るとゝ〳〵 接物ふ蟬の鳴声の
多くゝしまゝきと時雨ふるゝ〳〵といふゝ〳〵

蟬の脱 脱ハ虫の皮と解とゝ〳〵 **せゞ** 鱠 部沖
是ハ蟬退 枯蟬とゝ〳〵

鱠の条
二注を、

す

四月

住吉卯の祭 初卯 紀事 四月

卯の日摂州住吉祭相傳ふ卯の日此地ふ垂跡ありとゝ、この神
輿一基瑞籬の外ふ三の門ふ至ゝて迂車も神主及祝宜
各卯杖と持ることとすれ草とゝ〳〵、
○祭の日竹馬煎餅と齎く者多し、

菅の宮祭 中午

神社啓蒙 小津の神社近江國野州郡ふ在祭所の神三
座所謂大宮二宮三宮是ふ〳〵〳〵○神鮒ハ宇賀魂〳〵此と世

小菅の宮 くの部関白賀茂
祭と称ゝ、

菅笠擔 詣の条ふ注を、

篠の子

和漢三才畍会 篠ハ小竹 最生して草の如し俗ふ笹の字を
用ふ凡篠ふ數種あり、馬篠 兒篠 焼兼篠 五枚篠 此等の
筍皆篠の子ふあり又一種 長間竹 俗ふ奈伊竹といふ 長間
筍篠筍 諸州ともふあり味ひ苦く多くして脂こ微ふ
多く食ふ
ふ耐を、

兼三夏物

涼し 風土記 仲夏長風扇
暑注云此節東南の
風常ふあり俗ふ黄、

鮨 和漢三才畍会 鮨こ釀る法塩
雀長風と名づく、 少し糝しこと〳〵と厭ゝとゝ二
日ふゝて熟る○宇治丸 蚍鮨 ゝこゝ鮨 釣瓶鮨 早鮨
一夜鮨 飯鮨 月夜ふの鮨あり、其頭字の部ふとゝて註
しぬ

雀鮨 毛吹草 摂州福島の雀鮨是ハ江鮒とゝ〳〵
臭あり、その大さ雀ゝ〳〵ありて臭の腹ふ
飯を多く入ることゝ膨ゝて雀の
形ふゝく似ゝり、依て名とゝ〳〵、

馬齒莧 倭名抄 馬莧 和名字萬比留○時
珍日馬齒莧其葉比並して馬の齒の如し園野ふこゝ
生ゝ八七月細花とひらき小ふく光る實と結ぶ 和漢才

高会其性剛強して倒懸の間ふ懸るふ日と經て猶活を景天草の強さと〻ふ 大和本草 此草と軒みのうれ、馬莧内ふ入ら

五月 住吉の御田植 廿八日 摂陽群談 摂州

住吉神田と植る以て神事と行ふ〻相傳ふ神功皇后三韓を征しさまふ〻歸陣のとき長門國より植女とめ〻て五穀農業のことと世ふ廣くそなへふ〻その季乳守の遊女とかてぬこまふよりて遊女今ふ早とと女とつとむといふ〻 紀事

追加 泉州堺乳守の妓女のうち、約束するところの奉公年季明けくる女三人来りてこまと植今日神殿と植てのち妓院の暇と出すといふ〻 住吉の御田ハ古き面ゆもこえて紅深の千草ふ似ること著し赤き袴ふ市女笠といふく是古代の姿の殘まる〻今ハたゞ植る真似とあるのみなり

水馬虫 漢名水黽 わくがもし

其身細長く五六分むくりの黒き虫〻長さ四足ゆて身ハ水ふつゝ〻水上と駈ること馬のごとし依て水馬と名つ〻 畿内西土ゆて塩賣江東の兒童シヲニンホと〻ふ琉紫そてアメカタと〻ふ其臭地黄煎の臭〻関東ケニポツホウ○其色黒赤ほして蹇節ふ似るゆ故ふ鱉虫と〻ふ一説ふ此虫味甘く餳ふ似るゆ故ふ餳賣○今江戸の方言ふアメニポウ

忍冬花 忍冬ふ

部ゆるべし

透百合 和漢三才 面会百

といふ、黄紅の數種あ〻上ふ向ひてひらく、

末摘花 藍の条ふ

花鮮明ふして美く奥州ゆり出つ、

注 八間通志 食貨ノ部云李其品一ならず、白李赤鶯も、

李子

黄と名づく實清く脆し五六月熟す臙脂李ハ皮肉共ふ紅あり味甘く夏熟す、琥珀李ハ皮紅ゆて肉黄〻味微渋し秋熟す、

六月 住吉の御祓 同火替 摂州住吉の社僧御祓と修ふ〻

晦日 紀事 六月小きまハ二十九日ゆ用ひ大きまハ晦日と用ふ當日毎年神輿と舁の輩住吉の松原ふ宿し朝ふ浸つ垢離とふ〻今朝神輿一基と宮前ふ寄せ社僧祝詞と誦して神とうつしまつりして後社司六七十員鞍馬ゆて奉供す既ゆて神輿堺の御旅所ふいくる是〻ゆり先社僧六七輩素絹と着し茶磨笠をそなへ騎馬ゆて神ふ先ゆて堺ふいくる即神と旅所ふ迄ゆて又祝詞と誦そ

夜ふ入神輿住吉ふ還幸堺の市民手毎ふ炬を点しことゝ
とむかふ迎送相連てて白晝の如しこゝと火替といふこ
の日大和國神妙寺山の土ととつて神輿ふそゝれと堺
の宿院神事、わつひハ名越の後ゝとい荒和の後こりゝ

菅貫 ちの部茅の輪 **納涼** 橋もみ 炭俵集 夕みのゝ
の條ふ註も、
あき石ふのり〻り野波 五元集 **涼臺** 開元貴事 長安の富へ暑伏
千人の手と擂干や橋もみ 其角
の中おとふ林亭の内ふ於て畫柱と槇錦と以て結い涼棚
ともも、座具と設け、名妓と召て同ゝ座せゝめ、通ふ相避暑
會と
も、

すゞしき玉 秘藏抄 そらもまていさゝとてら
ぞらる 朗詠 燕脛王招涼之珠當沙月兮
自得○すゞしき玉ハ燕の招涼珠といふ、

菅苅 和漢三才
扇会 菅本綱ふ載も、蓋荊三稜の属ひ多て根異あり、斎
と蚊帳釣草この畏ゝとし、桜もるふ菅の葉ハ茅ふ似滑
澤ふして莖ふ白粉あり、云云○今云菅ハ葉ふ鋸脊あり、
硬く靭も、莖の木白し別ふ莖と抽んて穂と出も、六月

葉と所て乾せハ白色、
笠ふ縫ひて美あり、

蟐 時珍曰其状蝨の如し大さ
身短く節促て足長く毛
あり、樹根及び糞土の中ふ生ずるもの外黄内黑旦ち暮
屋の上ふ生ずるもの外白内黯皆湿熱の氣蒸て化
生ス夏より秋ふ入、
蛾 蟬 とある。

水飯 洗飯 源氏物語 常夏巻ニ
すゝきまゝ、ゝ、ゝ、

露草 糸切歯 下學集ニ銭朝露草ト出ス、一名銀銭花トモフ花の形揩ニ似テ小ク色白ク青クシテ底ニ黒紅のきわひあり、葉ハ三出五出シテ西瓜の葉ニ似タリ高サ二尺ムラ久朝ニ開キ夕ベニ、五月根ヲ掘蒸シテ喰フ味百合の如ク、根老蚕の如シ、故ニ名ヲ甘露子、土鍋、滴露、地瓜子トいフ、異名ヲ草石蚕

る 四月 **盧陀草** 月令博物 筌及び四季子部類ニ、ろゝとハ四月の部ニ出テ是ハヘンルウダ、唯ルウダトハ秋のもじめ花さき、秋の季子ニ成る 大和本草ニヘンルウダ迫来紅夷ルウダ来る是紅夷ルウダ、葉ハ細ク長クシテ三四月黄花ヲひらく、四出シテ一片の間おのく一蓋ヲ出シ花の心ニ實あり、岩梨の実ニ似タリ、夏実のるその年子ヲもちけハ来年花咲実ナルその葉茎根おのく括ヲ、この草常のルウダの性ニ似テ、性猶そゞろとくさい常のルウダより悪臭甚シ

ね 四月 **車前草の花** 秋の部ニ注ス

む 四月 **鼠もちの花** 藪椿と いふ、

な 五月 **刀豆の花** 秋の部ニ注ス

ら 六月 **葎茂る** 和漢三才 圖会本綱ニ葎 故堰道の旁ニ生ズ二月苗ヲ生ズ茎ニ細き刺あり、葉節ニ對シテ生ズ一葉五尖微蒐麻ニ似テ細き歯あり八九月細き紫花を開く、子ヲ結ブ、続虚栗 田麦出中山賤のおとゝひ開る葎うゑ芭蕉

う 五月 **蔓菁の花** 秋のうの部 菁ヨの条下ニ注ス

く 四月 **草下毛** 大和本草 木ゝも下毛あり花相似タリ、初夏細き紅花を発く、一朶ニ群ル開くこと敗將酒の如シ○ 苦草 此詞 四季子 部類 ゝゝそう、青藍接ぎるニ苦草ハ若草の誤リ くきハ〻くきゝの欠畫せるまりよそ爰ニ贅ゝ

橙の花 喜祝ニ用ヒルとゆて正月の部ゆも載ル、この條下ニ注ス

む 六月

初学の惑ひと解く、但し苔草ハはの部ハ注し白もぐ、くぐ見る色、

五月

蛇狀子 本草警蒙 蛇床子、古説ヤブシラミと充つ自剛シヤブシラミ即竊衣、尓雅竊衣注三云芹ハ似て食ハべし、子の大さ麥の如し、西今相合しもあり人の衣ハ着く

六月

金龜子 大和本草

北戸録曰甲蟲也、五六月草蔓ハ生き、南人收て以粉ハ養ハ、本草蟲名の附録ハのせくり、婦人白粉の器中ハ入ぬく、雄ハ緑色光あり、雌ハ灰色光あり、形狀ハ飛蛾ハ似て長し、翼あり、額ハ両角ありて長し、六足あり、俗王虫といふ、

あ

四月

青木の花 花紫黐色ハて美あり、葉ハ桃の葉ハて大あり、實と結ふたしハ青く熟ももぐ紅あり、故ハ漢名桃葉珊瑚といふ、

五月

あつめ汁 五日 さら豆燒豆腐 干鰈ちぎ、ぬくの物と汁ハ燒て食ふ、江とあつめ汁

六月

蘆茂 細き芦間ハ紹巴

兼三

夏物曝 きの部水布の条下ハ注セ、

水の珍、麥とあのさを水飛ハ製

ろ紅、暑中砂糖ハ和し冷水ハ浸し飲

六月

水七粉

五月

神麯製 本草 主治水穀宿食癥結積滯を化ス

時珍曰、兼氏水雲録ニ云五月五日或ハ六月六日、或ハ三伏の日、白麪百斤、菁蒿の葉汁三升、赤小豆の末杏仁泥各三升、蒼耳の葉の汁、野蓼の葉の汁、各三汁を用ひて麪豆杏仁と和して餅ハ作り、林の葉或ハ楮の葉ハ包み、醬醬黄を造る法の如し、黄ある衣の生ぜを待て晒し、これと収む、

蕺菜の花 花四葉ありて白し、葉の臭甚ろし、家圃ハ植れハ繁茂して後ハ除きのくし、篤信翁曰、駿州甲州の山中の村民とくだこの根と堀て、飯の上ハちこ蒸て食ふ甘しふ、

六月

日向葵 大和本草 一名西番葵、花史ハ文菊と云向日葵も漢名ハ巢大ハ莖高し、六月ハ花ハ頂上ハ只一茎のみ、日ハつきてめぐる花ハうらぞ最下品ハ

只日ふつきゝくゆくると賞もるのこと

猪蔓 日の道や葵傾く五月雨 芭蕉

四月 錦

葵 大和本草 冬葵ハ似て別に冬葵ハ葉ハ岐ありて五月ふとうる錦葵ハ葉ハ岐ありて錦葵ハ其花紅紫白數色あり四五月ハ開く錢の大さのごとし実をうるべし翌年莖高らかに花さく三年いたりて莖高く枝多くして西ゝ

千日紅 花鏡 木の高さ二三尺莖淡紫色枝葉密生夏深紫色を開く花千瓣細碎四整ありて毬のごとし枝の秋ハ生ず冬ハ至て巢蓑とゝのごとし花蕚婦ハ採て鬢ハ簪ハ最能久ハ耐ゝ

増補歳時記琴草夏之部終